

脚ニ托する暇なきを以て之

外ニフレガット一艘下田に碇泊

魯人布恬廷軍艦ニテ下田ニ來ル今日小柴へ來ル由ニ

五日之間に英佛三四十艘程江戸海ニ來ル由亞人申立候

支那ハ今度悉く英佛之談しに承伏致し候ニ付軍勢引上ケ直に當所へ廻

り候由ニ

不取敢一寸右之段相報じ申候

十八

端元兄

桂痴

水野筑州ヨリノ答書

一、同日水野筑州ハ奉酬書如左

昨日は尊翰被下置奉謹誦候如貴命連日之雨乍暑中凌能時令御坐候處益御機嫌能被遊御座恐悅奉存候然ハ磐瀬へ之御壹封并御別書とも慥奉落手則過刻同人へ相達御別紙も爲見置申候作良之力薄きハ御歎息御

尤至極ニ御坐候何事も夫故貫兼候事と奉存候何卒貴教之通一雷轟候而邪氣消散ニ至候様仕度奉存候今日も彌相延候處昨日も京便何方ニ滯候哉定而川支なるへし其止ル所迄突留度との密旨ニ而川留川を竊ニ渡し試候ニ至り候由小田原ニ滯留相成居候趣故今日にも川明キ次第着ニ可相成由如何之模様ニ可有之哉渴望罷在候扱亞船本牧へ到來いさハ磐瀬ハ今朝申上候由故文略仕候右ニ付井上磐瀬ハルリスとの應接被仰渡今夕ニも出立之由永井堀織井上岩瀬津田英佛魯渡來之節應接懸兼而用意可致旨被仰付候唐國之戰爭勝利ニ相成退帆の軍艦英佛ニ而二三十艘も品川へ四五日中ニ可參旨其後ニ而は御不都合可相成ニ付條約只今調判致候様ニハルリス申立候由右ハ幸の事京地云々不構當地限御英斷好機會と海防掛一同評決之趣傳聞仕候尊慮如何歎息之至と奉存候御承知とは奉存候得共不取敢御請旁奉申上置候謹言

六月十八日

翠竹

一、同晚岩肥州左内への内書如左

拜展扱今朝報告之一事ニ付唯今出張を被命直ニ品海より出船今夜ニも金川沖ニ至候心得ニ御坐候此封御序ニ御差出可被下候臨發大混淆草ニ頓首

十八日

桂痴

端元兄

天地間之の四大強國を引請候義亦愉快の一ツに御坐候御一笑

一、右岩瀬肥州左呈書如左

翠竹迄御渡朶雲今日相達奉拜展候扱御楮上縷々之趣ハ委曲奉敬領候権館回天之一事ハ何卒御精力を奉仰度候此節ニ至彼蒼ハ命を俟タず暴斷可然と建議スルモノ亦不少と相察申候今日杯其事行ハれ可申ヤと甚懸念御坐候處先々無聲無臭にて安心猶天心之繋る所有事と萬一を企望仕候扱又異船渡來之一條ニ付火急ニ出張を被命只今直ニ品海より出船

仕候此際に臨み猶因循ハ依然タリ誠ニ可歎之甚敷ものニ御坐候佛英陸續入津候ハ如何なる御不都合ニも可至哉と不堪杞憂何卒御鼎力を奉仰度宇高兩候ハも可然御談判所希御坐候○老龍公之建議拜展仕候兎ニ角御忠誠御過慮も御尤なる事と奉存候右ニ付云々敬領○梧桐を洗する事方今之緊要是等ハ愛錯之地位ニ而ハ一舉手一踏足之事と奉存候得共氣餒不足殘念千萬何卒厚御配意被成下邦家之一大害を御芟除奉仰候○官吏調判を懇願スルハ幸之事ニ其願意ニ本ヅキ四十艘餘の入津以前調判尤好機會と可申此場ニ臨ミ不斷ニ失し遂ニ英佛の矛先ニ屈スルハ大辱の甚敷もの然ルニ猶媿々の論アリ應接者も殆困頓萬々諒察所希候臨發大亂書何共失敬之段御海涵可被成下候頓首々々

十八

震

復威公閣下

一、前に記する如く異船渡來ニ付席堂の景況も不容易世上の人心も騷然た

る故先達而出府の御家老本多修理明日出立の御暇出しかと今朝に至り暫く御指留に相成たり

異船渡來ニ
ツキ大老ヨ
ヘリ字和島侯
示談

一、六月十九日巳ノ刻比にもやあるへき伊達遠江守殿御入來ありて御物語ありけるの昨夜大老を申來り唯今往き候ひしに大老のいへるの昨日亞墨利脱カ加船渡來して使節のいへるの此度英吉利佛蘭西の軍艦天竺支那に打勝たる猛勢に乘し日本海へ乗込條約取結ひ可申との事ニ付近々來船可致筈之由其節への暴威に任せ如何ある難題を申出候半も難計夫を拒ミ候時の兵端開き可申是に恐れ望に任せ候様にての重々不都合にも可相成候への唯今の内には是迄之アメリカ假條約に調印致候の、夫を以餘國へはハルリスより品能申談しアメリカ條約の通りにて事済に取計ひ可申と懇意に申聞候趣之夫ニ付如何致し可然哉と評議區々なれと余の京都へ申上たる上方宜しからんと申候へと衆論の左様にての御手後れの事ニなるへきとて更に決せず夫故明日は此事を諸大名に御相談ある様にいたすへくと思ふ

か如何おもふといはれし故遠江守殿も如何にも不容易御大切の御場合なれり群議にかけられんも御尤なるべしと御答の處さらの評議になりたる時遠江守殿初同志之諸侯一同して大老の説に左袒せらるゝ様に頼まれたるなり扱別段に密話せられしを兼而も御申聞ありし伊賀守の事御庭番杯をも調書上り愈姦狀明白なる故其段及言上 上にも不届なる奴かれの兎も角も取計ふへき旨御指圖既に濟たり備中の人物あれの其儘ともおもひたりしに是の 上より伊賀守を退くるならの備中守も京都の始末等も不束なれの一處に取計ひ可然との 上意かれはせんかたなくて遠からぬ程にの兩人とも罷免にもあるへきよしを申されたりとの御事あり伊賀殿の衆人の嫌惡する處にて 公を初諸侯も殊に御盡力ありし事なれの落職は衆庶の慰望にもなるへけれと備中殿の忠直にして言を容るゝの人なるを此人退かれなれ善類逡巡して天下の事日々暴論に歸すへしと 公も遠江殿も共に御痛歎あつて如何にもして有志の缺望を補ふて天下の陵夷を

公、異船渡
來ニツキ大
老ト對談

維持すへき策のあらんかと種々御論談あらせられしあり
 一、此夕公伊井掃部頭殿へ御出ありて墨船渡來にて種々申立候義も有之哉
 二、て人心も何とやらん穩ならず相聞え條約杯の事杯も御濟しにもなるへ
 き歟との沙汰も候か虚實の如何候哉事品によりて天下の御大事にもな
 るへきかと存候がと問はせ玉ふに掃部殿如仰以之外騒々敷事にて云々の
 次第共甚心痛せらるゝ由にて遠江守殿へ物語られたる通りを申出さる故
 公最初關東限りの御取計ひになり來りし事ならんには兎も角もに候へ
 と一段備中殿御上京あつて御伺にも相成 勅答もあらせられし上候への
 夫を脇にして差當りたるとて幕府限りの御裁決となり候ての 天意の程
 も如何あるへからんやいつれに衆議ありて夷情よりの 天意をこそ専ら
 に御評定あり度候へと仰けれの余の兼て京都の事の厚く心得候て是こそ
 第一義なるへけれと言葉を盡し候へと備中の敗軍の將にて言句も出さす
 伊賀の一口に長袖の望、適ふやうにと議するとも果しなき事なれ此

表限りに取計らへずしては覇府の權もなく時機を失ひ天下の事を誤るよ
 しを主張し海防掛りの恐怖而已にて兎も角も差向きたる難を遁れんとの
 情態唯本多越中計の余と同意にて其他の一人の味方もなくて孤立の勢ひ
 なれの偏に貴兄初の援助を依頼するの外なし伊賀杯の小身者の分際とし
 て此頃の權威に誇り傍若無人の有様此度の事杯も我意に任せて京都を押
 付んと致す條言語道斷なりと罵らる 公伊賀殿の京を輕蔑せらるゝの以
 の外に候へともさらは足下の意に任せて再度の伺となりなんにも先比か
 度々申立候ひし御使の人も于今御定あき程なれば彼の是のたと、日數の
 み經たらんには其内に英佛渡來して兵威を以て逼りたらん如何御處置あ
 るにや 天朝崇奉の御趣意の問然なく候へと外寇當前の御取扱ひの別段
 に御意見も候や廟堂にては必戰の御支度も御全備候哉と御詰問あれの掃
 部殿其處に至つての殆當惑にて論も詰り兼候なり夫故に諸侯へ御相談に
 も及はるへきかとも及評議候と申さる故 公諸侯いづれも必戰の覺悟極

りて兵器器械も整ひたりとおもほすにや御軍制の事も度々申候へと今以御治定とも不承候への諸侯とても同様の事にて候はんかと仰けれのされのこそ兄等の御力を頼み候なり然るへき御僉議こそあらまほしけれと申されて更に取締めたる前後の定見も坐さぬ様なりとそ海防懸りの不遜の徒杯の如何に御處置あるやと問はせ給ふに此當難の出来にたれの先つ夫等の事は後日へ譲りて専ら差向たる事を評議いたし今の程の彼等も有らての適はぬ者共なりと申されしとそ

一、大老の遠江守殿へ密示の趣ニ而り伊賀殿の落職も程なき様なりしかと今日又 公へ對せられ伊賀殿を言られたる所にての猶相位にありて妨をもせらるゝさまなれに已に 台慮の伺も濟たる上の一日も早く免せられ又備中殿も一處にとの 台旨の趣にのあれと此人の力足らされとも西城の件も最初より取扱はれ將々有志の首領にも坐せの如何にもして御引留あされたきとの御思慮にて今外國の逼り來らん時に當り外國事務宰相の

首坐を貶斥せられての夷情も不信を抱きて愈六ヶ布事も出来ぬへく又最初を申談し來れる海防懸の面々なども事に當り望を失ひての應接も危踏て徹底致す間布との廉を以て先ツ暫く御延引あられん様いよ入道殿を大老へ入説あらん様にと遠江守殿迄御内書を遣はされたり

一、此日平岡圓四郎來りて京報十四日ニ至つて到着せざる故脇往還并に間道を経て成共來着を謀るへき旨を道中奉行へ被命たり於水府除姦の策昨日に至つて議定せるよし又上田閣老の専ら橋公を推戴の旨を流言せるなとこの事を聞たりと告たり

一、此夕奥御祐筆組頭志賀金八郎殿大道寺七右衛門を招きて本牧横濱邊御警衛を命せらるへき由内定あるよしを密告せらる依之種々御評議あつて備中殿伊賀殿へ御書通あるへきに決せられたり

一、同日土佐殿を御來書如左

然は墨客の忠告之一條迅速御承知且藍山僕兩人へも爲御知被下辱奉謝

候昨夕自藍山も謝詞申越候之如命天下安危之機會ニ御坐候乘此時紀も橋ニ變シ廟堂變革被仰出候ハ、所謂變凶爲吉ニ至可申哉何分是迄之如く優遊不斷ニ而ハ甚以不安次第歎と奉存候先ハ昨日之貴報且謝辭可申上如此御坐候之

固堀ノ件ニ
ツキ堀田松
平兩閣老へ
ノ内書

一、六月廿日今朝堀田備中守殿松平伊賀守殿へ被遣御秘簡如左
今般夷船追々小柴邊へ渡來之趣ニ付見分旁細作差出候處昨夜罷歸申達候趣ニ而ハ持場有之面々ハ夫々守衛之支度有之彈藥等も運送致候向も有之由世上之風聞ニ而も追々増御固場も可被仰出哉ニ相聞申候自然手明之者へ被命候御運ニ而小子等へも被命候御儀ニ候ハ、先年も毎々申上置候通り外様御譜代同様之御場所を被命候而ハ誠ニ以心外至極にて家格ニも拘り先祖へ對候而も殘念之次第と申家來共迄も心服仕兼候氣合ニ有之候間愈守衛被命候御儀ニ候ハ、御家門相應成丈ケ御膝元近キ御場所ニ被仰付候ハ、本懷至極ニ奉存候守衛御場所之儀ニ付而ハ先年

も度々相願候儀ニ御坐候故此段御心得迄ニ申上候間厚御含可然様御取計御頼申候謹言

六月廿日

宇和島侯ヨ
リ大老ト示
談ノ件報書

一、此日伊達遠江守殿ハ御報の御秘簡如左
昨夕は御投翰被下忝奉密誦候昨朝ハ參館早速拜鳳眉如例御密教被成下奉感謝候加之家來下輩迄晝膳被下御至念之御儀奉感荷候昨夕御密示之野父愛牛へ罷越除姦之決策今夕尙申述候心得之處第一植多第二作倉之僕御のはし被成候手段御賢慮之趣父子同様敬服仕候間御深意相含説得仕候半と存候將又今朝如別紙申來候故寫差上候璋兄へも御廻達被下度候廿二日拜眉可申上尤明夕趣次第以短楮今夕野父應接之光景可申上と奉存候恐惶頓首

六月廿日

一、同日同候々之御答書如左

昨夢紀事十三 (安政五年六月)

昨夕御教示之儀承知仕候事と御推考へ被成候得共尙申上候様右之貴報は過刻從是申上候今夕愛牛へ野父罷越候間何等様子可相分明夕可申上候其他過刻呈書にて相濟候儀の不贅候

○布恬廷來舶の主意御密示被下初而承知奉多謝候破竹之強勢ニ而渡來御用心云々尤之儀布恬廷事の尙更歷踐故傍にて墜膽いたし候事と存候

○養儲の事の如命多分のひ可申京報延着の甚奉仰願居候明日の晝後御急用候の、弘尾へ參居候間彼方へ御書通奉希候頓首

即時

一葉ちる秋かせまたてふきおらん日かけさゆる桐の太木を

一、遠江守殿御書中に有之御廻し御別紙如左

愛牛密翰書拔

然は今日惣出仕之儀御内話申嚴敷申談今日御參詣伺濟候得共御延引之

義小子の相願可申是非とも今日惣出仕之義申張一旦之處同意にて左様可相成候處又々例之横鎗の入り種々之故障等申出候多分其説ニ同シ又々不行心外之至候此段内々御咄申候將又明廿一日の御暇不時御禮是も延し候而宜敷事然るに衆議廿二日惣出仕ニ相定申候御尋之廉も達シ候振ニ取調候小子の意との丸て違候間夫も段々討論致候へとも伊印妙ニ申なし波印櫻の事と致推察候慢心ニ而實ニ頼みニ不相成御役人も多分同意力ニ及不申奴候共御存意御申述ニ相成候而宜敷譯ニ可致と存候只々何事も小子か不行届候故御調合不整相成候段恐縮之至ニ候何分未全キ御奉公も覺束無く候實以心痛仕候云々

二白昨夕越前參り右之段同斷咄置申候御序も候の、宜敷希上候云々小生も昨日退出後中暑發熱頭痛殆困り候得共御時節柄之義押而登城仕候心得ニは候得共一兩日の出兼可申哉是非々々取續き候心得ニ御坐候御休意希上候云々

一、此日岩瀬肥洲密呈翰如左

諸侯は惣出仕にも有之様子ニ御坐候

拜具昨日亞人引會之一條は今日平謙左内方迄罷出候積故定而同人より委細御承知被爲在候御儀と奉存候間別段縷述不仕候魯英佛之強梁をも防キ條約之調判も先延し候事何分行届不申昨今一時拒絶ニ而愈各國渡來之上押印に相成候而は亞之信義も更ニ不相立其上目前之船數ニ恐れ候事ニのみ相成愈体裁も難相立國內之時議ハ來月下旬とても同様之事只今押印ハ却而不得止之事も相分り平穩無事之時ハ

機會ニ可有之哉と奉存居候縷々平謙より可申上候

此ヶ條漏泄可仕事ニ無之候間其思召ニ願上候
○京師へ報告之事如何可相成哉と奉存候處條約濟の事を奉書にて淡泊

ニ可被仰遣哉の議論ニ有之候是は木同之主張する處と奉存候最初ハ暴斷ニ候ハ、却而辭も有之候得共一旦上使にて御伺之儀を

勅旨通り之御取扱ニも無之して今更一紙の報にてハ先般の事ニ懲候而紙片ニ托し事を濟せ候など、申事ニ相成可申是ハいかにも

京師を御輕蔑の姿にも相見え候様ニ被存甚不可然事と思考仕候たとへ調印濟其事を被仰進候迄の事にも致せ一旦御伺に相成居候事の結局故御使を以不被仰進候而は首尾御扱相具し不申と奉存候殊ニ此節所司代町奉行御附とも明き居大切之御時節いかにも 京師はわきのけニ相成候様に辭を立られ致方無之一体所司代之被召候は何故歎不辨候得共諸人人字不相定内は所司代も出來可申時節は無之扱ハ心痛仕候何卒御固も一日も速ニ被仰出候様ニと此節頻ニ建言仕居候京師御使之處ハ尊慮如何被爲在候哉猶御勘考被爲在候上御鼎力を奉希置候事ニ御坐候

○亞鉛の大炮はいかにも奇形甚この奇巧ハ實ニ驚入申候ミヨシの方ニ有之候長カノンハ二百四十斤ニ候其大炮を八人にて運轉自在を極め

其餘諸器械一々驚目ケベル隊悉く遠丁のヤグラ付の筒にてクリ出シ
ドンドルニ御坐候炮隊の整ひ方抔別段なる事感服仕候劔のみを持候
隊は甚愚を極め是は可笑ものに御座候

○今日は魯船入津之積り是も國帝の命にて吾國の爲政府へ忠告の事有
之由定而都下にて應接之都合ニ可相成と奉存候得共先不取敢永玄堀
織津半出張仕候私儀ハ先今日は出張不仕候外ニ御用向有之残り居申
候

○京師御使之事ハ溜詰ニ可相成哉難計候得共可相成は木同ニ仕度左候
ヘハ甚好都合ニ相成可申何卒御勘考奉希度候兎ニ角一片紙の方餘程
闇ニ而は決し居候哉に被考候間救業難く可有之明日も冒顔激論覺悟
仕居候

右等之急緊は平謙を遠へ遣し論し度ものと奉存居候時艱如此泣血不
管草々閣筆

念日

震

復威公閣下

二白只今退出取急キ相認め乱筆大失敬御高許可被成下候以上

右は七時頃左内迄差出候也

一、此夕岩肥州の旨を受平山謙二郎左内方へ罷越密話大概

今度異船渡來ニ付岩瀬等應接之處渡來之墨艦は本月十三日頃香港出

帆魯船は十五日頃同所出帆却而亞艦を追越し十七日下田へ入津自負
之狀有之畢竟亞魯之間何か不和之趣ニ相聞候由扱小柴沖にて應接の
船名ハリス申立候趣ハ今度各國渡來之旨趣不容易ニ付爲忠告に彼渡

來之蒸氣船ニ取乗り下田役人も爲乗組急速罷越候由今度魯應接并英
佛御扱如何相成候哉就中英は實ニ破竹之勢印度支那等都而不動干戈
して如意承伏させ何も條約出來之由尤何方も萬國普通之事ニ致し候
事之由今度應接も亞同様之御仕向ニ而ハ中々承知致間敷如何被成

平山謙二郎
來リテ調印
ノ件細報

候哉と詰問ニ付吾ニ而の亞へ應候外ニ致方の決して無之何方へ對しても同様之趣之旨申答候處左ニ而の承伏致間敷猶勘考可然旨申ニ付又答候の此上如何様復思候而も外ニ致方の無之候併亞ニ而如何致可然との考案も候の夫にて亦復思慮も可致と申候處左候の條約ニ調印候て夫を以亞も如此と應接候の拜承可申無印之約書にての迎も領承致間敷旨ニ付又答候の夫レニ而の數十艘之來船ニ恐れ俄ニ調印致候姿ニ相成元來亞條約へ調印延引の不得止譯柄の承知之通りニテ速ニ出來候事候への是迄遲引ニ不致咎乍然右條約書之調印候への夫を以英いか様申出候とも亞取扱周旋可申哉と相尋候處其儀の請合申候段從容申聞候故左候の證書可指出哉と申候への即席草案相認指出候處明細行届有之尙此上如何様とも相認可申何分調印さへ出來候への急度受合申候趣如此申旨決而變改不致如金石と申立ニ付左候の群來之船艦ニ避易ニ而の無之遲速の雖有之いつか調印候を今度

機會にて調印之趣意にて猶談判之上則調印相渡候由且又亞申への英のくれく猛勢中、亞同様への參り兼候元來前にも申如く諸國共承伏させ候得共大東洋にて日本國計り未如意不相成故今度渡來萬國同様ニ致ス積り猶鎖國之故習にて難解候得は兵威を以て如意迄取詰候勢之由申立候由且今度魯も國王命を奉し忠告有之由國書之有無の不相知よし則今廿日小柴沖迄入津之筈のよし
右之趣ニ有之岩瀬等引取今日の永井始魯之應接出掛候故岩の先ッ不罷越尙又

朝廷之周旋盡力之よし右條約書調印亞引請英等取扱可申との趣にて閣安意の姿相見例之歎息之趣等密話のよしニ
尤右は秘中之大秘誓て他泄を禁し候由

一、此日未の刻過て御老中御連名之御奉書御到來如左
御用之儀候間明廿一日四時登

城可有之候以上 六月廿日 御老中御連名

御名殿

一、同時土佐守殿御内書如左

唯今奉書到來明日四時登城被命候上國の御警衛なるへし弊國百里之海濱加之上國唯迷惑之二字横胸中早春餘り暴論を吐き今更不得辭可憐く呵々頓首

平岡圓四郎
ヨリ橋公調
印憤怒ノ由
チ告ケ

一、此晚平岡圓四郎來りて一橋殿 勅を犯して假條約へ調印せし事を被聞召殊の外御憤怒にて水老公へも御建白あるへき旨を被仰進則圓四郎御使として安島彌次郎か許へ往きたる由明日明後日之内尾張殿御謀し合せ御建白あるべきとの思召の由を内告セリ

一、此夜例の面々被召出明日御用被仰蒙候上御伺之御心構等種々御評論ありて御書取の御草稿等も御出來あり

一、六月廿一日昨夕御奉書ニより今朝御登城之處御黒書院於松之溜御大老

御老中御列座御用番松平伊賀守殿被仰渡尙又御渡之御書附如左

袖うら

御名

固場仰出サ
レシ御請、
伺ヒ仰立テ
ラレ等ノ件

武州神奈川横濱邊御警衛被仰付候諸事

嚴重可被申付候尤松平隱岐守可申合候

右ニ付 台命之趣奉畏候と申御請被仰上難有との御辭合なかりしかは列坐の衆中も愕然たる顔色なりしとぞ

右相濟候上 公大廊下御部屋前ニ而大目付池田播磨守殿へ御逢にて仰られし唯今 台命を蒙候御警衛之義難有御請申上兼し譯ハ近年毎々被仰出もこれあり參觀等多人數召連不申様との御沙汰にて候へハ兼而御届に及候如く節儉にて供立迄も精々減省致し無人の折柄なれハ僅ある人數ならてハ難指出候に風説の趣にてハ數十艘渡來の由警衛抗敵可相叶事にもあらず殊に固場所之儀横濱神奈川とありてハ場廣の事にて守衛行届くへ

くも存しられず候への國許人数召呼候迄の出勢之儀御猶豫被下度夫とも有合人数にて宜候半にの武頭に足輕二三十人指添へ候位の事の何時にても指支あく候への此兩端いつれとか伺ひたく將又不肖ながら御家門に例候身分松山杯と等し並の御取扱にての祖先へ對しても迷惑致し家來共も不服なり且同席の面々へも向くへき面皮もこれなきにより御場所駈と相定候までの人數も指出すましく候への何分早速の御指圖有之度素々格別の要地とも不存候間自身の出張の決而不致事と心得候と御達しありしに播州被申しの播州守の一己を而の御答も御指圖も申上難けれのいつれに閣老衆へ相達候譯にて此際甚困窮仕候との御答故左候の、寡人を直に閣老衆へ申述へく候への其段閣中へ申入可給哉差向きたる御職分故先ツ足下迄存分を申達せしなりと仰られけれの播州然る思召に候の、迷惑なから閣老衆へ相伺ひ御答可申上とて引入れ良暫ありて申上られし御人数の義の多少に限らず御有合にて宜候への御國元より召呼はれ候にの不

及御出張の事の臨時の事故御聞置なされ候との御答ありきと申されしかの、公又横濱神奈川邊と申ての茫乎たる事有合の少人数何方へ指出候事あるや又戦闘の御趣意なるか和親の御目的に候哉是も何度と仰られ御書取を指出されしかの御場所の義の御勘定奉行の取扱にて未だ相定り兼たり御人数の義の尙又御指圖これあり候まで御差出に不及和戦之義の御書取も候への午後伺取候て申上候半と御答申上られしかの尙又閣老衆へ物語候半と播州との御應對の濟たる後堀田備中殿へ御達にて前の事共御申述御當惑の御内情御物語に及はれしかの備中殿御申にの今日の台命御不満候哉御請振も外々との替りて思召有り氣に候との事故、公如何にも甚不平にて候ひき第一御家門を御譜代同様の御取扱にての心外千萬の至りにて昨日も申上し如く家格に拘はり身分を取り家來共へも面白なしと尙又靨縷御陳述に及はれしかの備中殿一御尤の御義を伺ひ候昨日御書中にて承知候へとも最早御評決の末なりし故せんかたもなく

今日の次第とありにたり已に降命の上の取返すべくもあらず候へは此上は場所柄の儀を御存分に御書取もて御申立になり候へ、其上にて尙又御評議も可有之と御申にて又密に此度の被仰出の海防懸りへも御評議なく御勘定奉行へも沙汰せられさりし故場所等も定かならずかた／＼指圖にも指支候と歎息せられたり此語次に京報の事問はせられしにいまだ消息これあきよし御使の事如何と仰せられしに是の調印濟を奉書て御奏上の御評議ある由を申上られしとぞ

一、今日御請振も難有等の御言辭無之御儀故御禮御廻勤等もなかりしなり
一、今日於營中御警衛向之儀に付御應答末大目付池田播磨守殿へ御指出に相成御書取如左

今日御警衛向被 仰付候義戦闘之御趣意も可有之哉又御警衛迄之義も御坐候哉兩様の内早速御指圖可被下候且又萬國通法之義は家來末々之

者に至り候而は心得不申義故彼に於て禮義と存し候事も我に於て不禮と心得間違候而爭端相開可申も不被計奉存候固警衛被

仰付候上は家來共精々勇氣勵まし置不申候半而は非常之節御用にも立兼可申の申迄も無き義に御坐候得共僻邑之野人國家之事体等も相心得不申義故右様勇氣に於候處は自然意外之奇禍を引出候も難計甚心痛仕候依之何分是非戦闘之思召に候へ、猶又其邊篤と相伺申付方も可有之候併御警衛迄之思召に而急度和親之御待接に候へ、又其心得に致し一体寛悠之振合に申付置度奉存候左すれは先年之節との御趣意柄も相替申候間今般別段之ヶ條伺相立候而何分

公邊御趣意に不背様仕度奉存候吳、從來之振合に而相守候へ、縦戦闘之御趣意に無之候とも自然野夫之佛戾を俄に争撃相始可申も豫め難計奉存候萬一私共手元より御趣意相破候様相成候而は奉對

上申譯も無御座候間今般嚴固之御趣意伺取候迄は固人數指出候儀見合

置申候此旨厚御評議之程奉希候以上

六月廿一日

一、今日諸家被仰付如左

松平讚岐守	松平相摸守	<small>(京都御警衛)</small> 藤堂和泉守
松平越中守	松平内藏頭	<small>(攝州兵庫)</small> 松平大膳太夫
大坂海岸	松平土佐守	<small>(泉州堺表)</small> 立花飛彈守
松平出羽守		<small>(上總國)</small> 丹羽左京太夫

一、御歸殿之上御認ニ相成暮時前知邸を以堀田備中守殿へ御書取御封物ニ而指出さる如左

拙出儀不肖不才の申迄も無之候得共是迄奉對 公邊爲差不調法も無御坐哉ニ奉存候處今日之被 仰付ニ而は家格も身分も更ニ相立不申候全ク外様同様之御取扱ニ而何共心外至極御情なき御遣ひ方ニ而祖先へ對し世間ニ對し面皮も無之家來共ニ之吹聴仕候も當惑仕候尤

公命の違背不仕候得共隠岐守の申合候様等之儀は全く隠岐守幕下も同様之次第ニ而別而迷惑仕候間此儀は隠岐守方へ拙者方へ爲申合候様隠岐守へ被仰付可被下候拙者よりの不申合候間此段御聞置可被下候拙者家之儀は寛永之度

將軍様御動座も被爲在候程之御時節ニ御名代可被仰付様被仰出其後も外様同様御固場所等へ不被仰付趣等上下一統厚難有存詰罷在候處拙者代ニ相成僻遠之場所警衛いたし隠岐守申合候様ニと御譜代並之御取扱ニ相成候而の不徳不才故との乍申世上へ對し候ても耻辱之至ニ而自然家來共思ひ入れも薄く相成御用之筋も果敢く敷相勤まり兼可申哉と深く心痛仕候畢竟御警衛被仰付候上は上下共ニ必死の覺悟ニ而持固め可申の勿論に御坐候處拙者初横濱神奈川等之疎外之場へ御捨殺しに相成候姿ニ候得は國元へ相聞え候而も家中之者共の不及申國民末々迄も如何相心得可申哉於拙者も乍不肖御家門之歴々爲夷人屍を不要之海

濱ニ曝候ては却而

公邊之御恥辱とも奉存候へば何様之儀有之共自身出張の不仕心得ニ御坐候將又如近年夷人應接神奈川横濱邊ニ相成候而も御役人衆應接場所警衛等之儀は決而不被 仰付候様自唯今及御斷置申候都而右様之次第共の何等之御科代ニ可有御座哉以後之心得方も御坐候得ば相伺置度奉存候若又左様之御譯ニも無御坐御繰廻し迄の御儀ニも候の、何分ニも御家門相當之勤向ニ被仰付候様相願候右之趣御汲察被下御厚評之程所仰希御坐候以上

六月廿一日

御名

一、右御封物へ御同封にて被遣御内翰如左

今朝は於 營中拜顔大慶爾來御安全珍重之儀ニ御坐候陳は今朝御内、御尊も相伺候ニ付歎願書一通差出候何卒早々御評議之上心願通り被仰付候様奉希候外ニ御警衛筋被命候ニ付伺書一通差出候是亦早々御評議

之上御指圖可被下候右得貴意度如此御坐候謹言

六月廿一日

御名

堀田備中守様

今朝池田播磨守を以相伺置候通り今般之御警衛戦闘之御趣意ニ候哉又の和親の御主意ニ候哉若戦闘之御趣意ニ候の、數十艘之夷艦の僅之用意人數位ニ而は逆も御用ニ難相立奉存候左すれの國許の許多之人數呼寄申置度候得共國許海岸之儀も甚無心許此等之儀如何相心得可然哉御場所等之方嚴重ニいたし候への自然領内之海岸手薄ニ相成非常の節防禦筋行届兼可申奉存候此儀は如何相心得可申哉

一、戦闘御趣意ニ候の、軍令嚴肅無之候而は非常之節用向も差支自ら主將之恥辱とも相成申義出來可仕候既先年御殿山御固之節臺場築立置候處夜中毀損致候義等も有之候ニ付宿役人共へ急度申付候處一向心

得不申旨申出夫切りニ相成家來共于今不平ニ存罷在候依之今般御場所之分は私領同然取締り政事向一手に御任せ被下候様奉願候尤要害切所等見立種々建築構造等可仕候間此義も御聞置可被下候

一陣屋火藥庫并武器庫兵糧貯場其外種々器械藏收等之爲其用相辨し候程之地面御貸渡被仰付被下候様奉願候尤火藥等之義は地形大切ニ候間場所柄追々見計可申上候

一外蕃之戰法風勢を考前後近傍之人家を燒立其隙ニ乘し前面より一頓に責立候事通常之規定ニ候間何分豫め人家等燒拂四方縱横自在之戰地ニ致し後顧之患無之様仕置且上陸も可仕心得候御固所ニ地雷火仕掛置可申候此等之義尤緊要之儀に御座候間早速御聞濟相成候様奉願候乍去此節不時燒拂候も苛酷之義ニ候間速ニ立退之義被仰付可被下候尤引拂候迄ハ固人數差出不申候

一御固場所海岸之義潮汐之模様ニより射放之度を失ひ候患も有之且夷

船江戸海に乘入候節唯陸地を迹附致候も餘り心外之義ニ御坐候上臺場等も無之御場所故水夫乗組軍艦一隻并バッテリー五艘程御貸渡奉願候尤大炮彈藥等の諸品は相應ニ御備御渡し可被下候

右之條々御評議之上和戰之両様且持場經界并人數可指出要處之義は早速御指圖可被下候此條不分明候而は人數心得方申渡も難出來候故假令人數指出候様被仰出候而も御指圖濟迄は指出兼候間此段御汲察之上何分にも早々御指圖可被下候以上

六月廿一日

御名

昨夢紀事第十三卷終

昨夢紀事第十四卷

土州候ヨリ
三條公ノ返
書ヲ廻達ス

六月廿一日
一、此日土佐守殿ハ被進シ御内書中如左

然ハ別紙三條ハ差越候ニ付入電覽可申則差出申候御一閱後ニ御返答可
被下候以此書相考候ニいつれ於 朝廷年長英明をと申候ハ御評議中歟
と奉存候此度英佛渡來之騷動ニ而
建儲御延引之處故都合よろしく御座候ハ、京師ハ云々の間に合可申哉
と存候此間ニ林甫落職一日も早ク致度物ニ御坐候長面先生ハも今日申
遣候左様御承知可被下候也頓首

未時

酷暑之節愈御清福恭賀之至候然ハ本月二日發飛檄密書拜讀候其後越前

家驛使を以御達書之旨是亦得其意候右急務之事條而已早々申入候西城之義御内定ニも相成候歟ニ付委曲之御密諭爲國家感佩候且越前伊達家等ノ内書之趣も致承知候夫々尤之事ニ候早速彼是及周旋候然處最早養君被仰出旨之達し申來候由但先例御人體ノ御治定之上言上ニ而前以奏達ノ無之由先蹤之手續之趣候但先達而

御内沙汰も有之候事尋常之例トハ違候得共子細も有之候歟右故自然幼年之方ニ申來候而は最初 御内諭急務多端之時節政務御扶助のため年長之方ト申處ニ適當不致且此時節急速被建候ノ全國家之爲之處無其詮候而諸般多忙ニ相成可申肝要を失し候歟ト遺憾之至ニ候因而ハ彼是心配候處前件養君之儀達書之趣御人体未申來先達 御沙汰も有之候事故如何ト傳奏レ 御尋被 仰出候趣承り候實ニ極秘密之儀ニ候得共爰ニ無余義筋壅滯之難事有之候痛歎候有志之輩ノ當今之形勢致遙察必賢且長ニ無之候而ハ難相成ト致企望候ノ決而私謁之義ニ無之爲 皇國徳川

御家之爲 公武一致之事トモ候得共實ニ不可解義甚以痛心至極ニ存候陽明其他要路之方ニも内話心配之事ニ候其内經數日候而ハ事落着ニ可相成哉ト甚當惑候事ニ候且又大老家へ從下拙諭告可然哉之旨委細承知御承知之通從來懇志之義ニ候處右等之事件ニ付而ハ一切往來も無之内々勘考候筋も有之候處種々紛亂之趣共承及候當地外縁家ニ要路も有之彼是心配いたし候筋御坐候其次第何共痛歎之至姦似真ト申義は可恐ト存候乍去右等ハ不令承知候振を以一書令進達置候如何聞取可相成哉何分國家公武之御爲之義先達而御内沙汰備中ニ被 仰合候御趣意を以周旋有之候事トモ備中守ニは上京之砌

御趣意之程心服之様子ニ承候定而勘考候事ト委曲申遣しハ致候へとも甚々無覺東御坐候陽明家より尾州へ内達之義ハ是も彼邊へ篤ト談合候半最前委細被申遣候趣其上之筋も無如才被申込旨ニ候但右等は別而ハ御莫言ハ御坐候先早々要用而已申入度如此候猶又御考慮有之度ト存

候也頓首

六月十五日

梨陰

容堂君 密用

二白紀之事近キ御筋目無余儀御子細も有之候歟然レの當今急務之時ニ候間爾後 西城之養君ニ被成候而も可然歟と申義當地にて申事も御坐候其御地ニ而レ此儀無之哉如何御見込候哉何分又々後便可申入候先達而家來其御地へ罷出候節御懇情御取扱忝存候右の尙又跡より御挨拶等可申入候今便差急不能其義御海容可有之候以上

此書中の御一覽後早々御投火可有之候以上

三國大學ヨ
左内へ來
狀

一、此日京都三國大學ヨ橋本左内へ來ル内狀之内如左

本月六日出四日限華翰去十一日曉子半刻當地貴邸ヨ相達忝拜閣中略扱萬事の姑閣之御内託之一條早速小筑へ及密話昨十二日午刻左府公より當地尾邸へ御書翰御渡極急便差送候様被仰遣候右御文意は 西城之義

御名指の無之候得共 天意の唯英傑人望年長之三件を以御選被遊度御事御相違無之風説ニの 宸慮南紀ニ有之抔と申立候精神も有之趣候得共決而左様之義無之ト申處分明御書取ニ相成候事ニ御坐候彦巨老への前内府公ヨ右之次第可被申遣筈是の左府公ヨ前内府公へ昨日中ニの御説得之筈ニ併是の未タ御出帖之有無の承り不申候御承知之通巨老の九條家ト親睦之事故甚六ヶ布色ニ配慮仕居候義ニ御坐候此義篤と突留之上御案内申度差扣居候得共小筑の月番小生も折節公私多端段々延緩致候而の如何と奉存候ニ付右之次第御安慮のため早々貴邸ヨ此急書差下候義ニ御坐候先般も事十分ニ調候得共當路之專權妄ニ御書下け之文を被改遣憾千萬當時の色々案外之光景ニ相成候事も有之有志之者杞憂而已御坐候併今度右左——御書翰ニ而尾公奮發回天之御力所仰望御坐候中略又當地風評にの君候御事閣老の爲御奔走忠告之列候を遊説被遊候趣色々申唱一向御評判不宜尾公之正論を面折被遊候様之流言も存之是

ハ甚如何敷定而流言と小生も堅ク言張居候處幸以今度御狀面ニ而右虛
説明白ニ相成幸ニ得一助候依之最早不枝葉專 皇國御靜謐新政御更張
之樞機タルヲ以テ必死之奔走漸々前文之場合ニ相運ヒ候下略

六月十三日申半刻

一、六月廿二日昨夜御觸達ニ付今朝五時御供揃ニ而御登

城之處於御黒書院松溜御老中列坐御用番代久世大和守殿御達御書附如左

但佐倉閣上田閣引

亞墨利加條約之次第

朝廷ニ御伺相成候處深被爲惱

叡慮候御次第被

仰進候段御尤之御儀ニ付再應各赤心御尋ニ相成今少しニ而存意書も揃
候間其上篤と御勘考之上御決着可被遊

思召ニ而精々御差急キ被爲在候折柄今度魯亞兩國之船渡來申立候趣は

憲出仕、調
印ノ幕達及
後圖垂問

英佛之軍艦近日渡來可致尤清國ニ十分打勝其勢ニ乘し押懸候事ニ付應
接方甚御面倒ニ可相成ト御案思申上候併假條約之通御承知ニ相成調印
も相濟候ハ、英佛ハ如何様ニも申諭御迷惑ニ相成不申様取計可申旨
亞國使節申立候ニ付

御勘考被遊候處如何程御迷惑ニ相成候とも

朝廷ニ申立濟ニ相成不申候而は御取計難被遊候御儀乍去忽爭端を開萬
一清國之覆轍を踐候様之儀出來候而は不容易御儀ニ付井上信濃守岩瀬
肥後守於神奈川調印致し使節ニ相渡候誠ニ無御據御場合ニ付右様之御
取計ニは相成候得共

朝廷ニ而御配慮之段は實以御尤之御儀ニ付此後之御取締方沿海御手當
等充實ニ相成被爲安

叡慮候様可被遊

思召ニ候此度之御一條不取敢宿次奉書を以京都ニ被仰進委細之義は追

被仰進候事ニ候此後之御處置ニ付考意も有之向は無覆藏可被申聞候事
右ニ付諸侯議論紛紜たりしかと公に何の仰する事もなくて御退出な
れたり

一、右御達之趣御同席方に御達有之候様大目付遠山隼人正被相達ニ付御銘
様阿州作州因州明石御直書添御書附被遣之知邸御使者にて今夜持參候事

一、京都へ幕府へ被仰上候爲之奉書等左之通ニ有之候

一筆致啓達候外國御取扱方之儀ニ付御使備中守被差登委細之事情及言
上候處 勅答之趣も有之候ニ付猶又御三家以下諸大名へ御尋有之追々
差出候御答書等入 叡覽其上御處置可有之思召之處哀早亞墨利迦條約
御取結無之而ハ難相成場合ニ至リ實ニ不被爲得止事次第ニ付再應被仰
進候日合も無之無御餘義御決着ニ相成候は深く御斟酌思召候得共先般
被仰進候趣を以今度條約爲御取替有之候右無御餘義次第委細別紙之通
ニ候此段先不取敢宜有

奏聞旨被仰出候恐惶謹言

脇坂中務大輔

安宅判

内藤紀伊守

信親判

久世大和守

廣周判

松平伊賀守

忠固判

堀田備中守

正睦判

六月廿一日

廣橋大納言殿

萬里小路大納言殿

昨夢紀事十四 (安政五年六月)

亞墨利加條約之次第先達而別段御使を以被仰進候處深く被爲惱
 叡慮候御次第被仰出候段御尤之御儀ニ付再應御三家已下諸大名へ赤心
 御尋ニ相成今少々ニ而存意書も揃候間其上篤と御勘考之上御決定可被
 遊思召ニ而精々御差急被爲在候折柄今度魯西亞亞墨利迦兩國之船渡來
 申立候趣を以英吉利佛蘭西之軍艦近日渡來可致尤清國ニ十分打勝其勢
 ニ乘し押懸候事ニ付應接方甚御面倒ニ可相成と御案思申上候併仮條約
 之通御承知相成調印も相濟候ハ、英佛ヘハ如何様ニも申諭御迷惑ニ相
 成不申様取計可申旨亞國使節申立候ニ付御勘考被遊候處如何程御迷惑
 相成候とも

朝廷へ御申上濟ニ相成不申候而は御取計難被遊御儀乍去忽爭端を開萬
 一清國之覆轍を踐候様之儀出來候而は不容易御儀ニ付井上信濃守岩瀬
 肥後守於神奈川調印致し使節へ相渡候誠ニ無御據御場合ニ付右様之御
 取計ニ相成候得共

朝廷ニ而御配慮之段ハ實以御尤之御儀ニ付此後之御取締方沿海御手當
 等充實ニ相成被爲安 叡慮候様可被遊思召ニ候委細之儀は猶追々可被
 仰進候得共先此段可被遂

奏聞候事

一此日午後安島彌次郎老公の御書を持參し且精勤之者共へ御染筆被下し
 事を傳達せり此時彌次郎のいへるハ老公も是迄ハ幕府の御達勅にもなる
 へき歟と御憂慮あらせられし事なりしに今日となりてハ已ニ顯著の事と
 なりて候へハ大老を初其事に關りたる面々速ニ御擯拆あつて幕府の爲に
 天朝へ被謝度との思召立の旨を密告せり平岡圓四圓も來會して一橋殿に
 も同じ思召ニ而被爲在候事杯を彌次郎と申合せて圓四圓ハ橋邸へとて出
 行きたり老公御内書如左

乍暑中仲秋之景光ニ候得共先以邪氣之無御障大賀く此上如何様相成
 候哉世態大息いたし候御見舞迄早々也

安島彌次郎
 水老公ノ書
 ナ持參ス

六月廿一 夜燈下老眼御推覽可給候

松越殿参

水隠

別紙先達而貴書にて縷々御示と相成尙又此度貴臣云々熟覽仕家來安彌
こも相尋委曲承り候處天下之御爲深く御存し入故との乍申追々厚き御
丹誠之段々實以而感佩可述様も無之候尙貴臣共々至迄斯迄に至誠忠膽
感するに餘りある事に存候乍勿論何事と不寄徳川家之御爲此上共御精
忠之程於拙老祈念存候委細の御家臣迄可申通此段申進候也

六月廿一日 燈下乱筆御推覽可給候

追而申進候ケ様の世態と相成候ての三家御家門の儀の別而親しく無之
候而の不相成取分貴君の如き忠勇之仁との御懇意と不相成候ての不相
成候故今日尾州殿へも申遣候への貴君こも其思召にて尾州へ御懇意被
下候様御頼申候也

右本文と認落候故別紙と申候事

又申候夷狄一條にて此間中を筆取つゝけ首も扱候様いたみ申候萬々
一御違

勅に相成候ては決して不相濟候故今日 尾州へも云云申遣候定て是を
も認可出とは存候へ共たとへ不出候共拙老父子の大老初へ連名と
て明日出し候心得と御座候定て一をも出し可申田への一より相談有
之様と申遣候處田よりも御出しと可相成とは存候へ共尙田の方の
貴兄よりも云々御申と相成候ての如何尤田へ相談申上田を不出との
事と候の、一計出し候やう申遣候への是亦御合と申上候

一 貴臣盡力周旋云々付今曉景せわしき所にて老眼走筆いたし候故是
亦微臣の相達候様申付候何も此段早々御火中へ
一 魯墨を云々申候とて關佛とても人類と候への参り候て直と發炮もい
たし申間敷候への

京地へ御伺と相成間なき事も有之間敷哉全くの云々申早く條約を濟

せ候計策との被存候たとへ打かけ候共腹中の戦争の心への有之間敷
威しと被存候得共たどしにても打かけ候へ、此方へても挨拶いたし
候事へ可相成か扱又應接之模様へ寄候て、魯へ一度大坂へも参り
候へ、開佛へ指圖致し大坂へ不遣のよろしくと苦勞いたし候御火中

一、同時土佐守殿へ御密啓あり如左

今日退城後疲勞不少山紫水明之時への至候得共一滴之酒飲を得ず是亦
近日之變事へ扱只今内へ傳聞昨日今日と、京都へ撤着、養君へ一橋と
勅命之趣に御坐候足下如何御承知被成候哉萬一愈左様之事へ御坐候へ
、是を機會に仕不申てり

養君之一條轉凶爲吉の六ヶ鋪と奉存候先の草へ右之段奉申上度如此御
坐候頓首 廿二日

一、同日遠江守殿へ御廻しへ相成御大老へ遠江守殿へ之内書寫如左

字和島侯ヨ
リ大老ノ書
翰ヲ廻ス

彌御安清奉賀候過日も御枉駕段へ御懇情忝奉存候兼而御内話之佐印伊
印も何分其儘指置難キ時宜へ相成昨夕へ引込へ相成申候尤伊印の申迄
も無之佐印之義の御申越之次第も有之先跡廻りへ可致と心配致候得と
も段へ之、御沙汰も御尤之義へ候間一緒之御取計へ相成申候且又異人
之取扱等も有之候得共當人實病之節へ不得止事人をもかへ可申義旁此
節へ而も同然、は有間敷入道様へも左様相成宜しき様被仰候只管

上之御爲方而已心配いたし
上慮を以取計候義への候得共素より不肖之私如何様人口へ懸り可申も
難計兼而之御懇意此處御合置希上候且又惣出仕も生憎御無人へ而達し
方不都合も可有之哉心配いたし候其上案外早への調印小子もあきれ申
候何分致方も無き次第へ相成達へ振等不行届大へ心配いたし候何分へ
貴君之御忠節を力へ致相勤候事へ候先は右内へ御吹聴旁如此乍末入道
様へも宜御傳聲希上候委細は拜顔之上萬へ申上候大乱筆早へ頓首

六月廿二日 跡御投火

比子根

宇和島様内用

薩州侯ヨリ
ノ内書

一、此日薩州ノ飛脚到來薩摩守殿ノ被進候御内書如左

西郷より之尊書忝奉存候甚暑之節御坐候得共愈御安榮奉賀壽候公私御繁用之由種々御配慮之御事と奉存候然は

西城之一條委細致拜承候扱々致方も無之都合と相成申候大奥方申來候ニも志印事も専ら紀之方ハ心をはこひ本印ハ取入候段相聞得申候

一水老之御事閣中も反と見込ミのよし誠ニ歎ケ敷事ニ御坐候何卒此義ハ是非ニ御説破御坐候様奉存候

一本印之御事最早致方無之哉時節到來とは乍申殘念至極ニ奉存候

上にても養之御事は一言之御咄も無之由是は全く小子橋公之義申上候故と被存申候水尾之兩公も御希望有之候よし天下之御爲ハ御捨置ニ而御自身之榮花御求メ之義武威御衰微之時節到來と恐入候事ニ御

坐候阿州之事扱々驚入候左様之表裡ニ而は不頼母敷事ニて候小子所存ハ何卒天下靜謐ニ五大洲御制御坐候御儀志願罷在候處御家門之内右様ニ而は可歎之極ニ而貴君之御配慮御察し申上候

一土州此節暴之義無之櫻閣もほめ候由全く種々御教諭故と奉存候妹ハも程能可申遣候辰舊妾之事妹ハ申越候義も有之候何卒追々御教諭奉希候

一土丹鶴殿永井土津之事承知仕候此節之趣ニ而は忠志之面々ハ追々被退候御様子可歎之極と奉存候

一大老之儀上閣之分別之由是は先年之返報之爲助力ニ引出候事と被存候夫ニ而ハ橋はとても六ヶしき譯と奉存候櫻閣危き由其後如何ニ御坐候哉遠州説破有之候得共難行届事と奉存候本多美濃御用召之由吉兵衛承候由甚懸念ニ存申候并高上申合セ候而は一大事目前ニ奉存候且又小子ハ近衛殿ハ上奏之義不評之由天下之御爲と存し申上候處扱

致方無之以後閉口之外無之と存候六通は全く虚事ニ而入貴覽候兩通已ニ御坐候其外之書面は好事之偽作と奉存候御入手相成候ハ、伺度奉存候

一條約は御取極之うへ西は紀ニ御治定之由兩違 勅ニ相成恐入候旨且邪宗始大變革之義心配ながら上閣之權勢強大にて閉口被致候との櫻閣口氣左候へハ最早御治定と被存候

京使も溜り之よし天下之變化時節到來と歎息之外者無之候

叡慮如何之御事と可相成哉天下治乱之界天運ニ任せ候外無之と奉存候小子考はたとへ紀ニ相成候而も天下之御處置道理ニ叶候様夫のみ祈り申候此上は貴君ニも夫々之處御勘考專一かと奉存候水老卿之御心中誠ニ恐入申候小子ニハ益御疎遠可然御時節と存候間先々呈書不仕候右之義も宜敷奉願候參府之上如何之光景哉扱々不面白事ニ御坐候伊達ハ別段文通不仕候間宜御傳聲可被下候猶相變候儀も御坐候

ハ、拜承仕度奉存候先は早々如斯ニ御坐候恐惶謹言

六月九日

齊彬

越前賢公閣下

猶々御自愛專一奉存候自國之手當も嫌疑之義も可有之哉其處も拜承仕度奉存候以上

別啓仕候今度御滯府之義は實ニ恐悦大慶仕候例之御一條細々西郷ハ申越奉承知候全本印御不承知之事と被存候乍併岡部ハ上意之義必ず御油斷有之間敷乍憚奉存候此度再應御尋ニ付別紙之通ニ建白仕外ニ添書寫之通申上候尾州之事扱々案外之次第人欲難量物ニ御坐候阿州も副將軍望ミ候哉之よし誠ニ不思儀千萬之事ニ御座候貴君之御誠意神明ニ通候故御滯府も被仰出候事と奉存候間十分に御建白有之西城御治定之義被盡御精力候様奉希望候且又添書ニ申上候通約條御取

結之義

京師を押付候様成御處置有之候而は實ニ以の外之事と奉存候間是また御賢考專一ニ奉存候約定之儀

京師御許容被仰出候上は萬事之御處置一大事之儀萬々一因循姑息之御處置有之舊習一洗不在時は夫迄之御事ニ付是又御周旋第一と奉存候何分ニも不容易御時節到來日夜心痛仕候遠路之義猶更事情知兼候間何卒御密示奉希候崎陽ニも亞奴渡來之よし跡船ハ役人參候との事ニ御坐候取込早々奉申上候恐々敬白

一、六月廿三日今日於營中左之通り被仰付たり

堀田、松平、兩閣老罷免、掛川、川、西尾、川、再職

太田道淳

加判之列
上坐
御役相勤内年々三萬俵ツ、被下 備後守ト改

加判之列

間部下總守
松平和泉守

外國御用取扱
御勝手掛り
海防掛り

思召有之御役
御免
帝鑑之間

太田備後守
間部下總守
堀田備中守
松平伊賀守

一、公此閣老之遷替ニ付而も情目今の時勢を御觀察あらせらるゝに昨日の布告已に違 勅の姿にて容易ならざる御次第となりしかと調印之濟たる上ハ又取返すへき様もなければ此上ハ大老なれ閣老なれ速に上京して台旨に出さる事を申開くより外ハあるへからすされハ餘りに御不都合の御所置なれハ

逆鱗亦量るへからす其折柄ニ御養君御弘め被仰上なり是ハ大家の御祝事なれハ差湊ひてハ 天意も穩かなるまじき時に當り御私の御祝事の御取計らひあらん事敬上尊崇の御趣意にも違ひぬれハ

天譴愈赫然にて諸老の怠狀 御許容あるまじきも難計されハ條約調印の

後來之經畫十分ニ御建論有之候様奉懇祈候登城懸乱揮乍毎度失敬多罪
御高許奉希候頓首

念三日

震 再白

復威公閣下

右書中薦賢一事といへるの即公の御上にて此事の已ニ遠江守殿の大老へ
御推舉ありしかとも奸凶を除きたる後ならての適ひかたき由を申された
る故水老公を初諸侯諸有司専ら除姦の力を竭されしかり公素より名位の
御望ミ坐すへき様も被爲在ねと建儲の御一條頗る艱險の地に至りて挽回
の策施さるへき様あく纔に縉紳家周旋の一縷を依頼し給へる如き時勢と
なりし故御憤懣やる瀬も不被爲在によつて一時大權をたに御掌握あらせ
られあり

叡慮台旨の已ニ英明年長にあらせらるゝ濫奥をも御熟知被爲在御事なれ
の天下生民の爲に御擔當あつて速に冊命の大策を御定めあらんとの御大
志を振興し給ひし故近比となりての諸方の推轂を敢而御辞讓あらせられ
ぬ御事とはなりしなりされと推て求めさせ給ふ事とは露坐さす唯人々
の薦に任せ置給ひしなり肥州の特に薦賢の事に勞心ありて大老にも數度
及極論今日又太田備後守殿へも反覆辨論に及はれしに此人の大ニ嘉納せ
られたるよし聞えたり

宇和島侯來
邸密談

一此夕申刻過て伊達遠江守殿俄ニ御出あり御密談中御大老の退出御見合
せにて酉ノ刻過て御退散夫々直ニ御大老へ御逢對として御出ありし由竊
ニ聞く此御密談の御趣意の昨日之御布告も諸向不服といひ今日登庸の閣
老の何レも太平にのみ馴れたる人達にて更に其選にあらず外患内憂並臻
の時に當りての其器にあらずしての天下の勢爲すへからざるに至るへけ
れの例の薦賢の事を御申立あらんとの御事なりし由

一此日水野筑州より呈書如左

奉呈鄙牘候中略 扱昨日之御書取田安御館へ持參入御覽候處何れ御熟考

昨夢紀事十四 (安政五年六月)

二百四十三

水野筑州ヨ
リ呈書橋公
ヨリ内命ノ
件

之上様子ニ寄被仰立候義も可被爲在哉之御模様ニ而別ニ御用も無之付退散仕候處刑部様差向御用有之私御逢可被在ニ付退散より罷出候様同席途中へ追使ニ而申越則罷出候處仮條約之趣ニ而直ニ調印と相成候而ハ實後患御配慮難盡殊ニ京地も被仰越候趣も有之處故此上 叡慮如何可有之哉其模様ニより候而ハ不容易次第ニ相成且異存之諸侯等ハその 叡慮ニ奉隨候次第も及候節ハ如何様之御處置ニ相成候共御兩卿に被爲取候而ハ 宗室之御趣意ニ隨ハ安危を偕に被遊候は申迄も無之候得共宿次を以右之次第被仰進候趣甚以御懸念之至調判ハ既ニ相濟渡方にも相成候上ハ今更不及是非候得共其事切迫ニ出候て不得止 叡慮之趣ニ御取扱も被遊兼候次第ニ候ハ、御大老成共急速御暇ニ而即日ニも出立被仰付事情具ニ及 奏聞候ハ、此上御順道之御取扱にも可有之處此書取之趣ハ以之外ニ被思召ニ付昨日直ニ同席再登城被仰付今日御登城之上御大老初一同へ得と御沙汰可被爲在と被思召候段御直ニ

岩瀬肥州
リ左内へノ
投書

一、同日岩瀬肥州ハ左内へ之投書如左
被仰合於田安御館も定而御同意ニ可被爲在左候ハ、御同様御登城被仰立候處具ニ私ハ可申上旨御沙汰ニ而實以御尤至極難有思召ニ奉存候ニ付則中納言様へ委細申上候處素ハ御同意ニ被爲在候ニ付則今日御登城御同様御沙汰被爲在候旨被仰出候右ニ付私義昨夜大和守殿へも罷出右之段申上置候今度之儀ハ安危之大機關ニ付たとひ御不興を被爲蒙候共御十分御沙汰可被爲在若於田安御館御同意不被爲在候共御一存ニ而可被仰立旨刑部卿様御決斷之御沙汰ニ御坐候不取敢極密爲御含申上置候出仕前差急キ別而大乱略之文体伏而御宥恕奉願上候下略

小楮拜具愈御哉歎欣歎之至候扱昨日ハ意外之天變其一ハ可憐事拯ノ一策得まほしき事ニ御坐候○恢復之事漸ク可庶幾此義ハ薦賢之一事何よりの大緊要此事被行候ハ、車裂無所恨百方努力乍不及微衷を盡し居候○魯ハ亞の條約を示し候處殊之外感服にて更ニ異議も無之様子布恬廷

も是迄ニおく大ニおとあしく相成候趣ニ承知先降心仕候○西使も愈可
被行大安意昨日迄之模様ニてハ迎も六ヶ敷と存候冒顔激論致居候處此
事ハ儼然安心之方ニ相成御同慶○横濱之事ハ扱々何の事歟只々アキレ
切申候まかし此際之機會又自然別策も可生歟○風説書長崎同僚ハ相越
候間不取敢もたせ候て御手元へ御上ケ可被下候此一封も御披露を希候
○色々申述度義も有之候得共登城懸不能關縷草々閣筆

田宮彌太郎
橋本左内申
越示談

一、此夕田宮彌太郎ハ橋本左内を申越て往きたりしに尾張殿も昨日の被仰
出ニ付殊之外御奮勵有之御登城の上御大老始の罪犯を督責せられんとの
事なり尊藩の御評議ハ如何なるにやと問ひ合せのよし仍之明日大老へ御
出あらん歟の由を申たりとそ夫々種々時勢の討論にて夜に入りて歸り來
れり

一、此夜平岡圓四郎來りて此度條約調印之事ニ付橋公御憤激之次第を物語
ニ及ひたり即昨日一橋御家老御城ハ退出して被仰出之趣を卿へ申上たり

平岡圓四郎
印一件ニツ
キ田安公ヲ
誘引シテ登
城大老ヲ密
告ス

しに卿御渡之御書取御一覽あつて勃然として御顔色替りて被仰出けるハ
事已に此に及ひてハ寡人等默止傍觀の時に非す夫に付て承るか其方共ハ
違 勅といふ事ハ有るへき事歟有ましき事歟如何心得候哉との御事故御
家老共も天下誰あつて 勅命を違背仕るへきと申上けれハ卿其方共も爾
かおもふなれハ最早相談する事もなし是ハ御城へ參りて大老并老中共相
揃ひ當館へ參るへき旨を申傳へよしかし此節幕府御用多にて參り得ずハ
明朝此方ハ及登城てもよろしき由をも申へし又水野筑後守に所用有れハ
早く參れと申遣すへしとの仰なりけれハ御家老共大に仰天して恐るハ
申上しハ何事を思召立せられしや大老老中杯を當御館へ御呼出の義ハ儀
同様の御代はいさゝらす其後御例あるへくも存し奉らす候へハ猶能尊考
あらせらるへくやと言上せしに大老初も例なき不届を働けはこそ例なく
とも呼ふ事なれ今日となりて例格の沙汰に及ふへきにあらす急き參れと
仰すれとも御家老ハ猶脚躡して左に右に申上たりしかハ夫故にこそ初に

違

勅の事を申聞セたるに惑をとりて彼是と申からの此方の申事を奉^ツかたき
 歎奉かたくの奉かたしと申へしおもふ旨こそあれと御聲色共に勵敷仰け
 れは恐惶逡巡して漸く御請に及ひたり又筑後守への何の御用哉御兩殿の
 御互の事にて此御方の御用の此御家老彼御方へ参り彼御方の御用の彼御
 家老此御方へ参りて御用相辨候御振合にて候への御用候へ、私共を可被
 遣哉と伺ひしに又例格を申出候哉筑後守に用あれのこそ筑後守と申なれ
 疾ク申遣はせと宣ふ故是も爲ん方なく申遣しぬ扱御家老も仰の如く御大
 老初へ申入れん事の恐ろしければ先づ御側衆の平岡丹波守殿へ談し見ん
 とて往たりしに退出前なれ、御城へ参りて丹州に逢ふてしかくのよ
 しを申せしかり丹州も大に驚かれ夫の容易ならぬ事あれの余輩か思慮に
 能はず幸に御大老初も退出已前なれ、談し試んとて丹州を御大老初に申
 されたるに御大老初愕然たる有様にて種々申談しられければと事果ねの御

家老への御大老の邸へ罷出て待居るへし篤と申談の上御答申上んと申さ
 れたりとそ夫を御大老歸邸ありて御家老へ申されし、今日殊に御用多
 にて退出も晩景に及ひて参上仕りかたく候への恐れ多くは候へと仰の如
 く明朝御登城被下置候へ、何も拜謁可仕と御請申上られければ罷歸りて
 其段申上しかり、さて直に御登城の儀を被仰出しとそ又水野筑後守
 も程なく参上しければやかて御對面ありて田安殿に、如何思召候哉今日
 の被仰出御家の御大事にも候半歎と思召に付御登城の上御存慮の程被仰
 上度と思召候是迄の何事も御先官の御事にも候への御相談の上御隨從被
 成來候へとも此度の御事の已に御決心も被遊候事候への御相談の不被
 仰上候得共御指越仰せ立られんも御不本意に付此段被仰進候間御同心に
 て御登城被成進候への無此上御本懐御大慶至極候得共もし御不同意にて
 御坐候とも卿に、是非御登城の思召候間此旨御心得迄に申上られ候と
 の御事の由筑後守の御尤至極の思召委細中納言様へ可申上必定御同意に

可有御坐と御請申上て退出せしか果して中納言殿にも御登城可被成と被仰進しとそ此時筑州御請相濟たる上にて御膝元へ摺寄り聲を潜めて窺に申上られし明日は幸の御登城又なき大機會に候へり御次手に大老を御挫拆御黜斥あられなり天下第一等の幸甚あるへしと叫び申されけるとそ卿も初て筑後守には談したるか扱く愉快なる男なりと圓四郎迄御噂被爲在たりなんと物語れり

一、扱今朝田安殿と御一處に御登城あり田安殿に御別段に御大老初へ御逢ありて段々被仰立たる御事の由卿に初に御大老計拜謁相濟て御老中一同拜謁可仕との事にて先ッ御大老一人御前へ出られたりとそ卿仰ける先達而り大老職被蒙不容易御時節太儀千萬の事之先祖以來御家におゐて別段の家柄其許にも不相替被勵忠勤條於我等も頼母敷存すること初而之御逢故先ッ御甘言を以て御慰諭有りしかり大老大に歡はしき顔色にて不肖之私不存寄重任を蒙り恐入候得共精々粉骨可仕心得候と申上ら

る卿されり此度の仮條約に調印の事其許に承知の上候哉如何と尋ね給ふに大老低頭平身して奉恐入候と申上らる卿台慮り如何候哉伺の上候哉又り

思召候哉と問給ふに大老頭も得擧す奉恐入候旨のみ被申上有無の御答の申上られねり卿も笑止に思召左のみ申されての事の子細も辨へかたし如何候哉と宣給ふに猶奉恐入候と計被申上故 卿定て其許にも不承知かりしを備中伊賀の兩人など強而取計ひ及ひたる故今日の仕合にも可有之哉如何候哉と推て問はせ給へり大老漸く頭を擧て私も同意仕候事故奉恐入候と被申上故卿夫の以の外の事共なり備中上京伺の節 勅答の御次第もあるに如此にてり

將軍家の御違 勅に不相成哉其處り如何被心得候哉と仰あれは私も左様に存候て始の程の拒み候ひしかと多勢に無勢致方かく途々同心仕候と申上らる餘り御手答へもなく言ひ甲斐なき有様ある故卿も呆れ給ひて濟

たる事の今更爲ん方なけれと御違 勅ともなるへき事を奉書もて奏上せ
らるゝの何事そや御輕蔑の筋にもなるものをや素より
台旨に出つへき様もなき事あれの其許初の不屈なる由早々罷上つて
將軍家の御爲に 朝廷へ申譯不致候半而の相濟ましく仰けれの大老一々
奉恐入候得のいつれに私共の内早々上京仕申譯仕るへく候得の是迄の義
の幾重にも御免下さるへしと申上らる 卿此方共の立場にて 幕府御爲
不宜と存候事の不包申上候か責ての御奉公と存すれのかくの申にて敢て
私の爲に申にはあらねの我等への斟酌のいらさる事あり御爲よろしから
ん様取計らねんこそ專要なるへけれのくれくれ 明日にも出立有て然る
へしと仰せらる畏入て候への早々評議可仕と申上られて此件の果しか卿
猶又大老を御試あらん爲に御養君の御沙汰も有しかいつれに御極りにな
り候哉と問はせ給への大老忽赧然として色を變し倉皇として唯奉恐入候
と低頭せらる卿何の恐れ入らるゝ事の有るへき御内々相伺候迄に候なり

と仰すれの猶奉恐入候と而已答へらる卿されのいまた御定りなきにやと
問はせ給ふに唯奉恐入候と計答へらる卿何故に申出兼られ候や實の備申
より承りたる事も候か愈紀伊殿に御治定候哉と仰けれの然候と申上らる
卿夫は恐悦至極の御事なり御養君の御事の世上種々雜説も有之何か此方
杯も關係せる姿故甚心配に存候ひしにかく御定りと承りて無此上安心せ
り紀州殿の御疍氣も有之哉に承りしに此頃御登城の節見上たりしにさる
御様体もなく御春丈けも御年比より大きやかに見え給への重疊の御事と
もなり御幼年にてのと申事も有る由なれと其方大老として御輔佐申上る
におゐての何の御不足かあるへき乍不及此方共も御爲筋を存詰幾久敷御
奉公も可致と存するなりと仰せければ大老忽ち色を直し悦ひ満面に溢れ
て申上らるゝの御前にさへ然思召被下候はんにおゐては誠以難有安心仕
候と申上らるゝ故卿此方か何とか存すへくと氣遣はれしか今も大和守計
りの存してあるへし備中伊賀への再三申入置たる事もありていかてか非

望を企つへきや何のともあれ御極りの上の一日も早く御弘めありて天下の嫌疑を決せられて然るへからんと仰あれの大老さらのいつ比よろしく候半と被申上明日にも可然と仰らる大老指を折り見て明日は御精日に候への明後日にていか候半と申上らるいつれにても早き方よろしかるへしと仰せあれの愈明後日と仕るへしと申上らる卿又御養君の御事の夫にて極り候か紀州家の御跡は如何なり候やと問はせらる大老又碯と行き詰りたる有様なりしか良ありて笑を含み媚を呈して御前に思召はあらせられすや御取持仕るへくと申上らる卿そはけしからの事を申され候一橋館を離れかたき故ありて御養君の事すら固辭せしに紀州家坏の事もよらすと仰せらるゝに如何にも御譯合もあらせらるへけれと何卒入らせらるゝ事は被成かたきにやいか様にも御肝煎仕るへく奉存候と申上られけれと是の更に取肯へ給はさりしかの大老爲んかたなくてさらの御未家の内を御相續の事となり可申なと申上られて御序に伺はるゝよしにて

清水御館の事の如何思召候やと申上らるゝ卿此事の田安殿の存寄も候て毎度談しもありしかと此方の兼ても申ことく御時態の方を専らに申せの御取拂ひの方も御無理ならず又御由緒柄を申立られ候への田安殿の申さる處も餘義なく聞ゆる故此方のいつれに成ても別に存寄はなきそと仰ける故さ候のゝあのまゝにての如何と申上らる兎も角も異儀かすと仰らる大老喜ひていつれも一理と申内御取拂ひとなりての大勢の迷惑人も出来候て功德にもなりかたく候への私に其儘にと存候なり御前に思召あらせられすのしか取計ひ候半と大に歡ひて申上られさて〳〵今日は初て御目通り仕り段々の思召も伺ひ奉り難有安堵仕候かり此末も何によらす思召附られたる御事あらは御垂諭の程を題ひ上奉るよしにて退坐せられたりとそ引續きて閣老衆不殘御前へ出られけれの 卿假條約調印御違勅云々の事を一ト通り仰せ出されけれの備後守殿下總守殿和泉守殿の上座なれと何とも申されす大和守殿申上られけるの夫にの無據御譯合も候て

と半はいはせ給はずヤア大和守無據とい何事あるぞ定て英佛數十艘の軍艦の事あるへし其軍艦何處へ渡來せしや何十艘見ゆるやと御聲を勵ふして聞はせ給ふにイヤいまた渡來の不仕と申上らるれの其事あり五十艘も百艘も寄せ來りて手詰の戦闘に及び運拙くして大將分も數多討死に及び此上一戰に及びひなの大城も夷手に落入るへきかと思ふ計りになりな其時こそ餘義なくとも申へけれ説客の謀言に欺かれ見えもせぬ船に恐れて餘義なき次第と申なし 勅旨に違ひたる事をも仕出して濟むへきものが東照宮の御開業已來征夷の職任を重んぜられ尊 王攘夷の御政道にて御尊崇を 朝廷に尽されしを 御當代に至つて黠虜の虚喝に避易して御違勅ともなるへき筋に至れるは 台慮に出たる事なるや其方共の取計らひかと推詰め給ふに大和守一言の答もあけれの紀伊守殿海防懸より嚴敷申立こよつて私共より伺の上に取り計らひ候と執り成さるゝに海防懸か申せんとて御國體におゐて大小輕重の差別もなく眼前の利害に迷ふて 徳川

家の御瑕瑾となる事に心付すや伺の上と申からは其方共か違勅の罪を將軍家に負せ奉るなり萬一 天意震怒によつて征夷の稱號を召し上られあゝ其節は何と申譯を仕るそと責め給ふに大和殿さる事は先ッあるへくも候はずと申上らるゝに左様に心得ればこそかゝる不届も出来るなれ 御代々敬上の御趣意御等閑ならさるものを御當代に至り夷狄の爲に 天朝を御輕蔑ある様にての 將軍ニおゐて御申譯あるへくもあらず唯今掃部頭へも申聞たるなり此上の早々上京して 將軍家の思召にあらて其方共か不調法なる由を申聞くへしと疊みかけたる仰せにて大和殿も紀伊殿も閉口に及はれ其坐白らけて見えけるに下總守殿の初より何故なるや落涙のみして居られけるか備後守殿に向ひ我々共の今日の事なれば何と申上へき様はなけれと仰の趣は一々御尤至極に奉伺候へ唯今の處にての京都へ御使の事を決評に及び然るへからんかと申されけれ我々も左こそ存候へとて備後殿卿に申上られけるの只今下總守も申談候

如く私共の今日の事故兎角の申譯仕るへくも候はねと御意の趣の一々奉
敬服候への早速御使の儀を評議仕候半と御請に反はれければの卿も其意に
任せ給ひて各御前退散せられしとぞ

水府兩公ヨ
登城誘引

一、六月廿四日卯ノ刻少し過て茅根伊豫之介師實か許に來りて水戸殿の御
使の旨にていへるは今日の前殿納言殿尾張殿と被申合大家の御爲筋申上
られんため辰半刻比に登城せられ候なり太守侯も御登城あつて御相談被
爲在候様いたされ度との事候への御答の様承り來れと申付られ候へと申
す師實急き申上んと參殿せしに今朝の御大老へ御出あらん御支度にて御
櫛上げさせ給ふ程なり御側の人を遠ざけて御口上の趣を申上たりしに
公にの暫く御考ありて大家の御爲にと三家の人々登城あるによつて寡人
を其員に誘はれたるの家にとり身にとり本意ある事とおほゆれの仰せこ
さる條承り候への何事も登城の上伺ひ申へき由返答におよふへし志かし
大老へ參りての後なれはすこし遅くもやなりなん其よしをも申へしと仰

せある故其段伊豫之介へ申こたへしかの御同心の御答兩納言殿にも嘸々
満足可被存と伊豫之介も勇々進んで立歸れり

一、此早晨岩瀬肥州の左内へ之投書如左

奇々怪々不待贅○人言者ハ念五ニ暴斷の様子尤側聞ニテハ念一ニ洛ヨ
リ報アリト云果シテ然ルヤ○魯ノ接待モ追々都合宜候處此上如何之處
置ニ變シ可申哉不可知此一條殊ニ神秘ニ致置候事○下田佛船廿艘渡來
ノ説アリ道路ノ説未可信○此程ノ達シ書面ニ王倫秦檜ノ姓名ヲ掲ク洛
ヘノ報モ亦然リト其掲ルヤ必深意アルヘシ倫檜暴斷セルヤ命ニ依テ押
印スルヤモヤノノ名文章恐クハ大辟在近呵々

念四蚤天 端元文盟

紫氣

心事百端筆頭ニ不盡殊ニ嫌疑世界愚弟ノ僕ヲ情テ一書ヲ呈スルニ

一、今朝卯半刻御出殿にて井伊掃部頭殿へ被爲入御逢對の上條約調印の事
此頃御申ありしにも似す諸侯へ之詮議もなく調印も濟奉書を以 奏上と

大老ト對談
夫ヨリ登城
ノ大事件

なりての正敷御違 勅となるへし將軍家と而
勅命を御違背ありての諸侯亦 台命を遵奉すまじき由等を述給ひて御討
論に及はれしかと掃部殿の唯只管に此事の眞平御免候へとのみ申されて
更に辨解の答話もせられさる故 公さらの如何して此罪を申宥めらるゝ
やと問はせ給ふに老中共にての行届くへくもあらねの余上京して申譯仕
らんとこそ存候へと申さる故然かくての適ひ申ましく候かいつ發途し給
ふそと尋ね給ふに輕き者と違ひ夫々の支度も候への明日と申様にも難け
れのいつれに登城の上老中共と談の上取極め候半と申さる故一日も早き
方敬上の御趣意も立候而

天機に適ひ申へきやと仰られ扱御養君の御事の備中殿を承候處にての京
都へ御伺にもなりたる由にて候か御伺濟にもあり候哉と問はせらる掃部
頭殿此頃伺も濟て候への明日被仰出にもなるへき調へ候と申さる御名指
の御伺にも候哉イヤ唯御養君とのミ被仰上御先格にて候京都は如何の

御答になり候や目出度思召との御事なりと申さる公夫に付申上度事の候
が明日の被仰出の定而紀州殿に可有之處京都にての専ら刑部卿殿御最負
の由にも致沙汰候御名指の御伺にもあく紀伊殿立せられ候の、京都と而
の御案内に被 思召間布敷其上御養君の御事の御家の御祝事にて候へ
の指當り條約調印の一條 逆鱗も難量御時節に臨ミ御家の御祝事も御一
處に御發表あらぬ愈

天意に逆ひ條約の事坏濟むへき事も濟難き様にも相成へき歟されの御養
君の御事の暫く御弘メなくて先ツ條約一條を御聞濟に相成御心懸りなき
處にて御祝事の御取行ひあらん事事理共に然るへくもや候はんと仰あり
しに此事の掃部頭殿甚不服にて已に明日ともなりたる事の如何にかいな
るへき紀州殿立せられ候とて京都におゐて何の障りか候へきと強辨せら
るゝ程に時移りて已に登城の刻限になれる由近習の者より申出たりけれ
の掃部頭殿今日の是切にて御斷りに及ひ候と申され坐を起て引キ入らん

とせらるゝ故 公掃部頭殿の袴の裾を無手と握んで押居へ給ひヨシ御登城の刻限にありたり共唯今申出たる事は明日に逼りたる事に候へり今日を過して何の甲斐も候はず此處にて聞届け給ふまじきから余も登城して於 營中討論に及び申へきかと申させ給ふに夫の御勝手次第なるへし今の叶ふへからすといひさま振り拂つて引キ入られたり公なさるへき様もあらせられず水戸殿の御誘ひもありかた／＼大老に引續き御登城ありけるに水戸殿御父子尾張殿にも已に御登城あられたるなり如斯いかめしき御方々の引次に不時御登城の御事なれり閣老諸有司も何事の出来しやらんと大に恐怖せられ小吏并御坊主共杯はワナ／＼と戦慄せり 公の直に上の御部屋へ御出あつて老公御初へ御對面にて今日の御計議を問はせらるゝに先づ第一違

勅調印の罪を責られ次て薦賢の議を建られ夫々建儲の事にも及はるへく可宜とよつて大老をも御擯斥あるへく若し其御席にて御論議決し兼なり

御前御願ひにて於 台前可被及御決議との御示談なる由御物語有之殊之外なる御勢焰にて猶種々御論議も被爲在しとそ

一、水戸殿御初御大老御老中に御逢あらんと仰せ入られしに御前の御用ありとて更に出テ來らす後に聞けり人の得知らぬ奥まりたる處に屏風引廻し入り籠り居られて兎せん角せんと申談せらる此屏風圍ひの内への酒井修理大夫殿折々出入せられたりとそ水戸殿御初よりの度々御催促あれと午過ても音も沙汰もなし修理大夫殿出て來て唯何となき御物語をいたされたり公の處へも參られて同し趣なり 公は度々上の御部屋へも御出にて御咄しあり未の半近くなり漸くに大老初上の御部屋へ出られたり此時水戸前殿今日は各へ申入度子細あつて登城せしか越前も誘ひ合せて出居れり一處にて申へくおもふなり是へ呼候へと仰けるに掃部頭殿備後守殿然るへく候半と申上られ紀伊守殿座を起れて 公の方へ坐したりしか大和殿申上られけるに越前守も家柄に候得共御三家方との別段の事にも

候へ此御席へ参入候事は以後の御格合にも拘り如何にも候半なれ先
つ公等の御意共を伺ひたる上にて別に越前ニ逢候様仕るへしとの事なれ
の中務殿又起て公の既に御出あらんとし給ふ處を御指留申上られたりか
くて前殿御初條約調印一件ニ付違

勅云々の次第ニ付て大老閣老の内早速上京あるへきよしを猛々敷責め
給ひしに大老初飽まで承りたる上御尤の御事共にて私共も左様に存候へ
いつれに申談し上京の積りに候と申上られたれ其上に責給ふへき様
もなければ夫にて済て御養君御發表時に取て御不都合なるへき旨を仰ら
れ尾張殿の御幼年にて不可然候得刑部卿殿を立らるへき由を申立ら
れしか是も十分に承りられて仰に候へとも此事の已ニ伺も済候て先刻
表方へも被仰出の仕出し申付て候へ今更御延引の取扱ひ兼候と申上ら
れたれ是も亦其儘にて止め給ひて前殿方今不容易御時態にも候處越前
守儀の才徳人望當時之選に候へ此人を擧て大老の上に在らしめ 將軍

家にも御相談被爲在各も商議せられ天下の御爲然るへく存ると仰あり
けるに大老の默然たり備後殿か如何様にもと申されしに下總守殿越前守
儀の同國の事にも候へ人よりも能知りて候か今日の行狀を初領政向迄
も別段の事にて人柄に於ては尤可然は候へとも當時掃部頭も罷在大老兩
人と申も如何に候へ此事は猶能評議の上申上候半と申上られたれ此
事も其上強ひ給ふへき様もあらせ給はて各御前を退出せられしは申刻は
かりなりけりとぞ

一右の件畢て久世大和守殿御壹人公へ御逢ありけれ公條約ニ付云々
の事今朝掃部殿へ申入候て御承引の上の辭別て申迄も候はず御養君の
御事の事央にて果候へ今一ト渡り申上へし先つ京都の御伺も済たるよ
しに候か何と仰せ越されたるやと問はせ給ふ是は三條公の土佐殿へ之御
内書將々三國大學の消息其外京師の模様年長英明の御内意あるへき
氣なれもしやと思召て推し問はせ給なりけり大和殿目出度思召御旨の

外の何の事も候はず公さらの御名指にての御伺にも候哉左にてのなく御養君とのミ被仰上候が御先格にて候と申さる。公左候半にの猶更申上ての叶ひかたく候が是迄も京師にては専ら刑部卿殿御最負のよし申沙汰せるか夫れ實事ならんにの御名指もなき事に候への。思召の外なる御方被爲立なり。天機もうるはしき御方にの坐しますましき歟其上是の御家に取候而の上なき御祝事にも候處此度條約の一件御家の御方人の隨一なる御三家方を初違

勅なんと彼是と申上らるゝ程の御運ひに候へは兼て
叡慮も安んせられぬ京都にての如何計の。逆鱗被爲在事の敗にも至り候はんのと恐入候への御垂問の折柄不願憚申上候程の事候への掃部殿の申されし如く御大老御上京あつても容易く御事濟とも存しられす乍恐罪を掖廷に待せらるゝ御時節とも申へき其中へ御家の御祝事御執り行ひあらん事御不都合にの候はずや況て。思召に染ぬ御養君にも被爲在なる夷狄

の一條に指加へて。宸襟如何に御不平に。思召れんも難計候さる御次第とありなる御養君の御事の其儘になしおかるゝとも條約の事の極めて御許容のあるましく候左様にも成候のゝ外寇の都下に迫り。皇天の上には震怒し給ひ殆御家の御大事に及ふべき儀と不堪恐懼候えされの御養君の御事の將軍家も御壯んの御事と申さして御差急き遊のされすしての適ひかたき御事柄とも存し候はねの此御事の暫くさし延へられまつ條約の一條を御首尾能御濟し御心懸りも被爲在ぬ様になしおかれさて御幼君の御弘メとなり候とも遅かるまじき御事にもや候半唯今人心も何となく折合兼候御折柄御祝事の被仰出も何とやらん穩便にも聞え候ましき歟と誠を推し理を究めて懇々篤々被仰説しかの大和殿も熟く了解あつて御申の次第共一々御理りにて殆感服仕候ひぬえかし伺も濟て明日可被仰出取調らへも申付て候への如何すへきと思案せらるゝ故。公又如何様其調の御申付候とも御内々迄の事に候へのいまの處にて御引戻しに相成とも御内々

限りの事にて濟候へし此小節に御拘はり表向の被仰出ともなり候へ、京都を初天下の大議を來たし申へし内外大小の分を御熟慮あれかしと被仰けれ、大和殿如何にも其通りの事に候へ、唯今同列共へも申談し明日の事の御延引にも伺ひ直し可申歟暫し待せ給へとて入給ひぬ公は説得させ給へりと痛く歎ひ思召て水戸殿初へ御吹聴なされんとて上の御部屋へ入らせられしに早既に御退出ありて人影もなし公も天下の事最早爲すへからすと御痛歎の折柄大和殿再ひ御逢有て御申立の次第同列共も御同意に存し候ひし故伺直し候はんと申談せしに御三家の御方々最早御退出となりぬ一段伺濟の事も御家の御大事とて御三家方の御申立によりて御延引となり候への名義も正敷候得と已ニ御退散の上はせんかたあし如何に御至當なれんとて公の御申立にて

台慮を返し奉る事の爲し得かたき事に候への是にて思ひ止り給ふへし扱て、御三家方の御退出こそ遺憾の限りに候へと大和殿も大息して引入

り給ひしとそ此日は朝疾く御大老の邸へ御出ありしより常磐橋の邸におゐての今日一大事の御首尾如何あるへきと執政諸御有志司手に汗を握り御音信を持奉りしに巳の半頃なるへし大道寺七右衛門御城より歸り來りて唯今御登城候ひしなり其以前井伊殿の御相對濟にて玄冠へ被爲出候御容子を見上ヶ奉りしに何事の坐せしにや御眼中も唯あらず御氣色立て被爲在たり營中の御次第如何あるへきにやと申達せしか、一統殊更に案し煩ひたり夫々營中の御消息を櫛の齒を挽く如く窺はせたるに、いまた御三家方も御逢無之とのみ告來て漸く御三家方の濟て、公の御逢始まりしといへるの申の半刻はかりありき師質の餘りに思ひ堪へ兼て御迎ひに出たりしに酒井雅樂頭殿邸の前へ行たるに水戸殿御退出なり日の没比御城へ参りて祇候の間へ参りたれの程もなく公の御下りなり進ミ参りて如何にや、と潜めき問ひ奉りしに何事も歸りての上申聞すへし天下も是切の事になりたるのと仰あり師質も又申上へき様もなく御供に候したりし

か下乗より御提灯附きて御歸殿なりき御歸坐の上御家老始被召出て前件の御始末一々御物語被爲在 公の御誠意已ニ御徹底にて略挽回の機至りしに御三家方の 公の御相談濟をも待給はて御退出ありし故其事ならさりしハ 公の御徹運而已ならず 徳川の御家運も併せて拙なく坐す事を御大息にて殆御落涙に及はせられたり是を承り奉る御家臣共におゐても御胸中を推し量り奉りていつれも涕泗を拭ひあへさりしなり

一 公今日營中の風説を聞かせられん爲橋本左内を岩瀬肥州の許へ遣はされたり反命の次第左のことし

一 諸有志輩今日こそ老公の大議論にて忠邪黑白も分るへけれとて已に大老初の談判となりしより事の子細も泄れ聞ゆるやとさせる所用もあきを用あり氣に代るく松の御廊下を往來して少々聲高に聲えし時の今や老公の暴論の出たるそや杯ひひて片唾を呑み耳を欬たりとそ

一 已に御談濟たる後閣中定而蕭索肅然たらんと思ひしに案の外大老閣

老呵々大笑して忿遽甚しかりしかは大久保右近將監堪らへ兼て京都の事を伺ひに托して大老に謁し其序に今日ハ珍敷御三家方の不時御登城なりしか如何なる御用候ひしやと問ひたるに大老何か色々申立られたれとさしたる事にもあらず老公くくと鬼神の如くいひしかとおもひの外何はかりの事もなしと打笑はれしとそ

一 老公語窮する時の越前を呼へくと仰せられ大ニ窮して越前を呼へと御座を立給ひし事もあり越前を頼みに御登城ありしか老公といひて恐ろしき事にいひもおもひもしたるものを御老耄ありしにや今日の御様体んそをかしけれと閣中にて大笑せられしとそ

一 酒井修理大夫の御三家に謁せしハ閣老の間者にて何となく御様子を伺はせしに左迄にも坐さぬといふ事を能聞系して出坐に及はれしとそ

一 今日事のならさるのみならず老公多年の威名今日に至つて烏有とな

れりと諸有志の失望限りなしとぞ

岩瀬肥州ヨ
リ呈書

一、右左内を遣はされしと行違ひに岩瀬肥州より呈書あり如左

本日は終日御賢勞奉恐察候事此ニ到只々大息○再舉之事熟考候處明朝
に至り候而の逆も不可挽回の勢と奉存候ニ付別に存付候廉左に相認申
候○舉大臣之事今日に至候而の頗嫌疑を生し權館の爲のみの様ニ定而
取違候事と奉存候間一向ニ人言者の事ハ爲御濟前文之嫌疑を洗淨し人
言者ハ天下にまかせ其後に至り少年なれハ愈差向御相談相手に不
爲成候ニ付舉大臣ハ當前の事と申處にて舉賢ヲ主ニ御議論有之候而
如何右様相成候は、たとへ權人言者たらずとも二城杯に御移居にて輔
傳之御任ハ可被行哉左候は、ヤ、天下英雄の心を攪スるに足り可申哉
篤と御良考被爲在候様奉祈候

人言者等の成否ニ拘ラス此場ニ臨み候而の愈以公之一身天下の責御擔
當無之而ハ 神州之御威風愈陵遲に及ひ遂に不可言に致る事不可疑の

橋公再ビ大
老閣老ヲ督
責ス

勢何れにも御獨任支厦之御偉業所仰願ニ御座候前書之段密告仕度大略
文御許容奉希候頓首 念四夜 復威公閣下 震

一、此日ハ御兩卿ハ御對顔の御定日故刑部卿殿にも例のことく御登城あり
しか御前へ御出の前に大老初へ御逢被遊度旨仰せ出されたり無程御刻限
になりけれハ大老初卿の御前へ出られたり卿仰けるハ昨日申聞たる京都
の御使ハ誰にか定まれるそと問はせ給ふに大老初邊巡して餘りに御用多
く候て未だ決評仕らすと申上られけれハ卿勃然と色を興し給ひ夫ハ如何
なる緩怠に候や昨日もあれ程に申たるに猶會得も出來さる歟昨日も實ハ
上へとも思ひしかと上ハ兼ての御様子も伺ひ居れハ先づ其方共へ申た
るにさる等閑の心得ならハ今日ハ幸の事なれハ御直ニ申上くへしさあら
んに定て誰人をか遣はされんと御相談あるへし其時ハ思召次第に取極
る程にしか心得よと仰あれハ大老初大ニ恐縮し一々恐入て候へとも兎角
昨日も御用繁にて評議も出來兼候ありと申譯あるに卿愈怒らせ給ひ此節

此事を措て別に何等の繁要かある 將軍家の御違 勅にも可相成大誼を
 閣キ眼前の瑣細にのみ關係して大事を後にすること心得ね御家の御大事
 とありての御直に申上るか此方共の當然なれぬ兎も角も申上へしと仰す
 るに左様にての老職の御役前も立かたしと陳す如何にも是程の大事を後
 にして今日迄も決評なき有様にての其方共職分立さる事勿論なり夫故に
 此方か御直に御相談申上取極め遣のさんとおもへるありと仰ける故何れ
 も愈恐懼して彼是と申陳する程に唯今御對顔あるへしと仰せ出されけれ
 の卿ハット御坐を立たれさらの御直に申上るそと御前をさして入らせら
 る大老初は暫し待せ給へとてハタ／＼と立て十間計り追ひ奉り御袂に繼
 りて御使の事今日は是非共取極候への御直に被仰上候事の御免被下候へ
 かしと只管に願はれければ左程に申す上のよもや欺きも致すまじけれ
 御直に申上る事の見合する條今日の無間違評議して決着之次第申聞けよ
 其爲に家老共を殘し置くそと仰せありて夫の御對顔濟御下城なりしとそ

御殘し置れたる御家老の御館へ罷歸りて間部下總守に極りたる事を申上
 しの亥の半刻計りにて卿の已に大奥へ御寢なりしを御錠口まで被爲出御
 聞届被遊しとそ

師質云水尾兩公の諸老と御應答の次第の田宮彌太郎安島彌次郎に聞く
 處 橋公の御事の平岡圓四郎の來り告たるなり此日奥にて諸老橋公の
 難詰に逢ひ御使の事坏の已に決せし事なるを表にて水老公再び御討論
 あらせられし故に諸老も容易く御應接に及はれたると覺えたり

一、此日伊達遠江守殿の兩度の御内書御到來あり如左

昨夕の參館得拜芝如例御懇篤御密示被成下奉感激候爾後愈御清安奉恭
 賀候愛牛へ六半時過參着五半時立出候之事情如左荒荒申上候

○京報之義尋候得の昨日相達今日は一昨日候處先以無何事相濟無此上恭悅之
 御義右に付明後日明日西城へ御引移り之御都合と申聊以心痛之様子
 無御坐候尤迅速御引移りと相成丈の跡、關心之次第可有之と存候

宇和島侯ヨ
 リ兩度ノ内
 書

○一昨日御達書付之義ニ付御達 勅云々之儀も粗申述置候右の尙三兄 今日參會申談候尤太田へ參申述候而宜と牛申候

○調印云々の事罪を歸候人の井上岩瀬にあらず兩人の奉命迄にて御内のいろく意味有之而も外見を正論すれの兩人へ臨時調印之儀申付候人は是非く可有御坐候今にして兩人へ罪を爲負候の沙汰の限り又左候得の天下至重至難之事存意次第に爲取計候の政柄を彼等に爲握候義矢張閣老之罪も可申迄に論置其段の落意且兩人此上除去相成候而の第一應接に今日も可差支段も申置僕か心力丈の相救置候處尙今夕久世へ御出候の被仰述度且又久世の海防懸に無之候故太田か間部の方御出の筋かと奉存候

○一公御憤怒之公論之義の彼方申出候處格別恐縮心痛らしくも無御坐候申居候全末文宿次一封にて爲御濟相成候と計ニ被思召候御様子御不審御尤之御義ニ付御使も明日の取極今日被差立候義の近日と可相成

段も申上置候と申位にて一向徹底不相分候今夕の平謙參候間様子も分り可申哉平岡の方御分り候の相伺度匆々頓首 六月廿四日

再度愈御清安奉大賀候扱今朝愛牛との御對話如何ニ候や相伺度候今朝の天狗鯨海兩兄參會昨夜御密談之儀相話候處同意之由にて如別紙書付明朝對柳持參愛牛へ出候筈右在府之同席中連名今日中及廻達申候何等御賢慮も候の何卒く無遠慮天狗方へ御教示被下度奉希上候早々頓首

六月廿四日

尙々御自玉奉專念候昨夜來關心の永井岩瀬杯か冤罪を得可申哉と痛憂仕申候愛牛を説得の仕置候得共確乎たる人ニ無之候故甚案思申候今夕の平謙參候筈故又様子可相分候○明朝の西城云々ニ付御出仕と奉存候以上

京報

京報關東ヨ
リ伺以下四
篇モト頭書
字和候ノ書
簡ノ參考ニ
セリモノナ
ルナ皆長文ナ
此處ニ以テ今
校訂者識

昨夢紀事十四 (安政五年六月)

二百七十八

關東より伺

公方様御年齢ニ被爲成候へ近々御筋目之内ニ御養君可被仰出と被

思召候右之段

奏達被有之

叡慮之趣被仰聞候様ニ御兩卿へ可及御談様勿論被仰出候趣御兩卿へ

被仰聞候へ早速申越候様年寄共申來候間宜有御沙汰候

六月四日

本多美濃守

廣橋

萬里小路

公方様御年齢ニ被爲成候へ近々御筋目之内ニ御養君可被仰出と被
思召候右之段

奏達被有之 叡慮之趣被仰聞候様御兩卿へ可及御内談旨天明度振合
へ別紙之通表狀ニ申進候然ル處御仁体之義ハ天明度は表立被仰出候

迄ハ御隱密ニ相成候様御内意被 仰出候節被仰進候義相見不申且關
東御都合之品も有之旁今便御仁体之義ハ不被 仰進候間其儀私心得
ニ而御不都合之義無之様可及御内談候様年寄共申越候得共何分御
地發足後之儀ニも有之候間宜御沙汰有之候様致度且於御地も夫々御
手續も可有之候得共御度別而御差急之御事ニ候間早々御答被仰出候
様致度別段年寄共申來候間此段も申進候事

六月

本多

廣橋

萬里小路

大樹公御年齢被爲成候得ハ近々御筋目之内より御養君可被仰出と被
思召候右之段令
奏達

叡慮之趣申入候様兩人へ可被及御談旨勿論被仰出候趣兩人申入候

昨夢紀事十四 (安政五年六月)

二百七十九

の、早速被申入候様老中方を申來候旨則及
言上候處御尤之御事目出度被
思召旨被仰出候已上

六月八日

廣橋

萬里小路

本多

大樹公御年齢被爲成候への近々御筋目之内より御養君可被仰出と被
思召右之段令
奏達

叡慮之趣申入候様兩人へ被及御内談旨天明度之振合は別紙之通表狀
を以被申越候然ル處御仁体之儀の天明之度は表立被仰出候迄の御隱
密に相成居御内意被仰出候節被仰進候義相見へ不申且關東之御都合
之品も有之旁今便御仁体之儀は不被仰進趣御不都合之義無之様可被

及御内談候様老中方を被申越候得共何分當地御發足後之儀にも有之
候間宜可及沙汰候様被致度且於當地も夫々手續も可有之候得共此度
別而御差急御事候間早々御答被
仰出候様被致度別段老中方を被申越候由令承知則別紙之通表狀を以
及御答候事

六月

平岡謙二郎
ヨリ橋本左
内へノ書翰

一、此夜平山謙二郎が左内へ一書を投したり如左
過刻は參堂難有其節之一條早速肥州へ相咄し猶再考之旨も有之一封
君公へ同人が差上候嫌疑も有之候間家僕東御門へ差出申候右等今日之
勢逆も儲の挽回は難中の難十か九六ヶ敷殊ニ期を延すの策を強くし大
臣の策を併陳すれり畢竟儲を回すの策とのミ疑團固結假令幼君庸なり
とも大臣さへ出來候へは闔國回生の路の有之候故大臣を急にいたし度
の處右之疑團の爲に障られ併て大臣の策までを失ふに至り乾坤一新の

期は無之愈大變と相成可申候寧一方を失候ハ、一方を御救ニ相成度依之明日之處ハ延期之事ハ更に御議論なく仔細なく被仰出を待被仰出後御前之節尾水兩藩并獨梁最早被仰出後なれば更に橋議論を今度幼冲の儲御政務御相談相手にも不相成上ハ是非とも大臣を建候事を御前ニ於て力を極めて御議論即日御取極被仰出候事に被仰立候ハ、可然歟

是ハ權館より是を論するにあらされハ必今日の如き拙策に陥らんと存候間是非明日獨梁公ニ論せられ候事に致度候

右等可然も被思召候ハ、君公へ宜御奏聞希候猶蟾書ニ悉す故此に略す○右之議論之節もし官連外國條約云々の議論に涉り不申様御鼎力奉希候是ハ迎も取返し不相成事ニ而大なる破綻を生し御國御爲ニ不相成候ゆへなり申迄も無之候へとも是亦申上候草理

一、今朝茅根伊豫之介復命の上猶又師買迄遣はせし書翰如左
拜啓今朝は御繁多の御中奉多謝候扱は御名様思召之件、早速申立候處

老寡君尾公ニも殊の外大慶被仕候處今朝井伊家へ御出張の義ハ此方ニてハと迄も承知無之廉ニ御坐候間今日俄ニ尾水登營ニ付無據御相談申度廉も有之旁是非ハ越公御登營被爲在御相談之上閣初ハ責込候様仕度被奉存候依而ハ井伊公承伏不承伏ニ不拘御登營相成候様御頼被申候右之趣私ハ貴君迄御通シ申上候様被申付候間宜敷御申上可被下候尤老寡君而已ニ無之尾公よりも同様被仰入候事に御坐候何分御賢勞奉恭察候得共御出張ニ仕度奉存候此段草、如此御坐候以上

六月廿四日

尙、此方ハ只今供揃直ニ登營被致候事ニ御坐候以上

一、右紙面早速御登城中知邸迄相廻奉入御内覽候事

一、六月廿五日物出仕ニ而御養君之御弘めあり公ハ廟堂近來之景況別而昨日の御次第等御浩歎之餘り御心氣御不平等ニ付今日は御斷りにて御登城不被爲在仍之早朝久世大和守殿迄被遣御書翰左之通(分注朱書) 昨ハ肥州平謙の建策可ナラサルニアラ

惣出仕ヲ断ル

サレ不昨昨日ノ形勢公ノ御力ニテ速モ可被行
トモ不被思召旁鬱懷ニ堪ヘ玉ハサリシナリ

然は今日之出仕定而建儲之御義ニ可有之と奉推察候然ル處小子儀折惡敷中暑症相煩出勤仕兼候萬一從來申立候譯柄も有之處致齟齬故之不參と惡敷御推量被成候歟も不被計候得共小子義は乍不肖 宗室之末にも連候者ニ而元來御家之御爲のみ存詰居候儀故今日と相成左様之未練ハ決而不致候唯々此節柄御祝事と申候而ハ被對 京師御不都合之條ハ幾重にも探ク御案事奉申上候乍併他日從京師

御震怒之御沙汰も不被爲在候ヘハ於小子實ニ以降心不過之奉存候事ニ御坐候御義蛇足ニ類候得共昨日申立候廉も有之候ニ付乍愚念一筆呈置申候不惡御諒察可被下候不具

師實水邸ニ使ス

一、此日昨日兩納言殿御登城之節御誘ひあり且於營中御懇切の御義共なりし御挨拶之御使として師實安島彌次郎か許へ往き御口上の次第申述將昨日大老初へ御逢對あらせられし後御對話もなかりし故其節の御模様も如

何ありしか伺ひ來れとの仰せの趣も申聞けたり彌次郎か申上る處の云々ハ前に記せし如くにて扱前にいへるハ當納言殿の申されしハ前殿ハ耳遠故其席の次第殊に不都合にて申さるハ事は申されても先の申さる事の聽受慥かならぬ故次て申さるハ事も二ノ足シにて十分にハ申出され兼る事も多くあり又尾張殿と諸老との討論ハ双方共に慥に聽取られぬ故に覺束なけに耳を傾けられて似付ぬ事などを不圖申出され日比の御英氣にも似すて納言殿も甚笑止に存せられ又尾張殿の昨日となりて一橋殿の事などを主張せられたるハ就中不束なる事にて諸老も笑はぬ計の有様にて傍聽も氣の毒なりしと仰せありし由をも物語れり總て昨日の事ハ手筈違ひて不行届にも候ひし故いつれ近き内又々登城いたさハ大議をも決せられたきよし申さるハとぞ申せしなり罷歸りて申上しかハ老公の御英氣御書面などにてハ替らせ給ふとも見えねと御對面申てハおもひの外成御事共にて痛ク御案事申上候故彼是御議論も申上たりしに果して事を誤らせ給

ひしの扱、是非もなき事共なりきと數多度御大息あらせられたり
 一、此夕伊達遠江守殿御出にて御對面あり 公今日の御登城なかりし止
 事を得させられぬ御次第なるへけれと此事の大老も兼て恐懼致居事に候
 への明日にも御登城なくての事の体御不平に當り幕府へ被對候而も御失
 敬あるへきなれの強而も御登城あらせられん様にと御忠告あり且大廣間
 衆建白の事も彼是御談しありて夫を直に久世大和守殿へ爲御相對御出な
 りき

一、此日海防懸り御用御頼御目付岩瀬肥後守殿へ左之通御届書被指出たり
 越前守儀此度武州神奈川横濱邊御警衛被仰出候處御老中様へ御内達申
 上且伺置候儀も御坐候に付御指圖御坐候迄の固人數等指出不申心得に
 御坐候依之諸事心得方も未奉伺候此段爲念申上置候様被申付候已上

六月廿五日

御名内 奈良權太夫

一、此日水野筑州を呈書あり如左

水野筑州ヨ
リノ呈書

奉呈腐章候鬱天蒸暑先以益御清穆被爲渡奉恐賀候今日は

御養君様被 仰出恐悅至極奉存候昨日は不相替御懇命相蒙難有仕合奉
 存候其日之論結案外之次第言語に絶申候曖昧否塞之光景故御感冒に而
 今日御登城不被爲在儀御尤至極に奉存候如何之御容体被爲在候哉深
 く御案思申上候何卒御加養專一に奉存上候左候而明日の押而も御出仕
 被爲在候様奉存候昨日之三輩も今日は欣然之様子に傳聞可驚又可恐之
 至に候への旁以明日も御斷等に而は不可然哉に奉恐考候御賢慮御熟思
 奉願上候往事不可説後來を謀候儀今日之肝要に可有之哉彼是心配之餘
 只今歸宅來人待合居候に付別而差急キ亂略伏而御領慈奉希上候謹言

六月廿五日

翠竹百拜

尙以吳々も御保護專要奉存候反覆之人情の可恐之時勢何れにも明日は
 先御押被遊御登城之方に奉願上候以上

一、六月廿六日昨日御養君被仰出候爲御歡惣出仕あり 公にも御登 城被

昨夢紀事十四 (安政五年六月)

二百八十七

公、營中ニ
テ字和島侯
水野筑州等
ト内話

爲在たり於營中伊達遠江守殿御物語ありけるの昨夕久世大和守殿へ御逢之節一昨日御登城の次第を御内々御尋ありしに老公初尾公等の被仰立しの首尾混雜して何事の御趣意共聞分けかたくていつれも當惑せしに越前を拙者へ申されたる處の條理能貫通して尤至極の事に聞えし故 上への申上も御三家ともに越前の申たる主意に執り成して濟せしなり越前を指置て御退出ありし如き御不都合故御申立の筋通り兼候もことわりなりとて一笑せられし由を御申なりしとぞ

一、水野筑州へ御逢ありしに同人々の一昨日 公の被仰立にて御養君の被仰出の御延期と可相成と閣中ニ而の已に決評なりしかと御三家御退出に依て其事ならさりし由慥に聞ゆる所あつて同志の面々も牙を嚙み歎惜に堪へざるよしを申上られしとぞ

師實尾邸ニ使ス

一、此日水戸殿と同じく尾張殿へ過日之御挨拶として師實田宮彌太郎か許へ御使に往きたる次第凡水府に同じさて彌太郎かいへるの此間之一條諭

への敵の虚實淺深を測らす此方に有丈の彈藥を打拂らひ仕廻られたるを敵の品能く通れ課ふせたる如く手もなき事になり候ひぬ此儘に濟されんも如何なれの何とか工夫いたされたきとの事なりと更に憤激の色もなく悠然として物語れり罷歸りて此由申上しかの尾張殿の無爲彌太郎か迂濶さそあらん返すくも過日の御登城の以之外なる御失策なりきと御浩歎の外なかりしあり

一、此日於營中て被仰付如左

京都御使	間部下總守
外國御用取扱	久世大和守
所司代	酒井若狹守
溜詰格	本多美濃守

一、此頃は營中も世間も御三家の御登城の専ら公の御腰押しにてありしおと風説あるよしを聞き驚かせ給ひて如何様にも老公初の御不都合なりし

かと左もあり氣にや見えつらん大老初の嫌疑も誣ひかたしと御懸念ありて先つ大老へ御出ありて事の御次第御物語あるへしとの御心算なりしに大老の此比中暑も出仕の致し居られ候へと對客の斷られ候故さらの大和殿へ成とも御咄しおかれんとの御事にて明日大和守殿へ御出あるへき事に御懸合濟たり

平岡圓四郎
憤激ス

一、平岡圓四郎の此比中事機指迫りたる故狂氣の如く奔走周旋を盡して廿四日あんとは幾度となく磐邸へ來往して御消息を伺ひたりしに事既に成らざるに決せしかの憤歎殆血を嘔く計に惱亂せしか此日來りて御養君の御事の今更何とか爲ん唯天下の爲に怨ミ惡むへきの大老にこそあれ彼を壓倒し賢を擧て天下の大勢を挽回せん事此上の一大事なりいかて其籌策を廻らさてのおくへきと切齒扼腕して陳述せり是の遂に水府の大敗を惹き出つへき端緒にて大老も果して終をよくせられざる事はなりしあり一、六月廿七日久世大和守殿へ御出ありて御逢對の上仰けるの世間の人口

公、久世聞
老ト對談ス

に取るに足らすとの申あから水戸殿御初不時の登城の皆某かたばかりものせし事の様に申なす由にも承りて候へといかてかざる事の候へき夫の云々と仰せ譯られんと遊のされしに大和殿其事の絶へて御懸念あるへからす此大和守の水戸殿初の御申立も公の仰せも委敷伺ひ取りて候が正敷其御趣意違ひたれのそれならぬ事も知られ且 公を措て御三家方の御退出あしも亦其引證ともなすへき事にて物の心しりたらん者へさる嫌疑あるへくも候はすと申さる 公亦御養君の御事ニ付ての年來及建議候事も候ひて度々足下等をも御讓め申上しかと如此御定りの上の誓て舊見を忘れ忠誠を竭し候はん事勿論に候なり併し年比餘りに嚴敷申立候事に候への不平をや抱けると疑はるゝ事も候はんかと心の鬼も候故事新らしく申上候ありと仰けれの御念の入りたる御申條と承り候公の御忠貞疑ひ奉るへくも候はねと仰ありし趣の急度心得て候ありつきても困し入て候は尾張殿の御片意地にて如何にも當御時態に差障りて何事も取扱ひ兼候へは

御折柄も候へ、御會得あらん様に御辨論願はしくと申さる。公天下の御爲に候への如何程も力を盡し申へく候か夫につきても京師の御模様如何候哉御使も下總守殿へ被命たりと承り候嘸御配慮候はんと仰せらる大殿御使の事、下總の望みたるにて先年所司代中經歷の覺えもあれはと京師の事の掌握に入れたらん様に申おれり外國の事情なとの特に不案内にて候への京師の御疑惑を解釋せん事の甚覺束なく候への自身どカの事もなけに自負し候故又仕損し候はんかと危踏れ候なり兎角京師の事の甚心懸りに候への土州より三條内府公へ御執持の事を申入られん様に頼ミ申度候へと僕々卒然と申出兼候への一ト通り公より御申入れ置れ候様に願ひ候と申さる故此事の御領承ありて御歸殿なり夫々直に土佐殿へも此事を仰せ遣はされたり

質師謹て云。公天下の爲に英明の儲君を建られ御宗家の基礎を固くせられ幕政の衰頽をも挽回せられんと御立志にて年來御精心を竭され

しに天誥としかたく事已に此に至れり於是情ラ當世の事情形勢を御觀察あるに是迄の御聲聞の情に過たる少なからず將舉つて執權の重位に推薦し來りしも只此一大事の爲に耐忍せさせ給ひしかと今日となりて危難の世間久敷盛名の下に立せられんの朝野の嫌疑にも觸れ御本意の筋にもあらねの時勢に就て幕府の諸有司と御交通擔當御周旋之儀今後の總て遠江守殿へ譲り聞え給ひて御自ラハ恭黙の地に御拱手あらん事を思召定め給へり

一、六月廿八日平岡圓四郎内願之譯有之水老公へ被進御内書之御別紙橋公之御儀天授御英明絶倫と申儀は唯小于一家之説のみならず海内盛唱候事ニ而年來深感服罷在候右様之御方之儀を彼是申上候の聖を評候も同様ニ而恐多候得共御英明ならば愈以衆智を合セ取於人爲善之御大徳御成就御坐候様奉希度事ニ御坐候依之兼、俊直にして經濟之學ニ長候者等有之候へ、御講習之御相手ニ御薦申度と心懸罷在候得共如何

せん井蛙ニ而いまた其人を得不申深く遺憾ニ存居候事ニ御坐候併用人之道ノ古人も自始随脱カと申格言も有之候得りもし第一等之人を不得候り第二等を得て其材藝を爲御盡被成候事實に御肝要と奉存候殊更當今之御時代ニ而は爲公死力を盡し吐肝膽御奉公御輔沃申上候程之者折角御見出ニ相成可成丈ケハ御手前にて御扱擢有之度儀と奉存候右ニ付餘り推舉が間敷御聞入之程も恐縮奉存候得共天下之御爲とも存付候義故不願嫌疑奉申上候扱又御小姓平圓四郎儀は深く忠誠を存し是迄も密々之周旋力を極め於弊藩も力を得候事萬々に御坐候處事如此相定候上は橋公之御身益以御大切ニ而其徳を備へ其位を不被爲得事ニ候得は推戴歸服之黨媚嫉嫌疑之徒交錯蜂起可仕儀ニ候得は韜光養徳之際ニ當り鎮定豫防内外之情を通し幹旋仕候者無御坐候半而は御爲にも不宜處幸ひ平圓其材ニ長し居候得共當時之勤向ニ而は隔日之當番故風雲變態之秋ニ當り世間之情狀におゐて一日之間斷を生し是迄も數々不便之儀も不少

候得は今後ノ同人儀日勤之職ニ被命日々内外之御用相辨候事ニ相成候り、公之御爲ノ不及申於小予甚便宜を得候次第ニ御坐候乍憚尊藩ニおかせられ候而も御同様之御儀たるへき歟と奉存候乍併別段御扱擢ニ相成候而は外人之妬忌を醸し勤兼候儀も有之又疎外ニ移し貶竄ニ當り候而は當人之失望可致候得り纔一二等之進級ニ而御手元御用り是迄之通ニ而田安抔にて申候 抔と申振合ニ被仰付候儀は相成間敷哉御館人之儀を彼是指綺相願候儀は何共恐入候得共向後共公之御儀は何處迄も推奉倚頼仕候心得御坐候ニ付不願恐申上試候此等之條件程能御斟酌之上尊公之思召之振合ニ被仰成橋公へ被仰進被下候儀は相成間敷哉宜尊考被成下候様奉願上候

一、此日平山謙二郎左内か許へ來りて岩瀬肥州の建築のよしにていへるの薦賢の専心力を盡しても其事成りかたきの大老初威權の衰ん事を恐るゝなるへしされと大老新閣老各海外の事情に疎し魯國條約を初外國の事務

平山謙二郎
肥州ノ建築
ノモトヲ告

遷延壅滯して殆大事を誤らんとする勢なる故別に海防の一局を開らき宇和島侯を薦めて其局の總裁とあす事を謀らんとす外國の事には諸老も避易して持あくミたる折柄なれ其責を免れなれ其權を別局に譲る事ハ格惜すへからず此策成就せし隨つて眞賢を薦ん事も此局によつて爲すへし有志の持論一轉せし諸老の思ひ入れも亦變換して事の成に庶幾ん乎依之宇和島侯ハ大老初へ外國事務開局の事を建議あつて總裁にハ公を薦められ其事衆議となりたらハ海防懸の面ハ態と宇和島侯を推薦せんとの一策あり此事宇侯へは幸今参りて及陳啓御同意なれハ猶又 公の思召を伺ひ奉る由を申たり近來ハ永鴻臚も大ニ大老の旨に忤ふて危殆あれハ此人など疎外に遷りては支ふへからざるに至るへしとそ又京師の事は間閣酒若へ十分に關東の御威光を以て壓付候様との大老の内意にて愈事六ヶ敷なりたらハ承久の例もあれハと申出されたるにハ滿坐愕然として言を出すものなかりしとそ此等の事共左内より公へ申上たりしに公も多年思

右ニ付字和島侯へ書通

召込められたる御事業ハ成らせられす候へと猶天下の事ハ御憂勞被遊機會たにあらハ刑部卿殿を御參謀になりとも御薦舉あらんとハ御下心も被爲在御折柄なれば此策なとも然るへからんと思召せしかハさらハとて遠江守殿へも公も御同意の段被仰遣たりしに其御返書如左

謹讀仕候如御教示諸勢依然中窮迫ニ至候處閣下愈御勝康奉并賀候陳巖瀨下吏平謙獎家ハ直に端元迄罷越縷々申述候陳情達賢聽實ニ不可藥之勢扱々御痛憤之極ニ御坐候由御同意困窮仕候扱密策之事も御別慮無御坐候旨驚力丈及説得可申成否ハ當今之意味にて候へハ尤不可必御坐候酒若は以僕イヤニあり候故説話御斷申候久へハ盡力可仕候半裡面ハ緩穩之内ニ嚴正相含牛久へ陳論何卒表面ニ外殿事務局出來仕候様希望ハ致候得共不可測候〇魯之條約も早々いたし候様被仰遣候由ハ御尤奉存候只今出門懸匆略奉報迄如此御座候頓首 即

二白中略昨夜玄朴參此間再出ハ兩度 固陋當惑至極之密語計尙講談師

と心得一夕洋事情説得之事申含置候細密の期御面晤候以上

一、同日土佐殿の御答書如左

拜誦先々御剛健欣然之至奉存候中略今夕久世へいよ／＼參候定而三條之事被申聞候半と存居候應接之處貴兄御考と同意仕候僕昨日の相考候處態とむつかしき様に仕

廣堂ニ而以後人才御擇且早春々被仰出大變革等行事に見え候様御同列中斷然御憤發有之 京師縉紳之徒も爲之驚愕候程之御策御坐候の爲天下隨分周旋可仕在様無之唯今迄之通因循而已ニ而周旋せよなれの中／＼云々を反覆可申至結局猶篤と御熟考可被成と言葉を殘し可申いつれ後刻期面接候之頓首安政馬年六月念八鯨海醉候再拜

又白先刻之貴書の早速ニ長面先生へ差出申候昨日兀顛天狗にバカサレタル子細後伺可申候以上

一、土佐殿は久世殿御相對之御歸途晚景御來邸ニテ御閑談有之夜ニ入つて

御退散あり御談の次第詳ならず

水老公ノ内書

一、六月廿九日茅根伊豫之介持參水老公の御答書如左

如諭暑中無御障大賀々々過日者十六年前之儘ニ而於殿中得面晤御懇篤令多謝候

先に見し姿は今とかはるとも赤き心は同しかり鼻御一笑々々呵々

即刻

潜龍老人

松越殿參

御別紙毎々御懇篤縷々御教示之趣難盡筆頭奉多謝候事濟候儀の文略平圓濟の儀並ニ儒人中西之儀過日一々申遣置候扱又拙家に藤森恭助是は扶持遣し置候者事有志ニ候御序之節被召候て彼か申所も御聞可被下候但拙態と逢不申候

一、此度魯夷登城願候よし一体彼ノ布恬廷謀主ニて先ニも墨を先手ニい

たし内海へ乗入せ不法を致させ置此方の動静を見候上にて彼の御法を守り長崎へ來り實の墨に兵端をも開かせ可申程の事と被察候處日本之勇武の墨も聞おぢ致し居候への又墨の關佛を先手への致候事候半然るに追々於

公邊恐縮にて墨申如く假條約迄調印相濟候への魯來り魯の墨の願之如く無之カラフト被下候様云々杯願候は必於公邊の大坂兵庫杯と違ひ心易き事と直に御濟せ可相成との存意右地を被下候歟被貸候への直に人數を右地へ集城郭等堅固にいたし松前蝦夷を奪ひ夫々唇盡齒寒に可至候への右等之願有之共被下の勿論土地御貸も一切不宜と存候此義の大老初へ可申遣と存候尤是迄も追々申候得共今の代り候への是非可申遣心得候たとへ彼奪候共奪候への彼方の不法故追而取戻相成候への御貸被遊候又へ被下候杯の御名目にて追て御取戻相成兼候義故是非く又々建白いたし候心得

候

一此度の御申譯の間部上京のよし乍然夫のみにて誰か違 勅の儀主張いたし候閣を切腹にて不被仰付候てはどこ迄も 將軍家の御違 勅と申に相成候への主張いたし候閣を嚴に被仰付候上御申譯に御登せ尙又條約之中後患指見えの義の本條約の節御減杯申事にも無之候ての被對

京地御濟不被遊様被存候實の大老之立場にて不參候ての御不相當候への御申譯に大老登せ御相當左なくの自分御役御免隱居にて不致候ての相當不致候勤居候上の大老御申譯に登り不申候ての不得体事候前文違 勅を主張致候閣云々にも無之全く於

將軍家御違

勅と相成候ての諸大名違

勅將軍の御下知の不守杯申様相成候も難計徳川の天下への難替事に候への違

勅主張の閣嚴重に不相成候ての御大政も是切と恐れ候實に將軍家の御指圖にては御違

勅に相成候故云々と御諫申上候こそ閣老之持前候處於將軍家は左様之思召も無之に御違

勅之御名目を付候ての不相濟事と存候御覽後直に御火中へ御端書承り申候念六日家兒登城尾ハ右に付退散を尾へ參り只御申譯

に御使被遣候計にては云々と付誰かかぶり候者無之候ての如何且又條約之義も本條約之節減候段御申上可然云々との義相談に參り申候

一其節去ル念四急登城致候處以來の前日は右様の節は公邊へ申達候上に不致候ての法格に違候故云々之相談いたし尾州も尤之よし答候よしにて歸宅の上拙老へ申聞候故左様之事老中へ申は不及三家之

薩州候ヨ
來書

義此後ともいつても不時に登城いたし不苦と申候處念七日朝に相成り尾方も云々届候は不宜よし申來候に付甚立腹にて昨日はあれ程迄承知にて又只今ケ様申來候云々として腹立を念七への兩人拜領物御禮として登城いたし候得共前文の義も不申よしさてくこまり申候御内々直に火中へ

一此日薩州松平薩摩守脱カ殿へ被遣御密啓如左

扱例件種々周旋仕候處何共殘念之運に相成遺憾御坐候實の近來賀州專權にて櫻は稍衰微に傾夫よりして互に相排之氣味出來仕櫻の橋賀の紀と申様相成候處豈圖意外之元老御選舉相成此亦紀之説持論にて櫻益孤立に相成候得共兼而御盡身に依而京師に而の凜然賢且長者に思召止居候よし傳聞仕深難有奉存居候得共賀州は特に暴斷家にて勅にても命にても拜承不申旨一人斷乎と申張既不待勅命御發しにも可相成模様に至り候故小生も乍不及色々元老初へ周旋

仕り折くは寸功も有之候而閣中之計を折候義も御座候得共何分志有餘とも才足らす途に回天之力不行届所究去廿五日紀公と御發表に相成申候是全小生心配之不足に而深慚入候譯柄に御坐候故申上候も面目なき義に御坐候得共兼に御熟交之御義故不包奉申上候尤當月朔日御養君被仰出前に随分力に及候分の致置其被仰出後も一倍手強賢且長と申事申立候得共何を申も 廟堂之御大事一兩人之力に難及如何程主張致候とても空言同様にて用捨の不在我事故心配之萬力一も不行届誠は焦思に不堪奉存候尤伊達兄にも拔群非常之御盡力何共感服之外なき義に御坐候別して元老の御續柄も有之候故甚しき御周旋被下の忝次第に御坐候御序に御厚謝可被仰下候○廿四日は堪らへ兼卒爾に登城仕候處丁度折も折水尾両公も御登營被爲在今般達勅等之義御嚴責被成候處閣老一體頻に弁し返し候と申事に御坐候小子の唯一人夜分迄居殘何分此節達

字和島侯ノ返翰

勅之折柄御祝事處に有之間敷趣逐一懇陳候處道理に屈伏致なから是亦遂に行はれ不申實以残念之至難申盡候尤右等委曲之義當節諸端之事務取込居細カに盡兼候故過日來毎に貴臣迄内に以家頼爲申込置一言達致吳候様相頼置申候定而已に達御聽居可申と存し候に付唯大方之處得御意申候

一、此日伊達遠江守殿へ被遣御内書之御返翰如左
 短簡拜見不勝之天氣候處先以
 両賢兄愈御清康奉大賀候扱又平謙に御傳承も候半間部酒若兩人へ至重之役儀被命候處

京師之儀は掌握中に有之様輕忽浮淺之所存實に驚入候義發足不致前既
 に辱 君命段の明著仕居候無謀無智之淺慮に而手もなく相濟候様申候
 事に愛牛頗安心之光景と申事扱に危きの極と存申候間様子承り尙愚意
 も可申述と存候處中暑に而漸登

苦瀬ハ久世
ノナリ
校訂者識

昨夢紀事十四 (安政五年六月)

三百六

城いたし候得共逢對の四五日斷不得止今夕苦瀬へ參申候心得ニ御坐候
間部の以立朴内意さくり候處以の外淺慮天狗ニ而此儘ニての御使者の
不及申海防且第一外夷處置ニ至都而差支申候一寸申候得の英も魯も亞
も五倫も知らぬもの犬同様也犬か居間の庭上へ這入たりとて不審にも
なく懸念もなし人參間敷奥庭へ參候へは誰にても追出し候か捕可申候
今外夷の犬も同様也コンシユルたりとても取るニ不足おそるゝ事あり
しと申候由事情ニくらき事不及論候此他おして知るへし苦瀬の何と存
居候や眼前辱 君命候儀今日を見得申候ものを被遣候譯の無御坐候且
間の含の來月望過と見込居候様子絶言語申候兩兄ニも御工夫被下度春
岳兄御承知之外國事務局之儀の多少之申出趣次第十二分迄も説破之心
得ニ御坐候尙明後日得拜顔可申上候恐々頓首

六月小盡

大漢

春岳公

醉漢公 閣下拜呈

二仲先日自春岳兄拜借英艦圖完壁仕候以上

昨夢紀事第十四卷終

昨夢紀事第十五卷

七月朔日御登城如御例於營中井上信濃守殿へ御逢外國の事情御尋ありしにいまた差定りたる事も聞えぬよし唯宰執の方々不通にて何事を申立候ても更に裁決なき故此末の事とも、如何成行くへきかと歎息のみせられたりとそ

昨日字和島
侯久世開老
對談ノ件

一、昨夕伊達遠江守殿を御沙汰あつて師實今朝遠江守殿の邸へ参りたりしに御逢あつて昨夕久世大和守殿にて御對話之次第を被仰聞たり如左
先ッ遠州殿を廟堂におゐて京師の件を初今後大御變革彌増御多端の折柄諸藩も追々渡來實に御艱難の御時節と被存候が如何の御處置に相成候哉と御尋之處大和守殿御申聞之取り之事にて殆當惑之外無之御心附もあらへ承度と被申故下總守殿杯の如何見込被居候哉と御尋ありしに此人の隨

分世才のあれとも甚輕卒の事ともにて海防の事杯は是迄も一向ニ心懸無之事故唯口に任せたる事のみを申出交易の事杯も只日本同志の賣買の様に存候て事輕に心得たれ此度京都へ参りて如何申譯をするやらんと案しられ候ゆへ夫迄に端々論究も可然と申候へと夫も採り用ひすして何事も覺束なき事のみにて是と申見込の立へき体には無之と申さる故若狹殿ハ如何と御尋之處是も多分下總同様にて當今の事ハ誠に通故京都の事も甚掛念のよしを申さる備後殿へと仰せければ是も同様にて古き事ハ覺え居候得とも方今の事情ハ甚迂濶其上遲緩の性質に候へハ如此多難の時に取つてハ時機に後れん事を恐る、由を申されける故遠江守殿御承る處の如くにてハ思ふにまして御大切の御時節と相見え候夫ニ付御尋の事にも候へハ兼々心付候所を申試候半か如右御多務の折ニ候へハ外國事務を御振分ケニ相成別に一局を立られ海防掛の諸役を此ニ集め是に總裁一人被命候而外國の事務ハ應接其外一切此局へ御委任あつて御取計らハせ

扱大老初各方にハ大御變革を初御地盤の御政務筋御取扱あられハ兩端共に果敢取可申歟竊ニ方今の御政体を察候に内事外務混雜せる故互ニ牽掣して御手後れになる事もこれある哉に被存候されハ海防の件をたに御振分ケあらハ内政の煩も半を減し可申歟と御申ありしかハ大和殿大に感心あつて如何にも外國事務の爲に混雜を引出す事萬々ニ候へハ別局に振分けて事を行はんと申事ハ是迄誰人も心付申さぬ事にて候ひしか如何様にもさあらんにハ双方持取御爲よろしかるへくとおもはれ候えさらハ其總裁は拙者其の内にて心得可申歟と申さる故遠江守殿イヤ左様にてハ猶是迄の如くなるべしと御申あれハさらハ誰をか命せらるべきと申さる故大諸侯の内にて外國の事情心得たる者に命せられ候ハ、一途の精勤も行届くへくと存候と御申夫ハ誰よからんと申さる先つ越前薩州の外にハあるましくと御申候へハ如何様にも其邊にこれあるへきか御政務筋にハ關係なき事ならんかと申さる御政務に關り候と申ハあらねと外國に關係

せる御政事の各方と一處ニ商議不致候半てハ相適ヒ申間布其外長崎箱館等之庶政練兵及ヒ海軍の練練蕃書調所等いつれも御附屬ニ相成るヘキ事と存候と御申ありしかハ夫ハ如何にも廣大なる事夫程振分け候ヘハ地盤の事は大に事輕になり候ヘシ何分拙者ニおゐてハ甚御同意に候ヘハ早速可及評議と申さる遠江守殿外國の事ニ付而ハ永井玄蕃杯樞要の者に候處近比大老前不首尾のよし相聞候か實事なるやと御間ありしに夫ハ譯のある事にて御庭番の海野對馬守ハ大老の内間なるか此者長崎奉行たりし時永井玄蕃監察ニて長崎奉行對馬守か賊罪を發きたる事あり依之對馬は深く玄蕃をうらミて彼を大老へ譖せる故なり對馬の奸物ある事ハ勢州も兼而着眼せし事にて拙者も能く知れりと申さる鈴木藤吉郎ハ如何と御申ありしに是も追々取調らヘに相成るヘくと被答たる由杯を御物語ありし故罷歸つて之を申上たり

一、此日遠江守殿ハ御返書如左

昨夜ハ御投書忝奉拜誦候尙又容堂連名之貴翰も夜半盥手奉拜閱候愈御壯榮奉賀候昨夕愛牛云々ハ容堂子ハ申上候久世應接ハ少々入込居敷負參候故同人へ申含候間御聞取可被下候○カラムル辭書渴望之書御懇情奉感荷候即取入申候御蔭にて實用珍書入手大慶仕候今日ハ不參仕候得共明日ハ出仕恐々頓首

七朔

大廣間衆建白

一、此日大廣間衆より御答建白如左

此間御渡相成候御書付共篤と拜見退考仕候處魯亞兩國船申立候趣は英佛之軍艦於清國得全勝其勢ニ乘し近日可致渡來^{旨カ}且亞使節ハ假條約調居候ハ、御迷惑ニ不相成様周旋可仕段申出候ハ^{付脱カ}被遊御勘考候處如何程御迷惑ニ相成候共

朝廷ニ御申上濟ニ不相成候而ハ御取量難被遊乍然燃頭之大難不容易迫切時勢相至候ニ付井上信濃守岩瀬肥後守へ 被命於神奈川調印相濟候

由右様之危殆ニ相成候而ハ不被得止御處置ニモ可有御座候得共此儀ニ付而ハ最前々乍恐被爲惱

叡慮被 仰出候御主意も御座候故此場合ニ至候而も迅速以御使事情委曲被 仰上御伺可有御坐筋と奉存候尤

勅答不被 仰出前患起不測候場合ニ至候而ハ御不本意至極之義候得共臨機之御處置ニ相成候所ハ無御據譯ニモ可有御坐候得とも亞使節申立候ニ付一應之

天意御伺も不被爲在調印被

命候而ハ御違

勅之筋に相響何分御尤トハ不奉存候此上ハ早々御違

勅之御汚辱被爲雪候様御處置御坐候而何分ニモ被爲安

叡慮候様御施行有御坐度尙此後之御處置ニ付存意も有之候ハ、可申上旨被仰聞候處追々建白も仕候通りニ而別段心付も無御坐候以上

一七月二日惣出仕被仰出 若君様御目見被仰付 公にも御登城遊ハされたり

一此日大目付中ハ御觸

久世大和守殿御渡之御書付寫二通山口丹波守殿ハ御廻狀

七月二日

大目付

御名殿

大目付へ

今般魯西亞使節參府ニ付通行道筋屋敷々立番等差出ニ不及往來之者も平常之通通行爲致尤往來混雜之儀も有之候ハ、取締出役之者ハ辻番所へ申達制方爲致可申候其餘先達而亞墨利加使節和蘭領事官出府之節相達候通可被心得候
右之通向々へ可被相觸候

七月

御カ
大目付へ

今度神奈川表へ渡來之魯西亞使節出府登 城拜禮被 仰付候筈ニ候此
段爲心得相達候
右之通向へ可被相觸候

七月

土州侯大坂
警衛ニツキ
建白

一、此日土佐守殿は此度大坂表御固被仰蒙候付而之御建白寫爲御相談御廻
し有之如左

大坂之地勢ハ天下幅湊四譯も垂涎可申御警衛之義熟慮仕候處大坂ハ則
皇居御警衛同斷ニ而關東御警衛ニ比較仕候而ハ同日之論ニ無御坐候相
模守内藏頭ハ固其人ニ可有御坐於小生ハ拙劣不才折衝禦侮之御場所御
警衛仕候ハ俗之所謂瘦鷲重載と汗顔之至奉存候乍併是迄上國之海防御
手薄之義ハ有志之者竊ニ切齒歎息仕候ハ小生も當早春閣老ハ屢建義仕
候事も御座候へハ此度之 台命ハ不奉辭候

第一

外寇事起候ハ五六年之間世態之變移浮雲ニ同ク今日之勢と相成申候
今上ニも深く被爲惱 叙慮候段乍不肖 王臣之員に備候上ハ一日も早
ク堅固ニ御警衛仕度奉存候ハ愚忠之赤心ニ御坐候然ルニ弊藩ハ海濱に
接候所大凡百有餘里一區、二十萬石之國力ニ而ハ其海防ハ不足仕候
加之畿甸衝要之所御警衛奉蒙望洋不知所下手殊ニ鹵卒之台命ニ而彼此
處置仕候暇も無之御手當御扶助之筋奉願候

第二

御手當御扶助之筋ハ當今廟堂ニ而も御急務之筋御多端ニ被爲在候上同
列も有之十分ニ御可允難被成と奉存候又強而願候も如何ニ付七ヶ年
之間大坂御警衛之外關東參觀ハ勿論其他公務一切御用捨奉願防禦之手
段精々申付度奉存候

第三

御手當御扶助之筋參觀御用捨御可允御坐候ハ、一時之費ハ償可申候得共弊藩百有餘里之海防と兩端ニ相成候而は以後之處國力竭耗可仕ニ付豫州川上領分同様ニ被成下度左候ハ、大坂御警衛之手當ニ仕可申候且弊藩と上國との風馬牛も相及不申其間南洋風波之險も有之毎時舟船之往來隔絶仕既ニ先代之者爲之參觀之期遷延ニ及候儀再三御坐候太平無事之日參觀遷延而已ニ御坐候ハ、不得已とさへ申出候時ハ相濟可申候萬一緩急之時不都合出來候而ハ洋夷之猖獗ニ怖れ遲回退却など、同列に輕侮を受候も無念口惜き次第ニ御座候川上領分同様に被成下候ハ、平生手船差置南洋風波之時ハ同所ハ出帆仕度左候ヘハ迅速上國ニ可達候

第四

昨年出羽守讚岐守等大坂御警衛被命候ハ一年餘之日月を經候ニ一ヶ所之炮臺も御築作ニ相成不申庶堂之御評議摸稜因循ニ被爲 在候哉又ハ

出羽守讚岐守ハ孫吳之兵法賁育之勇氣相兼候を以炮臺などの恃不申哉然ニ右兩人此度 京師御警衛ニ轉し相摸守内藏頭小生相蒙候相摸守内藏頭之腹中の詳悉難仕於小生は武門ニ在なから兵法ニ暗ク男子ニ生候ヘとも勇氣ニ乏敷然ハ山河土地之形勢ニ隨ヒ要害設不申而ハ夷賊と戰争ハ難仕炮臺等速御築作奉願候尤炮臺御築作ニ相成候ハ、小生ハ御任セ被下度奉存候

第五

兵之勝敗ハ主將之明暗勇怯ニ有之器械之精粗ハ不足論と申ハ兵家之常言ニ御坐候然ニ洋外の時勢相考候ニ器械も決而不可廢と存候器械中ニも火器を第一と仕候只今御用意ニ不被爲在候得は銅ニて御鑄造之上御渡奉願候

但方今西洋之夷人多分鏡煩を相用候趣承申候 皇國ニ而ハ鑄工も于今其法研究仕兼候哉縱令反射爐を以鑄造仕候共炸裂之患御坐候因而

銅にて鑄造奉冀候

第六

長城之如き礮臺を築キ震炮幾百門架候とも峩艦無之時の嚴重之御警衛難相整裝艦有之候共航海術ニ達不申の進退難出來終ニ蛇足と相成申候元來弊藩の僻遠之地ニ而柁工篙師ニ至迄天性傲頑吾道を主張仕西洋之技藝などの別而開き難き惡癖ニ御坐候軍艦火輪船等喎蘭へ被命渡來之上御渡ニ相成候の航海術等嚴令を下シ督責仕度奉存候

第七

小生大坂之形勝の不紊内ニ御坐候得共一兩度立寄大概得要領申候流石天下之三都會と稱候ほと御坐候而彌望屋瓦普楚も當を失可申然に其居人へと申せの財利之道ニ巧黠なる富商豪賈而已ニ御坐候適雙刀を佩候武人ニ逢候而も生色無之恐怖仕以此相考候ニ魯帆墨船其他英佛等之軍船港口ニ蟬集仕兵端相開候時の右様之者必然風鶴ニ驚走仕候の不埃

智者明白ニ御坐候且又騷擾之間ニ人戸失火祝融跋扈又其傍ニ盜賊も蜂起可致内外之防禦數萬之士卒を指揮仕候而も如小生愚將の難及力奉存候甚苛酷之様ニ存候へとも滋蔓之戸口轉移被仰付大坂の空濶之地と仕度若シ人戸神速ニ取除キ難整候の、家財は舟車ニ載置一時ニ燒拂ひ可然往右秦始皇の李斯ニ命シ大切なる聖賢之書を尽ク燒申候況ヤ唯婦人女子ノ目を悅候壯麗之人戸 皇居御警衛之爲ニ御坐候得の惜き事も無之候

第八

歩卡無之而の兵を置候處無御坐候大坂空濶之地に相成候上の同所の土地相應拜領被仰付候哉又の御城中拜借被仰付候哉兩端早々御決斷奉願候只今之藏屋敷は狹小ニ而彈丸硝藥ノ置所迄無之候

第九

藝祖趙普を用ヒ方鎮之兵權收奪仕三百年ノ國家を保申候 神君之御創

業の當時昇平に至候の藝祖之策と符合仕候然に自古子孫祖宗之心を不察唯其法に拘泥仕候時の祖宗之良法に而國家を亡申候海防之儀の毎に被仰出も御坐候海防之急務の諸侯之疲弊を救候を以第一と仕候富國強兵に相成候迎二百年來御恩澤相蒙候者禍心を生候者の有之間敷奉存候但此義大坂御警衛に關係不仕様への存候得共海防第一之急務早春大變革云々被仰出も有之右之御一端にも相成候哉と出位なから包藏不仕申上候

右件に可否御評議之上御警衛相整候御仕向に相成候得の早に御暇被下度京攝巡見之上歸國家臣共と衆議を決し可申實に不遜之語不少恐懼之至乍併唯に而從仕而已に而一旦有事時忽狼狽可仕左候への廟堂に而も不擇人之御謬と被爲成區々の心不得已吐露仕候斧鉞之誅車裂之刑の閣下之處分は御坐候と奉存候已上

一、此日紀州衆山澤賀之助老女田川兄相廻候内密書附之寫當時右筆勤

- 御家人 村松 郷右衛門
- 御用人 御勘定奉行 御家來 菊池 角右衛門
- 御小姓頭取 同 石川 善左衛門
- 御小納戸頭取 野村 貫三郎
- 御小姓 森 求馬
- 御小納戸 實は角右衛門三男 大久保 又藏
- 御伽 同又藏伴 關口 勇助
- 奥 御執七不申上 御いし 大久保 清次郎
- 三上 快庵

御撰擧の上の兎角の事無御坐候得とも筆頭の兩人の殊更執政の心は叶ひ候人ニ御坐候殊に角右衛門の執政同意と承り込候事ニ御坐候學文は出來之人ニ御坐候得とも學文にも様々御坐候と奉存候石川是の宜き人

物ニ御坐候學文も遙ニ優リ手跡も見事ニ御坐候大久保平穩の人ニ御坐候御執じも不申上候御醫師を御供ニ仕候事深恐入候事と奉存候皆同意の人の計之由ニ御坐候野村御申越の通御取立の野村ニ而御坐候右之通ニ御坐候女中御役柄ハ調行届かね跡申_り

一、此日水野筑州ハ呈書如左

水野筑州呈書シテ大樹クノ達例ヲ告

前略今日は御用も御坐候由之處退出後御書相達候ニ付其儀不相心得且混雜旁以御目通も不奉願御不都合ニも被爲在候儀と奉存候中略今日は格別之御祝儀ニ候處風雨の昨と引替快霽時令も相當之儀奉恐悦候大君御容体も格別之御儀にも不被爲在御様子御安慮被爲遊候儀と奉存候右等ニ付而も少々承及候義も御坐候得共差向奉入御聞候筋ニも無之書中ニは認兼候事故拜顔之砌と文略仕候中略山石も未歸府不仕案外手間取申候乍然追々應接も相届候由彌四日參府之風説云々下略

一、此夕平岡圓四郎來りて京都の方周旋に遣す人_{日下部伊三次}を得たれハ此上ハ

尾張殿の御改心あられん様に田宮彌太郎へ辨説に及はん事を橋本左内へ依頼せり

水野筑州呈書右同斷ノ

一、七月三日水野筑州ハ呈書如左

小翰奉謹呈候昨今清暑ニ罷成候先以益御機嫌克被爲渡奉恐賀候扱は大君御容体之儀昨日

出御後以之外御障被遊候哉御息され等被爲在御上りも漸三十目位御小用は晝夜ニ而一合位御水氣も餘程被爲在候由是迄襟仙院日々相伺候而格別之事ニも不申上昨夕安塚相伺候處全ク御虚脱之御症其上御水氣被爲在御不食御水氣も十分ニ御惣体ニ相見え候由何分見留無之旨申立候由右已來奥向も大騒と相成今朝同人相伺候處彌御難症ニ奉見受候由申立候由四五日已來迄ハ_{前カ}六十目位之御食量ニ被爲在候得とも御息合等ニ被爲障候御儀は不被爲在昨日已來之御事ニハ候得共一体ハ余程以前ハ御催被遊候事ニ可有之全ク襟仙院不手際と申事ニ而扱々恐入候事ニ

御坐候町醫之内ニ而も被爲召候哉ニも風聞今夜よりの御ヒ初も詰切之趣ニ御坐候先日申上^{とは脱カ}相違仕兼而被仰下候事故不取敢只今退出草略申上置候謹言

七月三日

忠德

尙々永井初今日歸府可仕由過刻迄ハ未見懸不申候魯人も彌明日到着之趣右之中に本文之次第心配無此上當惑之至御胸憂知何計と奉深察候以上

一、此日左の通召出され候由

被召出	薩州
奥御醫師被仰付	戸塚 静海
	津山 遠田 長安
	肥前 伊藤 玄朴
	松平 駿河守 青木 春岱

宇和島侯

一、此日伊達遠江守殿ハ御來書如左

リ土州侯建
白ニツキ來

昨日は緩々得拜眉御同慶仕候乍然苦熱困窮御同情御坐候退出ハ醉漢方へ參候へは此度浪華守衛被仰付候ニ付難題數ヶ條可申立草稿被爲見候處色々六ヶ敷申出それなれハと官ハ御差免に相成候様之運策ニ而候條中ニハ甚不遜且觸忌諱儀も不少此書面出候ハ、頗景山殿之組合ニ趣忠謀却而不忠ニ可相成元來彼家二十万石ハ神祖以特恩被下置候儀並通外様國持以鋒先領候トハ霄壤仕候儀其邊も存量可有之事門地は貴家トハ又別段之譯も有之候得は旁心痛存居候得共即席云々申述候而ハ彼兄故落意可致事ニ無御座何れに貴君へも早々草案呈覽相成候様子故又御賢考も可有御坐何れ相伺可申と存上候得共略此段申上候故御同意にも候ハ、書面中甚敷分省き候様被命度奉存候懇篤之交柄故不爲ニ相成可申儀ハ相談可仕筈候得共閣下御胸懷之程も伺候上と昨ハ相控候き岩勢も今日ハ歸府と申事事情申上候ハ、伺度候布恬廷明日入都下候事と存候明朝ハ愛牛へ參候故尙様子可申上候頓首

一、此日岩瀬肥州の左内への投書如左
小簡拜啓愈御清勝拵賀扱唯今金川の歸府仕候魯船も平穩に而相變儀無
之候

條約之談判存外ニ葛藤を生し品々好申出候例之布恬廷之事故いかにも
張項不屈品々論辨を盡し漸亞同様之事と相成申候先御安心可被下候明
日出府之積り調判のいまた不相濟談シの先整候事ニ御坐候定而 君公
ニも御焦慮之事と奉存候間一寸一筆及内報候猶跡を追々可申述書外期
面晤草陳布字頓首

一、先達而出府せし御家老本多修理も 公の御周旋も已ニ空敷 儲君の事
も御定りニ成候故御暇被下今日日出立御國へ罷歸れり但五日の變事を信州察覺
ニて傳承し引返し十三日に出府せり

一、七月四日水野筑州の呈書如左

上略 大君御不豫之儀猶御容躰伺及候ハ、可奉入御聽旨奉長候町醫被

水野筑州
ヨリ呈書
大樹醫藥件
身上ノ件

爲召候趣の相違無之事ニ傳聞仕候蘭家も加り候哉駭と相辨不申候右
ニ付漢家何れも拙劣ニ付蘭家被爲召候義御尤ニも可被爲在候得共醫
道之義の未蘭家之研究熟達無心許私ニ取候而の今危急之病を得候と
も其病症ニ依候而の蘭家へ可托との不奉存候故此儀の御請の何共申
上兼候未因循之情脱兼候義御一笑奉願上候

一、此程田尊館へ御入之節頑生之様子御試被下置候ニ付極密御内教之趣
心魂ニ徹し恐入難有御承知被爲在候通之頑質右様之蒙御沙汰候の何
共當惑之次第ニ御坐候 師實寄ニ憶測スルニ警テ筑州ヲ橋府ヘ御附ケ被成度ト
ナラ 未熟不行届なと申唱候は世上一般之通言に候得共於拙の實以何
一ツ熟達仕候事も無之幼年之頃父兄に戒メられ候得共怠惰而已ニ而
成長今日ニ及悲歎難及存續候内存寄らす追々結構當勤迄ニも及實ニ
恐入居候事ニ而尤是迄一身之儀ニ付而の何方へも歎願等仕候覺無御
座候故當今に至候而の猶更以此上之心願等無御座榮辱とも時運に任

七只、當然之勤務を乍不行届勉勵罷在候迄ニ而尤於 田尊館厚く御恩遇も被成下候事故何ぞ御不興等奉蒙候而他轉ニ候得は不及是非左も無之候ハ、終身奉仕孤忠を盡し千萬一ニも 大君之御高恩ヲ奉報度之外更ニ他念無御座候故可相成は右ニ付候而之御配慮は先御見合被下置候様仕度尤如貴教田伊ハ御看顧も厚ク當人は當時之御場所内願にて成就之由故只今と相成候而ハ再勤ハ願申間敷哉松對ハ専ら内願も仕居候哉ニ内ニ傳聞仕候於私ハ此上如何様結構へ^{ニカ} 御本丸方へ被召返候共夫よりハ御屋形ニ而愚忠を盡し御高恩を奉報候方如何計歟難有事ニ御坐候左候迎前文申上候通故是又私ハ不奉願候得共胸裏之赤心出格之御懇命ニ付奉入御聽置候^{御屋形ニ修身奉仕之念慮を極候は} 仕候義御亮^{多少之意味有之勤願候ニ隨斷決心} 察奉願上候

一 布恬延到着之處御容鉢中ニ付往昔

天皇之御達豫高麗の醫を被爲召又太閤漢醫之藥を被服候先蹤も有之

魯醫を被召候而具ニ御病狀を詳に了解せしめ候ハ、布^{恬脱カ}廷も激怒等致間敷英佛渡來之上も穩ニ相濟可申旨之御垂訓は御確論ニ可被爲在候得共行ハ兼可申哉尤夫迄ニ至り不申候とも虚實は自然ニ貫通之義故懸りより眞實に説得仕候ハ、必定承伏可仕奉存候

一 御受是迄認候處へ近親罷越承候ハ今日玄朴靜海春岱奧醫師へ被仰付候由外ニ今壹人有之趣ニ御坐候全く今朝之御周旋相貫候事と奉推察候御安慮之爲メ不取敢奉入御聞候乍然此事ハ私ハ得失何とも申上兼候其内拜謁ニ御高諭可奉願と文略仕候下略

一 此日未刻過英吉利蒸氣軍艦三隻品海へ乗入都下騒然タリ處、注進如左
 一 七月四日夕浦賀奉行與力御用頼飯塚久米より知邸迄來書如左
 以手紙致啓上候然ハ今午ノ中刻イキリス船三艘内海へ到來ニ付此段御含迄御通申候左様御承知可被下候右申上度早々以上

七月四日

飯塚久米

越前様内

御留守居中

一、七月四日夜五時注進如左

竹挾を以御注進奉申上候然は今四日午中刻蒸氣之異船三艘上總下總地方ニ寄り追々走り通り尤何國之船ニ候哉遠鏡ニ而も睨と見留かね候然ル處南風烈敷追手風ニ付片時之内品川沖合へ乗入候様子ニ相見へ申候尤浦賀ハ先々之御注進一切不罷通間ニ合不申候右之段不取敢御注進奉申上候今日ハ魯西亞人十四人程今朝五ツ時頃私方小休夫ハ出府仕候乍端書奉申上候以上

午七月四日午ノ中刻過

神奈川宿

鈴木源太左衛門

越州様御内

水野脩藏様上

一、右注進ニ付即刻夜戌刻過脩藏義品川邊迄罷越探索實見之處昨夕鈴ヶ森邊ニ而ハ岸近く漕寄せしに暗礁カ隠洲に膠候趣ニ而沖の方へ漕退キ品川ハ一里許沖合ニ三艘共碇泊其他異狀無之御役方等も未タ出張無之尤諸家人數等之沙汰もなし内探索体ノ騎馬或ハ早駕籠にての來往ハ見懸ケたるよし五日曉七時頃罷歸相達候由御目付ハ申達之

一、右ニ付即刻尙亦爲見分探索旁三岡石五郎高島與五郎兩人早乗ニ而さしこされたり

一、七月五日今曉刁半刻頃御目付共ハ邸中へ口觸如左

英吉利軍艦三艘昨四日夕品川沖へ碇泊致居候由ニ付何時御用等可有之も難計候間他行等ハ致間敷火之元之儀別而嚴重可被申付旨ニ候

七月五日

一、同時岩瀬肥州ハ左内へ之投書如左

一、昨夜ハ御答御書面近況委細御示千萬謝候其後貴恙如何

平謙今日にも可差出存候處魯英兩様之騒と相成夜ニ入漸ニ退出謙次郎手明きかね何分指出候義難叶候ひき

○魯人も今日到着

拜謁之手續ニも可相成處御承知ニも可有之上天之日蝕にて甚不都合を極申候御賢察可被下候

○英は去ル二日下田へ入津今八時頃品海へ三艘とも乗込候由此様子ニ而は定而餘程手強ニ押かゝり可申哉と被存候浦賀より追かけ候船大森沖にて追付き候處一封の書を事務宰相へ出し早速御返事伺度と申事申出候由其外相變義も無之下田へ立寄亞人召連候ヒスケン通詞也を爲乗組参り居候由ニ御坐候明日にも一應接候ハ、少々の模様も可相分候類船ハ數艘有之と申シ居候由使節参り願参り居候

○如此萬國輻湊誠ニ不容易時勢に候處時務大臣各國之事情漠然にてハ百事冗雜のみ相成悉く機先をも失ひ果は如何様可相成哉何卒早々例

之御工夫有之度平謙も前文之次第外に如此キ緊要之事可話ものも無之只々當惑何卒神速ニ御良策有之度候

○天上之事も今日は御平也兩和蘭醫の調劑ニ相決候様子ニ御坐候

○英之來幸乎不幸乎未可知呵々

四日夜認置

彦

秧兄

平山謙二郎
ヨリ松本左
内へノ投書

一、同時平山謙二郎ハ左内へ之投書如左

過日は度々貴翰魯船渡來ニ付金川出張之折柄ニて不得拜趨遺憾昨歸府退散かけ升堂可仕積之處又々英船渡來蒸氣三隻右脱カなりニ付只今出張かけに御坐候次義第カに寄數日契濶可相成も難計其前火速ニ拜謁いたし度義有之又貴意をも相伺度夜中ニ而も不苦候ハ、御門御斷尊宅へ被参候様急速御取計可被下候

○今朝未明出張之積急ニ御報被下度御門前に控罷在候也

○萬々一選所出入難キ時は急々御断可被下候速々出張期ニ後レ能はさ
れはなり拜晤スル不能時の爲め左に心事を認候

英船追々數隻渡來之由狼狽の情ニ乘し外國事務を謀ルの賢相を
舉る策火速ニ被行候様宇遠ニ御説得有之度此事の行ル此一舉ニあ
りとふやらこふやら纏り候上ニ而り又々因循と可相成吾黨之憂ル
所の復善ニあり渠ノ然ル處の夷ニ接スルニアリ接夷畢レの賢才の
入ラスと之情となり肝心之復善之計ヲ廢ス是真ニ可憂又此事ニ就
て妙策あらぬ施し給へ可申候御投火希申候

七月五日曉

敬

景岳先醒 几邊

平謙の切迫如此ありしかと此時生憎ニ邸中異船の件ニ而騷擾の折柄故幕
吏の出入人眼に入り候而の嫌疑世界後患も難計ニ付左内接對之儀は迅速
相断り夫を登館して右書面を以入御聽たりしに肥州の來旨旁御放擲に可

水老へ内書

相成筋にもあらねと又差向き御施策の御手段もこれなき故一轉して水老
公へ御周旋の義被仰入なり可然との御評議に及はれたり
一右の次第に付水老公へ被進御内書左の如し

然は昨夕英船三隻品川沖へ渡來候處諸閣大ニ困窘と申事内々承及申候
且 上様ニも御重病被爲運何共痛心蹙額奉恐入候此等之大難時ニ臨ミ
鹵莽苟且之人のみにて政柄を執候何分目今之急務舉賢良黜奸邪候ニ
止り可申奉存候殊更外國事務は

皇國の御安危ニも關候事故難打捨奉存候へ共小生抔強而申候而は嫌疑
之條も御坐候間何卒其趣字和島^{脱カ}も御鶴聲御坐候様奉願度候字の固り此
邊之周旋も有之候得共 尊君之御一聲を得候へ、尙更憤發可仕歟と奉
推量候故相願申候事ニ御坐候尙又彌次郎圓四郎坏彼方へ被遣尊慮御申
込申候上御投策被成下候へ、十分之義と奉存候尤右兩人の毎々賤臣
迄申込候譯柄も有之誠ニ忠實之義と存居候故無伏藏得御意候義ニ御坐

昨夢紀事十五 (安政五年七月)

候何卒宇之盡力ニ而 御當家之御紀綱相振候事萬々奉希望候右相願度
草々謹白

七月五日

一、此日未刻過而御城使罷歸承調らへ來ル大略如左

一上様御容躰御平ニ被爲在御食も少々御進御好等も被爲在由今朝ハ伊

東立朴へ御轉藥之由但一昨日ハ青木
春岱御執ヒニ

一英船渡來之儀前以魯船ハ申立有之昨日番船等被差出候用意之處南ノ

順風烈敷有之意外に迅速之渡來と相成候事ニて三隻之内壹艘ハ兼而

沙汰有之献上船之由今朝爲應接井上信濃守殿津田半三郎殿出張之由

此他爲差異聞無之由

奇蹟到來ノ
件

一、此日ハ營中殊之外騒々敷趣に聞えたれハ再ハ御城使を指出し置れたる
に申ノ刻比なるへし御城使ハ申越せしハ今日御三家庶流并細川越中守殿
丹羽左京大夫殿阿部伊豫守殿松平佐渡守殿松平日向守殿等依召俄ニ登城

あるよし是ハ去月廿四日不時御登 城の御方々ニ付而の御用にもあらん
かと風聞せる由なりけれハ如何なる事の出來るやらんと人々色を失ふた
り暮時比にありて事愈實なる由を告げ來れハ一邸蕭索として針筵に座す
る思ひをかせり兎角して此夜ハ過て六日の曉丑刻計りに御用の次第稍分
明なる由を告來りて愕然たらずといふ者なし程なく公邊御徒目付ハ細川
越中守殿阿部伊豫守殿大目付山口丹波守殿御指添御出ある由申來れり六
日曉刁ノ刻比なるへし右の御方々御出あり越中守殿先ツ師實を召出され
て御内々仰ありけるハ御用の御次第御直達あらんにハ 公兼而の御氣象
故如何なる御請にや及はれんと御大老初殊之外懸念の様子にもある事な
れハ表立て御達のあらん前に御内々御對面ありて御相談さされ度との御
旨なれハ其段 公へ申上しかハ早速渡り御廊下ニおゐて御對面ありて御
相談の上御直請ハ相止爲御名代御家老狛山城を被指出たり
表向被仰渡之上御渡之御書付左の通り

松平越前守

思召御旨も有之ニ付隠居被
仰付急度相愼罷在候様

於營中 松平日向守
松平越前守事
思召御旨も被爲在候に付隠居被
仰付候
家督之義ハ無相違其方へ相續被
仰出之

松平日向守

家來共へ

同
松平越前守家相續被仰付候ニ付
跡相續等之儀勘考之上可申聞候

松平越前守隠居被仰付愼罷在旨被

仰出候に付松平日向守へ家督相續之儀被仰出候處

日向守事未年若之事にも有之家柄之儀に候へは

家老共申合萬端相愼諸事入念可被申付候事

右御書附之趣 御前へ申上之再罷出御請之次第左之通

思召御旨被爲在候に付隠居被仰付

意度相愼罷在候様恐入奉畏候家督相續
之儀同姓松平日向守へ被仰付旨難有奉存候

右畢而再重役御呼出ニ付天方五郎左衛門罷出しか

公の御愼御心得方之儀丹波守殿と御一所ニ被仰聞趣左の如し

御愼方之儀御親類御對面無之御書

通も無之様餘は右に准し御心得被成候様

別ニ

日向守様御引移の明夕迄にて可然との御含之由

右等相濟御一同御引取ニ相成しかの既に平明に及ひたり

一、七月六日巳ノ刻過 老公大奥御下段へ御引移り被遊たり

右御移り已前御自筆を以被仰出左之通り御家老中を諸士已上之面々へ被
爲讀之何も潜然として拜聽之

今般壹件ニ付定而一統不服之向も可有之候得共我等義從來丹誠相盡候
の畢竟御家門之身故只管

公邊御爲筋存詰候義ニ而一身之吉凶禍福を厭候所存聊以無之事ニ候殊更今般家督之義無相違日向守へ被下置候上の益御國內之御治平は不及申

公邊永久之御榮譽神明可致專祈存居候義候間家來共ニ於而も心得違不致各其職分相守我等同様日向守へも忠勤相勵候事肝要ニ候萬一感憤ニ堪兼不平之所爲等有之候ハ其心仮令忠義ニ候とも我等存意ニ相叶不申候間何分我等從來之趣意柄篤と相心得公邊之御義危略ニ不可存者也

安政戊午七月六日

御官名

御花押

一同時左之面々を 御前へ召出されて御意ありしハ其方共我等の腹心として是迄之精勤満足せり我等の生涯今日にて事了れり素々覺悟せし事なれハ又何をか云ん是ハ是等勤中遣し物の納めなるそと御落涙數行に被爲

及御手自被下置る品如左

御平生御帶御脇指

中根 敷負

御引移已來別段之精勤御満足 思召御旨ニ而被下之

御床ニ置かれし獅子御香爐 平本 平學

御手元御用出精相勤御満足 思召御旨ニ而被下之

御手馴れ御硯箱 天方五郎左衛門

右親遊庭御幼年之砌より隠居仕る迄之精勤を

御満足思召ニ付五郎左衛門へ御傳へにて被下之

御側ニ有之御革文庫 石原甚十郎

右御引移已來出精相勤御満足 思召御旨ニ而被下之

御机上ニ有之御掛硯箱 橋本 左内

右ハ昨年來御手元機密御用精ニ入相勤太義ニ思召御旨にて被下之

右何れも頂戴ハ仕りしかと悲泣嗚咽御請こも及ひ兼而退坐セリ

此日 當公未刻御供揃ニ而申半刻磐邸へ御引移り被爲在たり於大奥御對
顔之御略式相濟 中將様より御政務筋被仰送 御歴代之御書附諸士給帳
惣列帳等御譲り渡し被遊たり

一老公御謹慎の御次第他日大老初御沙汰有之由ニ而細川越中守殿
御尋ニ付御家老狛山城より越中守殿へ指出したる書付を以恐察し奉るべ
し即左に記す

御懇諭之趣且 御尋之次第ニ付左之通御請申上候

一越前守様御慎被仰蒙候處御承知御座候通り天保十四卯年御焼失後御
住居之儘ニ而一向御閉居之御間所無之ニ付無御據大奥御座之間上ノ
御間十二疊兩御圍御側入ひ切ニて六日朝四時御引移リニ相成是迄之表御居
間之儀は日向守様へ御譲りに相成候

但夜御寢之節大奥御對面所御三ノ間へ御移リニ相成候その御
座之間ニ而は男子之御床番出來兼候故ニ御坐候

一御座之間御障子御縁類二重共御へ切ニ相成候事

但此節之儀故御家來共相願御戻子障子兩三本入候事

一朝御晝成より夜中御寢迄麻御上下御正座之事

但於表 日向守様ニも御同様御上下御着用御家老初御役人共御
側向頭役之者何も上下着用罷在候

一御小姓御近習之者共悉く日向守様へ御譲リニ相成是迄相勤候御小姓
之内四人越前守様御方へ御殘し兩人つゝ隔日に當番相勤外ニ御家中
小供兩人被召出御前詰被仰出候一人は十歳 一人は八歳

但御前詰之儀ハ右子供之外被相止候

一勇姫様にハ日ノ内壹度夜ニ入り壹度御對顔有之候

一日向守様ニハ朝晩夜と三度ツゝ御對顔有之候

一御家老御側御用人御用人御側向頭取御廣式御用人右之分ハ不及伺御
前へ罷出候右之外田安御附御小姓御醫師等伺之上罷出候此外御前へ

罷出者一切無御座候勿論御親戚之御方様にも御對面無之思召に御坐候

一御直書被進度段御問合之向も有之候得共惣而御斷りに相成候御問合無之被進候への御封之儘御返却に相成候御調に御坐候勿論從是被進候義の一切無御坐候

一六日大奥へ御移り已前今般之御一件に付御家中之者共心得違無之様御書付御自筆に而御認御家老へ御渡相成候此外御慎被仰蒙候後御自筆物御間内へ出候儀一切無御坐候

但如前書小兒被召遣候故被召呼候人名杯鳥渡御認御渡に成候様之儀の有之候

一御慎中との乍申御正座而已に難被爲在に付御慰と申にの無之候へとも御看書御寫字或の詩歌杯の折に被遊候

一御家中一体之慎方の當時之處神佛參詣文武修行之外他出等も不仕物

靜に相慎罷在候様被仰付候尤御門外へ入込候者も諸家御使者或の御家中無據親類等之外他藩之者猥に立入不申様取計候事
右は御先格と申も無御坐一統途方に暮罷在候折柄故御不都合之儀も可有御座候得は乍恐
思召被爲附候御儀も被爲在候の、如何様共御教示被成下候様奉願上候
已上

七月

狛山 城

一、本月末越中守殿へ御談之譯有之 老公思召を以靈岸島之邸へ御隱居之儘被仰出 公邊へ御届之上海邸に而御建繼の御普請御出來 老公の十一月十一日夜 老君夫人の十二日曉御引移被爲在たり

附錄

御城御涉汰書之内

七月五日

松平左京大夫

松平肥後守

丹羽左京大夫

名代丹羽越前守

尾張中納言殿御事

(頭書第一)

思召御旨も被爲 在候ニ付御隠居被 仰出外山屋敷ニ居住穩便ニ急
度御慎可被有之候尾州家相續之儀松平攝津守ニ被仰付候此段松平左
京大夫松平肥後守丹羽越前守相越尾張中納言殿ニ可相達旨 御意ニ候
右於御黒書院御下段掃部頭老中列座紀伊守申渡之書附相渡之
別段御達書貳通

(頭書第二)

(頭書第一)

上使間部下總守
松平攝津守

右尾張殿御家御相續之儀被仰出之

(頭書第二)

別段御達書附

中納言殿急速外山屋敷へ被引移候様可被取計候且又中納言殿近親之面々其外總而書
通往復等無之様家老共初へ急度可被申達との御沙汰候條取締方厚心付候様可被致候
一 萬事攝津守殿竹腰兵部少輔成瀬隼人正無遠慮相伺宜様可被取計候
右之趣家老共へ可被申聞候

同斷

市ヶ谷屋敷へ被罷越中納言殿へ不及面談被仰出之趣竹腰兵部少輔成瀬隼人正其外家
老共へ被申含可相達之由被申聞書付兵部少輔隼人正へ可被相渡候御請も右之者共罷
出申達答ニ候

一 御請之儀ハ深更にも可及候間三人共明朝登城可被申聞候

松平讚岐守

三百四十九

松平大學頭
松平播磨守

水戸前中納言殿御事

思召御旨も被爲在候に付駒込屋敷に居住穩便と急度御慎被 仰出之
右は兼々中納言殿御心添可被成處御不念被 思召候此段松平讃岐守
松平大學頭松平播磨守相越前中納言殿へ可相達 御意に候

別段達

水戸前中納言殿急速駒込屋敷に被引移候様可被取計候且前中納言
殿附家來共の一同夫々御引替可被成候且又御近親之面々其外總而
書通往復等無之様家老共始へ急度可申達と之御沙汰候條取締方
厚く心付候様可被致候

右於同席列座同前同人申渡書付都合貳通讃岐守に相渡之

一伊達遠江守殿松平土佐守殿に無二の御交誼にて建儲の議を初天下の事

も 公と共に御周旋御盡力ありし事之ければ此日暮時頃御譴責を可被爲
蒙との確報を被爲得に付兩侯御訣別の思召にて御直書を以是迄之御挨拶
を被仰遣たり御報之次第の左に之を記す此兩侯も遂に 幕府の御嫌疑に
より遠江守殿に當冬に至り御内移り有之御願之上御隠居あり土佐守殿も
御同様にて己未の春に至り御養子鹿次郎殿御國許より御出府の上御願に
て御隠居なりき

一七月六日隈本侯の御傳に而來ル伊達遠州侯御密翰如左

乾坤否塞晦朦之時候得共宇内無比至忠至誠之閣下愈御安康奉依頼并
賀候扱は昨夜縷々御返翰追而土兄連名之尊牘共忙手奉盟讀泣血之外
無他實に事出不測如何とも不可爲痛悶憤悲汚濁之世奸黨滿堂之日忠
孝之有志除去の珍からず候得共如何にも自身手足を切斷してたをる
を不知如く無是非候何分僕輩退隠云々不被

命段不忠無志之程顯著晴天白日仰俯無慙之閣下ニ對し愧耻身を置候所なく生而無益死ても犬鳥も我肉を喰ましく御坐候時乎々伏希望する所の愈忠勇英偉御畜養被爲在異日龍雲之時被爲待度昨夜半貴書出候家僕山口丹波守方の遣置候處豈料同人義貴家に被差添拜趨仕候兄弟之情を以考へ不及論事外視シテ斷腸之至誠以君命とは乍申無上難堪勤にて當惑之由今朝六時過歸宅家僕へ乍泣血痛歎之密話仕候由僕なら迎も奉

命の出來不申兄弟如此も所謂俗言宿縁と可申悲慟不啻乍然言も無益ニ歸し候今夕愛牛の傳言有之退出の丹波守參候由退隱を促候義やと心裡樂待居申候多年閣下乾旋坤幹之御忠謀神策も泡沫ニ相成候段の遂ニ無益様候得共瞑目獨坐熟慮仕候得は今日迄

幕府之御威光ありしは千古無比之御鼎力ニ御坐候永岩之義云々被仰下候處閣下奉始尾水すら如此之仕合兩忠吏救護之程千万難必候迎も

傍觀仕居候義無御坐候尤永岩の死力及候丈の救助可仕候只今の愚父方へ一鞭馳參仕候故寸志荒々申上度何分御動靜伺旁如此御坐候今日之義貴家之御都合難量細川へ相頼遣候段御聞届可被下候爾後彌無御見捨様依舊奉希候恐惶頓首百拜

七月六日

尙以爲

朝野御自重伏而奉懇祈候救負左内杯も何分自愛仕様乍憚奉希候泣血濡襟袖外無他言吁々

密副書

規矩準繩なくん天下之方圓を不能正是迄御座右之品御惠投云々御深意充分奉了解居候併如僕愚昧用法も不辨知過望不當只恐悚愧耻仕候尤御懇切之御教戒殊ニ御重翫之玉器不離軀身猛省可仕候是非一度は以此器曲直相正候心得候不能申上候頓首

七月六日

一、此日土州侯より御密翰如左

忙手開絨意外愕然泣血之外無之僕相識未深といへとも舊知己方も御懇情何以喻之僕も亦不日如何可相成哉昨日の書取は是非出申候七日登城之節出申候嗚呼天下如何可相成哉

○外ニ差出すべき物無御坐候只今飲居候猪口近日差出候書取僕と思召御留置可被下候此時涙數行不能下字頓首

戊午秋七月五日

鯨海醉候

山内璋

呈沙量使侯座下

尙々此書并書取漏泄不苦候唯足下之所慮に任セ申候也

跋言

七月五日薄暮ノ報告ニヨツテ師實左内ト密ニ商議セシハ 公ノ御譴責何計ノ事ナランカ知リ難シト雖是迄日夜帷幄ニ參與シテ御寵用ヲ專ラニセシ事ナレハ事機ヲ察シテ禍害ヲ未然ニ防キ 公ノ御功名ヲ完全スヘキノ責ニ任シナカラ事已ニ此ニ及ヘリ吾輩ノ罪遁ル、處ナシ水府甲辰ノ難ノ如ク嚴譴參謀ノ臣ニ及ハ、素ヨリ其分ニテ甘心シテ斧鉞ニ伏スヘキハ言ヲ待タサル處ナリ然リト雖若又譴咎 公ノ御一身ニ止リテ吾輩ニ及ハサルヲ有ル間布ニモアラス然ランニハ視然トシテ生ヲ偷ムヘキニ非ス決心死ヲ失フテ

幕命ノ如何ン待ツヘシト互ニ申合セ取り鎮メテ從容平日ノ如キ積リニテ他人ハ何モ氣付カサル様ニ覺エタルニ 公ハ早クモ唯ナラスト御明察アリケン忽然トシテ二人へ御親裁ノ御諭書ヲ賜リタリ師實ノ拜受スル處如左左内へ下サレタルモ大同小異ト覺エタリ 御料紙割藤半切

是迄之忠誠感服ニ候家臣蒙罪候ニ不及段ハ國家ノ幸甚尙彌任重候間
後來之處モ申談度卒爾之義於有之は我を見捨候也

越前 仍

戊午七月五日

敦負

於是二人翻然トシテ感激シテ死スルノ過チヲ開悟シ死ヲ以テ御雪冤ノ
義務ニ心力ヲ竭サン事ヲ奮發セリ然ルニ左内ハ十月廿三日ニ至ツテ幕
廷ノ審問ニ係ツテ藩邸ニ幽セラレ翌年己未十月七日羅織ノ冤獄ノ爲メ
ニ斬首ノ慘刑ニ處セラレタリ師實ノ幸ニ免レテ今日アルモ皆 公再造
ノ盛恩ナリ

一 本月七日比ロヨリ礫邸ニハ尙又再ヒ事アルヘキトノ聞、エアツテ爾後庶
流ノ衆或ハ執政ヲ 幕府又ハ閣老ノ亭ニ召シ呼ハル、等ノ事アルニ依
テ其度毎ニ御家ニモ御連累アラン様ニ處、ヨリ密告アリ各忠厚ノ實意

ニ出ツルト雖モ其虛實定カナラハ御家臣共ニ於テハ捕風掣電魂ヲ消
シ神ヲ傷マシムル而已ナリキ就中大老間閣殘暴ノ壓制ヲ逞フシテ吹上
ケノ御庭ニ牢獄ヲ造リ水老公及吾 老公ヲ縛收シテ此處ニ置カントテ
其施設既ニ出來セシナト歷々見タルカ如キ説ヲ傳フル者アリ又内外ニ
間牒アツテ晝夜トナク邸内ノ事情ヲ伺察シ師實等カ如キ他行ノ前途ヲ
探索スル由ヲ流布シ水府ノ同志ヨリハ老公御往復ノ御書類吾輩ノ書通
併セテ投炎スベキ由ヲ告ケ來ルナト總テ危険ヲ極メタル事共ニテ一邸
寢食ヲ安ンスル能ハス明日ハ捕手ヲ指向ケラル、歟今夜ハ事ノ起ルヘ
キヤト針筵ニ坐スル思ヒヲナセリ仍之幕議若シ顯露ナル暴舉ニ出テナ
ハ磐邸ヲ自燒シテ黒烟ノ中ニ落シ奉ルヘキカ又穩便ノ處置ナラハ近頃
新タニ出來タル御右筆部屋ノ穴庫ノ内ニ藏シ奉リオキ前日己ニ御國許
ヘ御脱走アリシト誑キテ御重臣共腹ヲ切ルヘキカ抔困難至極ノ窮策ヲ
密議スルヲ日々ナリ石原甚十郎ハ暴舉ニ至ラハ目釘ノ續ク丈ケ切リ死

スヘシ緩計ナラハ自ラ日備ノ者ニ扮シテ 公ヲ負ヒテ脱走スヘシトテ
 毎朝ノ出勤前ニ刀ヲ拔テ打振リ、腕ヲ固メ又穢レ垢付キタル浴衣ヲ
 持チテ登城セリ又船ニテ落シ奉ランカトテ薩藩ノ同志ニ密議セシニ此
 比薩船ハ江戸海ニ碇泊セサレハ事アラシク敢死ノ壯士ヲ進ラスベケ
 レハ御家臣ヲ交ヘラレズ此者共ニテ 公ヲ圍繞シテ走ラハ人目ニモ障
 ラテ御國許マテ萬安ニ護送シ奉ルベシトテ十六人ノ姓名此姓名投與ニ付シタリ可惜
 指出セシナト虎尾ヲ跋ム心地ニテ時勢ノ切迫ナル當時ヲ想像スヘシサ
 レト八月末ニ至ツシ礫邸再度ノ御處置モ濟テ御家ニハ何等ノ御關係モ
 ナカリケレハ記スル如キ危急ノ風聞ハ漸々ニ鎮靜セリ是ヨリ先キ水府
 ノ有志輩時事痛歎憤激ノ餘リ内 勅ヲ申シ下シテ大老初ヲ貶斥シテ
 幕政ノ興復ヲ謀リ八月ニ至ツテ 勅詔ハ請ヒ得タレモ礫邸ニ於テ開達
 ノ事行ハレス計略悉ク齟齬シテ翻テ再難ヲ來タシ數千人ノ壯士出府シ
 テ冤ヲ訴フルナトノ事ニ及ヒ 幕府ノ騷擾モ大方ナラス遂ニ 老公ヲ

水府ニ幽シ安島等ノ大獄ヲ發コスニ至レリ此件毫モ吾 老公ニ關セス
 ト雖モ十月ニ及ンテ又左内ノ事アリ邸議國情又之カ爲メ穩カナラス人
 心疑懼ヲ懷ケリ七月五日已來ハ總テ外交ヲ禁絶セラレタレハ邸外ノ事
 ニ至ツテハ彷彿トシテ霧中ヲ望ムカ如ク其詳ヲ得ル能ハスト雖モ此ニ
 内外ノ梗概ヲ記シテ當時臣子薪膽ノ情意ヲ後者ニ示ス耳

十一月中淺井權十郎政由ノ忠告ニ答フル書

前書略扱ハ老生儀先達テ島御用御免ニ付テハ直様引退モ可致ノ處其
 儘相勤罷在候ニ付種々風説モ有之嫌疑モ不審モ不少已ニ濫隱老澤谷
家隱居大 澤淡水モ被出懸詰問モ有之由仍之御心付ノ次第一段引籠モ可然哉ノ
 趣御細示被下誠以重々厚謝之至存候老拙是迄御威光ヲ以テ僥倖ナカ
 ラ多年威權ノ地ニ罷在候故彼是ト申ス世評ハ有之由候得共白地ニ忠
 告致吳候者ハ一兩輩ナラテハ無之處御重縁ノ御因ミモ有之拙家ノ儀
 ヲモ被懸御心頭候得ハコソ如此御懇諭モ有之義ト實ニ感荷至極ノ儀

ニテ晴曉院様權十郎祖父新六政長師實ノ叔父御生前ノ御垂誠同然ノ義ニテ謹テ致服膺早速内願等モ可差出義ハ勿論ニ候處老拙身上ニ於テ別ニ所見有之御來諭ニ隨ヒ兼候次第ハ則別紙ニ書取供御一覽申候拒諫飾非ニ似寄候テ御懇情ヘ對シ候テハ心外ノ至候得共小拙已ニ老境ニ臨ミ今更晚節ヲ屈候テハ年來ノ苦心モ徒ラ事ト相成候譯故何分ニモ素心ヲ貫キ申度見込ニ付其段存体ニ申述候事ニ候聊モ御親情ニ戻リ候筋ニハ無之段ハ深ク御憐察可被下候夫故無據御忠諫ニ隨ヒ兼候得共此末共御心被附候義ハ無御見棄御垂諭可被下候誠ニ當春迄ノ見通シニテハ中君御年來ノ御大望モ必定御開達ニ可相成候得共老拙モ是迄數年綱渡リ同様ノ筋一ツ違ヘハ御令名ニモ拘リ候危險ノ地ニ立居候事候ヘハ御大志サヘ御遂ケ課セニ相成候ヘハ此御一件ヲ御奉公納ト仕リ老生相當ノ閑散ノ勤向カ又ハ退隱ニテモ可相願歟トノ心算ニテ御坐候故昨年來ハ不願一死精神ヲ勵マシ乍不及奉賛成度積ニ候處豈圖ラ

ンヤ此御一件ニ被爲及候條不聊憤懣無限ノ至リ實ハ是限リト存候得共別紙ノ通りノ次第ニテ心ヲ取直シ見候得者百敗不屈ノ志操ニ本付不申候半テハ丈夫ノ道モ不全候故擇ンテ舊轍ヲ蹈ミ罷在候事ニテ神以テ勢位ヲ貪リ寵祿ヲ眷戀致候譯ニハ毛頭無之私情ヲ申候ヘハ内外ノ物入且ツ御内御承知ノ通りノ内件モ有之小兒共ノ處置等ニ付テモ一白モ早ク致歸郷度ハ人情ノ常ニ候得共非常ノ御時節ト相成候上ハ又非常ノ御奉公モ可仕事ニテ實ハ難澁至極ノ事ニ候ヘハ一ト通りノ世情ニテハ何ソ別ニ此等ノ困窮ニ換候テモ宜敷程ノ事ニテモ有之様ニ可存候得共決シテ左様ノ譯ニハ無之殊ニ可憐ノ身上ナルヲハ偏ニ御恕察可被下候必定此表ニ隱妻等有之飯心無之抔トノ惡評モ可被行哉トモ存候得共宦途ノ艱難ニ家郷ノ顧念有之候テハ奉公モ專一ニ難相成故不得止事次第ハ難婚ノ件アリ已ニ粗御承知ノ譯ニ御坐候老拙身上ハ右ノ仕合故明日ニモ中君御開運ノ時至リ候得ハ其時コソ歸郷相願

度此御時節無之候得ハ衰朽迄在京ノ積リ夫モ別紙ニモ相認候通來春ノ處ニテ公邊沙汰ニ不相成候ヘハ不及是非其時ハ其時ノ覺悟ト存居候右等ノ次第御含ミ猶又澁老等ヘモ御序ノ節御物語且別紙ノ義モ所望有之候ハ、御開示可被下候又平本但見ヨリモ申越候義有之ニ付委細ノ義ハ貴兄迄及陳啓候趣及返報候間是モ所望致候ハ、別紙爲御見可被下候尤別紙之趣ハ貴兄初御國中ノ人ヘ對シテ辨論ニテ此表ニテハオクビヘモ出シ不申偏ニ屏息罷在候義ハ御承知ノ通ニ候得其實ヲ吐キ候ト虛ヲ示シ候トノ味ヒ所謂當時ハ處女ノ如クニ罷在リ脱兎ノ勢ヲ得候時ヲ相待居候事ニテ候吳々於此表ハ曾テ辨論不致聊ノ圭角モ顯シ不申候間此處ハ御降心可被下候

別紙

老拙義年來

中將様莫大ノ恩遇ヲ蒙リ御内外ノ御用ハ不及申昨年來別テ機密ニ勤

職イタシ罷在候故先達テ中將様ニハ御嚴謹ヲ被爲蒙候得共參謀ノ老拙鐵面皮ニ平々依然相勤居候義衆人ノ嫌疑如何ニモ左モ可有之尤千萬ニ御座候則老拙モ御當日一段ノ處ニテハ中々退役處ノ事ニハ無之一途ニ割腹モ可仕ト致憤激候得共取リ鎮メ義一ノ當否ヲ致省察候處左様ニテハ所謂感激シテ死スル者ニテ從容就義ノ位地ニハ遠ク相成候故忽チ思ヒ止リ申候其子細ハ從公邊被仰付義ニ候ヘハ聊辭シ不申候得共自盡致候テハ死スヘキノ罪アリシニ相當リ申候君辱メラレ臣死スト申事モ有之候得共是ハ辱ヲ雪ク爲ニ死候事ニテ辱ニ屈シテ死スルニハ無之候ヘハ此時死候得ハ御辱ヲ重ネ候而已ニテ雪ク道ハ更ニ無之故死スヘキ時ハ外ニ可有之ト存候テ相止申候夫ヨリ後追々御承知ノ通り水老公ヘ御荷擔ニテ毒殺謀反等ノ浮說流言礫石流金ノ勢ニ御坐候ヒシカモシ老拙初兩三輩モ於御當藩及自殺候ハ、姦党時ヲ得テ毒モ叛モ實ナレハコソ主謀ノ者引受ケ致切腹候ナトト尾ニ

花ヲ咲セテ申囃スヘク左様相成時ハ虚説モ實事ト變シ嫌疑モ眞據ニ
飯シ可申事ニテ候ヒキ此地而已ナラス御國元ナトニテハ無申譯次第
有之事ト可存候左候得ハ夫ニテ相濟候得共申譯ナキ様成事ヲ御勸メ
申上候ニ付被仰譯無之様ノ事ヲ被遊候故御科代被蒙候ニ相當リ夫レ
社眞ニ申譯無之事ト相成可申候

一中將様ニ御過チ有之哉如何御見聞ノ通り毫ノ御過失モ不被爲在候ヘ
共時變ノ遷替ニヨツテ忽チ奇禍ヲ來タシ候ハ實ニ御徹運御薄命ノ至
リニテ遺憾徹骨髓候次第ニハ候得共 中將様ノ御精忠御公義ハ金石
ヲ貫キ日月ヲ争ヒ候御義共ニテ一点ノ御私心ハ不被爲在候處如此嚴
譴ヲ被爲蒙候ハ 中將様ノ御過咎ニハ無之乍恐 公邊ノ暴虐誣妄ト
申ス物ニテ候然ルヲ其臣トシテ罪ヲ引テ或ハ死シ或ハ退キ候テハ夫
コソ咎ヲ君ニ誣ルト申ス者ニテ候御家來共ノ平氣ニ罷在候ニテ 中
將様ノ御過チ無之事ハ相分リ申候強暴ノ虚喝ニ恐愕致シ銘々尻込ヲ

致候様相成候テハ上下共ニ自ツカラ咎ヲ引キ罪ヲ受候事ニ相成候世
上ノ見聞モ君臣共如何ニモ申譯ナキ筋有之歟ト可存候老拙平氣罷在
候故平氣ニ付テノ嫌疑如來論ニ候得共若シ彼時死候ハ、死ニ付テノ
嫌疑萬々可有之死後ノ嫌疑ハ申釋クヘキ様コレナク生前ノ嫌疑ハ解
釋ノ期有之候

一中將様此般ノ御一件當時ノ臣子親布奉見聞事故殘念ニモ有之御痛ハ
シクモ有之千萬無量ノ感慨悲傷相萌シ候得共天下後世ノ論ニ懸ケ候
ハ、何ト可申上哉恐ラクハ 徳川家ノ御爲ニ宗室ノ御立場ヲ御踏マ
ヘ被成候御所業タル事ハ千載ノ青史ヲ照シ可申御美事ト奉存候然ル
ニ其時天下ニ死スル者有テハ萬代ノ嫌疑ト相成ルヘク候乍恐當時ノ
如ク被爲蒙御冤罪ハ不及是非候得共天定勝人ノ時至リ候得ハ
公邊ノ御過チハ自ラ明白ニ可相成事勿論ニ候ヘハ御家來ニ於テハ平
々肅々可罷在事義理ノ至當ニ有之候衆人ハ此度ノ御義ハ御一己之御

家政ト違ヒ天下ノ公論ニ關係スル御大事故 中將様ヲ奉哀惜ノ餘リニ答ノ老拙輩ニ歸セサルヲ憤怒致シ候モ愛君ノ切情ヨリ出候事ニテ一應ハ尤ニ候得共臣ノ答アルハ即チ君ノ答ト相成事ニ候ヘハ臣ニ答ナキハ素ヨリ君ノ答ナキ所以ト申公大正明青天白日ノ如クナル遠大ノ規模ニ心付不申故ト被存候眞ニ御惡事御過チ被爲在候ヲ諫爭モ不致御嚴譴被爲蒙候事ニ候ハ、臣下ノ罪難遁候得ハ御過チヲ一身ニ引受ケ如何様ニモ罷成聊ニテモ御答ヲ輕ク致候義ハ臣子ノ職分勿論ニ候得共夫レト違ヒ此度ノ御義ハ天下ノ爲ニ御忠誠ノ御盡力コソ被爲在タレ聊ノ御答モ御過チモ無御坐御事ニ候ヘハ此時ニ當リ御家臣ニテ周章狼狽ノ舉動等有之候テハ御答過モ有之様ニ相見エ候而已ナラス他日御雪冤ノ後ニ至リ御忠言御義行御家臣モ相加ハリ罷在候事ノ様ニテ御答ヲ分チ御罪ヲ輕メ候反對ニテ御成蹟ヲ分チ御美名ヲ偷ミ候ニ相當リ可中候右ハ老拙ノ死セサル所以ニテ候

一 中將様御用御免被成候テモ不相變平氣罷在候譯ハ左ニ相認申候此義ニ付一段ハ大ニ迷惑昏乱致シ申候御耻ケ布候得共御後學ニモ可相成哉ト有様申述候元來老拙義ハ御承知ノ通別段ノ 寵恩ヲ奉蒙候事故何處マテモ 中將様御側ニ罷在度ト申義ハ前條一死ヲ思ヒ止候砌直ク様書取ヲ以テ政府迄申立候事故是非御附振リ除ノ積リニテ恐レ入候事ナカラ御表ノ事ニハ切ニ關心モ不仕程ノ事ニ有之處請閣老内意ノ由ニテ田安御館ヨリ御移リニテ左内ハ
中將様御手元ニ不被召仕様其他モ才氣有之者ハ不被召遣方可然トノ御沙汰ニ付老拙モ御勤中機密ニモ預リ候者故才子ノ中へ入レラレ候按梅乍併名指ニハ無之故色々ト周旋イタシ多分靈岸島へ參ラレソフニ相成候處或時、中將様御前へ被召其方ハ乍太義表ノ方ヲ勤メテ吳スハナルマイトノ御意有之候斯時老拙ノ一心忽チ昏迷シサテハ
中將様ニモ御謹ミノ御身上ト被爲成候故老拙ノ硬直ヲ被爲厭被召仕

候思召ハ不被爲在哉サヲハ最早是迄ト存詰候テナンニモ申上候事ハ
コサリマセヌ御請ハ仕リマセヌト申棄テズツト下カリ部屋ノ刀ヲ持
チ御小屋へ可罷歸ト致候處へ左内驅ケ付ケ何分 中將様御意ナリ再
ヒ罷出候様トノ事ニ候得共罷出候テモ申上候事無之直様御小屋へ罷
リ歸ルト申候處左内モ種々辭ヲ盡シ申聞候得共老拙ハナンニモ不申
決心ノ上御前ヲ下カリ候上ハ不及罷出ト申放シ候故左内モ致方無之
努々粗忽ノ義坏致間敷ト申口上ニテ老拙ハ引取候處直ニ金兵衛ヲ被
遣何分ニモ罷出候様トノ御沙汰ニ付再三再四難罷出ト申居候内聊カ
靈臺ニ明カリサシケ程迄ノ御懇命難默止カト申一念起リ候ニ付左候
ハ、追付可罷出ト申金兵衛ヲ返シ夫ヨリ默然沈思罷在候處へ又々左
内來リ出勤遅キ故左内被遣候由罷出候ハ、御直ニ可被仰聞候へ共先
ツ左内ヲ以テ被仰聞由先刻追々譯合御話シ可被遊御積リノ處御一言
ヲ承リ夫レ切リニテ顔色ヲ變シ罷立候故殊ノ外御懸念思召候由先刻

追々可被仰聞ト思召候御趣意ハ海邸へ教負不被^{行カ}召連度名指モ無之事
故苦シカル間布哉ト極密田安へ御内調ニ相成候處當分ノ處ハ何分御
遠慮可然來春トモ相成候ハ、時勢モ變リ可申又其節ノ御分別ニ被成
候様トノ御事故

中將様ニモ不被及是非御表ノ方相勤候様御沙汰ニ相成候事ノ由申聞
候故此時老拙全身冷汗ヲ流シ左様ノ御義トハ不奉存々詰罷在候心算
致齟齬候事故不圖モ最早御見棄被遊候歟ト覺悟仕候ハ全ク頑陋ノ僻
見根生ヨリ出候事ニテ此度コソ實ニ恐懼不知所措仕合ト左内迄御詫
申上候内又々金兵衛被遣左内ヨリ申聞候事承知候ハ、夜陰ニモ相成
候間明朝罷出候而モ宜トノ御沙汰ニ付翌朝罷出肉袒負^下刑重々御詫言
申上候事ニテ其以來ハ再ビ平氣ノ平左衛門來春迄ノ處依然トシテ罷
在候來春ニ相成候テノ進退ハ如何相成可申哉老拙ニテモ未タ定見無
之時變ニ隨ヒ候積ニ御座候右ノ通りニテ一心ニ思ヒ詰候儀卒然致變

換候得者心思モ致動轉候テ有ルマシキ心モ起候事ハ兼々工夫罷在候
 得共事ニ臨ミ候ヘハ及失措候モ矢張素養厚カラサルヨリ出候事ニ候
 間御後學ト申ハ此處ニテ貴様杯御壯年ノ事候ヘハ此末何ン个度モ可
 有之ト被存候老拙モ今少シ早マリ候ハ、大騒動ニ可相成義ト今トナ
 リテハ我身ナカラモ恐ロシキ事ヲ致候ト存候右ノ次第ニ候ヘハ、中
 將様御手元ヲ離レ相勤候心底毛頭無之候得ハ只今ノ處ハ不及是非春
 フ頼ミニ个様ニ罷在候

一中將様个様被爲成候ヘハ世上ノ事モ忙々然ト可相成トノ御推察御尤
 ニハ候ヘ共老拙ニ於テハ一向左様ニテハ無之此度之御儀ハ素ヨリ御
 冤罪ト申御壯年ニモ被爲在候ヘハ晝夜御雪冤ノ工夫將又御雪冤後ノ
 御處置等反覆考思罷在候故 中將様御上ハ御勤中御同様ニ存上ケ聊
 御隱居ノ御身分トハ不奉存上候ヘハ苦樂共ニ更ニ今日ノ上ニハ着眼
 モ不致屈度モ不致候故如何ニモ衆人ノ嫌疑可遁様無御坐衆人ノ思ハ

又處ヲ考ヘ衆人ノ居ヌ場ニ居候故彼是申モ尤至極ニ候得共老拙ノ定
 見ハ此外ニハ無之候御役モ數十年相勤候ヘ共是迄嫌疑ト誹謗ヲ恐レ
 候義ハ曾テ無之夫故ニ御爲ニ不相成事モ可有之候得共老拙ニ於テハ
 恐レ候テ御爲ニ相成ト申見詰無之候故確乎不拔ノ地ニ立居候積ニ御
 坐候

右ハ 中將様御義ニ付艱難ニ逢候テモ忙々然ト不相成譯合ニ御座候
 一 退役相願ヒ一段引籠ミ御城下一統之嫌疑不審消散ノ義第一ノ上策タ
 ルヘクトノ御懇示千萬感荷ノ至リ老拙身ニ取候テハ如何ニモ上策私
 情ニテ申候ヘハ夫程安樂ナル事ハ無之候ヘ共老拙前々ヨリ相願ヒ退
 役ト申義ハ甚嫌ヒニテ候其譯ハ世祿ノ身分官途ノ事ニ於テ退役相願
 候程ノ事候ハ、死テ仕廻フカ宜シク死ナヌ位ナレハ退役被仰付候迄
 相勤候ヘハ夫ニテ相濟候事ト心得候乍併是ハ内願退役嫌ヒノ譯ニテ
 此度退役引籠候事出來兼候ハ右嫌ヒノ故ニハ無之當時天下ノ形勢實

ニ戰競ノ至リニ候得ハ如何變動可致哉モ難測候此表ノ義モ已ニ先達
テ水府一件ノ様ノ事モ有之此上共於都下何時不測ノ變亂可相發モ難
知候其節 中將様如何可被遊哉ト存候ヘハ中々望郷ノ念ハ起リ不申
候當時廟堂ノ御模様モ京都ト諸大名ノ扱ヒニテ殊ノ外御多事故外國
ノ事抔ハ更ニ打遣リノ様子此ノ形勢ニテハ假令京都ニテ御許容ニ相
成候テモ來年六月迄ニ中々交易ノ支度出來サフニモ無之御許容ナケ
レハ戰鬪ニモ可相成イツレニモ危難ノ事左候ハ、都下ノ模様如何可
相成哉不服ノ人心モ一時ニ蜂起可致候其時ノ騷動如何計ナラン其節
中將様如何可被遊哉ト存候ヘハ引籠候テ一身ノ安心ヲ計リ嫌疑不審
ヲ消散抔ノ所存ハ更ニ無之深カ案事カモ不存候ヘ共如何ニモ安心難
相成候又有志黨ノ輿論ハ天下ノ命脉ハ 一橋公 越前老公ニ有之ト
申事ニテ候 一橋公當時楚囚御同様ノ御身ノ上越前老公亦如此ニ候
ヘモ天下ノ人望ハ御辭シ可被成様モ無之夫ニ反シ此兩公ヲ忌ミ候方

ヨリ見ル時ハケ様ノ人望有之人ヲ押シ込メ置候ハ誠ニ可恐ノ大敵ニ
候ヘハ寐覺メモ宜シカルマシク其處ヨリ如何成殘忍酷虐ノ姦謀ヲ運
ラシ御性命ヲ絶ツ計成儀ヲ目論見申間敷トモ難申其節 中將様如何
可被遊哉ト存候ヘハ實ニ寢食モ不安候又天下ノ大勢一變シテ鋤奸除
逆ノ時節有之間布トモ難申死灰再ヒ燃エ稿木花ヲ開キ候ハ、其節
中將様ハ如何可被遊哉老後ノ思ヒ出ニ其期ノ御盛績面親ニ拜見モ致
度尤右ノ節老拙罷在候迎何ノ見詰モ無之候得共忠愛ノ情不忍退去此
上萬一何様ノ御疑問可有之モ難計其節老拙罷在テハ爲天下御周旋
御盡力ノ御始末明白詳悉申開キ可致者ハ外ニ可有之トモ存セラレヌ
自然其時不分明ノ御答方ニ相成候ハ、御罪御一身ニ飯シ可申敷トモ
御案事申上候ヘハ願フテモ御糺彈相蒙度程ノ心底ニテ何ニシテモ此
表ニ罷在度御國ヘ引籠候思案ハ何方ヲ敲キ候テモ出不申夫故ニ死ヲ
惜ミ表向ハ安閑ト致居故衆人ヨリハ平氣ト見受可申候ヘ共中々平氣

處ニハ無之如前條種々無量ノ苦惱千緒萬端聊安堵ノ念ハ無之候衆人ノ平氣自若ト見受吳候處ハ孔明ノ彈琴ノ如ク夫レモ仕合ニテ中々方寸ノ碎慮ハ分寸ノ間斷モ無之候

右ハ退役引籠候方上策タルヘキトノ御忠告ニ隨ヒ兼候所以ナリ
一御明リ立候事件モ可有之哉ト先ツ〱閉口ノ處最早御慎モ百日餘ニモ相成候得レ何一ツ御宥免ノ御沙汰モ御承知無之吳々 中將様御一人ヲ乍恐罪ニ入レ其節御用取扱ヒ候者ハ不知顔ト申觸候由元ヨリ衆人ト論スルニハ不及候得レ畢竟御一人ニ御罪無之故ノ知ラヌ顔ニテ知ツタ顔ノ知ツタハ何ニ候哉御罪ヲ知ツタ顔ニ可有之候御罪無之故知ラヌ管御罪無之ヲ知ツタ顔ヲ致候ハ、夫コソ罪ニ入奉ルト申ヘケレ此儀ハ最初ニモ相辨シ候通リニテ衆人ト有職ト見込違ヒニ相成候境ニ候間能々御辨別有之度候御日數モ立候ハ、御宥免ト申ハ平時ノ御沙汰恐レ多クモ一天萬乘ノ

天子ヲサヘ隱岐ノ讚岐ノト致風聞候程ノ無間世界ナルニ御明リサスヘキ様ハ無之此上ニモ何様ノ誣妄可有之モ難計故萬般ノ苦心モ致シ候事ニテ引籠候事モ難相成候御申越ノ如キハ時勢ヲ察セサル無識ノ俗論ニテ不足辨義ニ候得レ御宥免遲シト退屈ヲセヌ爲メニ及贅言候右ハ總テ舞臺ニ上リ居リ候心持ト見物致シ候者ノ心持トノ差別ヲ論シ候事候間猶宜御斟酌御取捨可被下候已上

戊午七月十一日御目付高田孫左衛門迄指出内願書

私義天保九戌年江戸詰罷在候處於御國表 諸親院様御逝去ニ付 中將様御十一歳ニテ御養子被仰出田安御館方御引移御家督御相續被爲在其節私儀御用懸被仰付候以來別段之御懇命ヲ蒙リ奉リ追々要路ヘモ被召仕候得共不才無能之私候ヘハ尺寸之功業モ無之ノミナラス却テ不調法ノ義有之弘化ニ巳年三月御役御指免深く恐入罷在候處翌午年六月又々御役付被仰付刑餘之身ニ取り御鴻恩之程肝ニ銘シ冥加至極有難く仕合奉存候事ニ御座候然ル處同年七月不次非例之御拔擢ヲ以テ當御役被仰付爾來殊恩特遇海岳之高深モ比喩可仕様モ無之庸劣ヲ忘レ驚鈍ヲ不顧奉仕罷在候處昨夏御參府被爲在候後ハ就中容易ナラサル機密之御用向ニモ參與仕リ只管干

此一文モト
頭書ナリ今
此處ニ入ル
校訂者識

里之驥尾に縋り一時ノ機會ニ乘シ乍不及思召被爲立候御功業ヲ奉賛成度ト存込候
 ノミニテ素ヨリ幽莽昏愚ノ私ニ候ヘハ豫防ノ策戒懼ノ略ニ乏敷 中將様御身上ニ
 今日ノ奇禍ヲ來タシ御家督御已來賢明無比ノ御盛名ニ御汚辱ヲ被爲執候ヲ衰世御
 挽回ノ御大業モ一時ニ挫折ニ被爲及候御義私式迄無念骨髄ニ徹シ憤懣方寸ニ溢レ
 候次第候ヘハ 中將様御胸中モ如何計ニ可被爲在ヤト存詰候ヘハ軀肝如碎更ニ生
 存之心地も不仕万死猶不足斧鉞不知所遁候ヘ共風雲之想未消千里ノ志難灰候ヘハ
 老公御衷憐之御海量ヲ以テ昏愚之身御厭棄之思召も不被爲在候ハ、生キテ 老公
 ニ隨ヒ奉リ既往ヲ謝シ將來ヲ謀リ聊御遺悶御排鬱ノ御敵手トモ相成候ハ、無此上
 御厚恩ト雖有仕合奉存候元來

老公ノ御忠義金石ヲ貫キ公明日月ヲ爭ヒ候御義ニテ

東照神君淨光公在天ノ靈も被爲在候ヘハ御開運ノ御時節無之ト申義ハ有御座間敷
 候ヘハ何卒夫迄ノ處依舊御手許ニ被召仕被下置候ハ、已ニ老境ニ臨ミ衰朽月ニ相
 加ハリ頑鈍日ニ甚布候得ヒ永ク望郷ノ念ヲ絶シ身命有ン限リ日夜眠近奉仕ノ力ヲ
 竭シ早晚御開運ノ日ヲ仰望仕度ト奉存候仍之此上勝手ケ間布願ニハ御座候ヘハ御
 役名モ何トカ被改 中將様御方振退勤定府ヘ被仰付被下候様奉願上候是等の趣政
 府ヘモ御申達宜御取計可被下候已上

七月十一日

一、同時天方游庭

孫八 友益 澁谷權左 衛門定清 兩老ノ忠告ニ謝答スル書 可惜來書 ヲ失ス

前書略過ルル七月 中將様御義何共恐入候御次第ニ付私義猶更心痛可
 仕ト御推察被成下候由夫ニ付 中將様御側近ク諸御用取扱ヒ候面々
 別テ私左内等ハ甚以沙汰不宜退役モ不仕候半テハ難相叶事ノ様ニ喧
 布申立候由又申シ方ノ意味大同小異ハ御座候得ヒ何分此儘ニ罷在候
 テハ難相濟趣意ニテ御一家御親類ノ前當リ障リモ構ハス聊ノ禮義モ
 ナク甚敷人口ニテ私耳ニモ入り可申候得共兩君ノ御聞取程ニハ有之
 間布トノ被仰合ニテ御間柄御親友ノ御因縁ヲ以テ御懇示被成下候由
 若又退役願指出シ 兩殿様思召ニ相背ケ或ハ政府ノ議ニ違ヒ又第一
 ニ其身ノ決心モ可有之事故右願ヒ御進メハ難被成候得共御覆藏被下
 候テハ御一家御親友ノ廉モ不相立ニ付於御地不評判ノ次第白地ニ御
 忠告被成下一身ノ進退ハ方寸次第取計ヒ候様何分世評御垂示被下候
 ハ、心得ニモ可相成哉トノ御相談ノ上被仰下候旨段々御紙上ノ趣共

謹テ拜承敬服仕候如被仰下私耳へモ端々相聞エ不申ニモ無之候得ルケ様ニ御親切ニ御細示被下候ト申ハ實ニ御一家御親類ノ御好ミ無此上御義ニテ私義ヲ御心頭ニ被懸被下候へハコソト肝膽ニ銘シ難有拜謝候則先便淺井權十郎ヨリ一書指遣シ淡水君ヨリ粗御沙汰ノ趣有之由申越且島田近江殿出府ニ付御傳語ノ趣モ承知仕リ不一方御苦勞被成下候義厚難存奉存候ニ付則今便ハ私赤心モ一應申上置度ト昨夜別紙ノ通り相認候處今朝飛脚着前條御紙上ノ趣共實ニ無量ノ御懇篤ニテ兩君ノ思召通り速ニ領承仕リ早速退役等モ相願ヒ錦地ノ人口モ消滅仕候様不仕候半テハ如被仰越趣ニテハ私一己ノ進退ニヨツテ御一家御親類ノ御面目ヲモ相汚シ候姿ニテ重々恐縮千萬ノ次第ニハ御座候得ル此度ノ御儀ハ天下ノ大事國家ノ大事ニ關係仕候事ニテ私一身ノ大事ニハ無之場合ニ付當任不讓師トカ申如ク此時ニ於テハ私赤心一杯ノ御奉公モ不仕候ハテハ

中將様多年ノ恩遇ヲ可奉報期モ無之ニ付粗別紙ニモ相認且權十郎迄指越候紙面ニモ相認置候間是等御照覽私心底ノ艱難辛苦偏ニ御憐察可被成下候仰セニ隨ヒ不申候へハ御懇切ニ戻リ我意ニ募リ候様ニテ千萬恐縮ノ至ニ御坐候得共中々以左様ノ筋ニハ毛頭無之近ク人情ヲ以申候へハ何ヲ以テ此表ニ長居仕リ度義可有之哉留守中ニモ種々心配至極ノ義ル有之小兒共ノ死活モ如何可相成哉ト存候程成義モ有之且長詰仕罷在候得ハ物入トテモ不容易此表ニテモ晝夜安堵モ難仕次第何一ツ取り得ハ無之唯今退役ニテモ相願ヒ歸郷閉居仕候様相成候ハ、夫社何鼻焦熱ノ苦ヲ脱シテ九品ノ淨土へ轉生仕候如ク可有御座候得ル其極樂淨土ニモ換へ難キ儀御座候故未來永劫ノ苦難モ受ケ脱離ノ念ヲ絶テ兩君ノ如ク六道濟度ノ佛菩薩ニ等シキ垂誠ニモ難奉隨ハ何等ノ因縁ナルヤト實ニ我ナカラ解シ得兼候位ニ候得共如何ニ致候テモ唯今退去仕候義ハ私ノ道心承知不仕候故敬諾ノ貴答モ仕兼

候事ニ御座候世間ノ見ル目ハ御上ノ事ハ余所ニシテ負ケ惜ミニ勢利ヲ貪リ威權ニ離レ申間布ト廉耻モナク厚顔ヲ拭フテ勤メ居候義ト怒致候モ實ハ聊無理ナラヌ事ニテ則此度ノ御一件ヲ憤歎悲痛ノ餘リニ咎ヲ私共ニ飯シ度キ故ニテ夫モ中將様御遺德ノ衆人ニ治キ處ニテ是以テ難有御儀ト却テ大慶仕候次第ニテ曾以テ私ヨリ憤慍ノ念ハ無御座候乍併要路ニ立候見識ト世路ニ居リ候見識トノ差別ハ有之候儀故御書面ノ要文ヲ拔萃仕リ辨解ヲ附シ入貴覽申候於私ハ解嘲ノ積リニ御座候得共元ヨリ愚昧ノ上御大變以來別テ昏蒙罷在候得ハ心得違ノ義モ多々可有御座候ヘハ辨解ノ非難ハ不及申別紙共ノ趣モ義理ニ戻リ忠義ニ背ケ候儀モ御座候ハ、何分ニモ嚴敷御督責御教諭可被下候私肺腑ニ落候義候ヘハ今日唯今ニテモ退役ハ不及申切腹ニテモ自殺ニテモ聊不奉辭心得ニ御座候間イツレニモ私心底丈ケハ忠義無私ヲ心掛ケ罷在候義ヲ幾重ニモ御憐察可被下候世評ハ兎モ角モ私赤

心丈ケハ無理ナラスト御同意御安慮モ被成下候ハ、生前ノ本懐不過之奉存候右ハ貴報御禮迄下略

來書此度中將様ケ程迄ニ被蒙仰候上ハ……可罷在筋ニ無之哉此善惡ニヨラスト申ハ無闇ナル事ニテ右被仰蒙候御筋合善ナレハ何處迄モ御同意ニテ一足モ引キ不申心得余人ハ不知私ニ於テハケ様ニ被爲成候ヲ御見捨申上退役致候義ハ如何ニモ仕リ難クイツ迄モ斯クテ罷在公邊ヨリ御察度ニテモ相蒙候ハ、夫社中將様御同様ニテ本懐至極中將様被仰蒙候ニ恐レ足早ヤニ逃ケ候存念ハ曾テ無之候又御筋合惡敷御義ナレハ是レ迄ニ御諫爭申上私諫死ノ後ナレハ不及是非命有之内ニ候ヘハ被對公邊御不忠御惡事等ハ恐ラク御サセ申間布積リ此度ノ御義モ決テ御惡事ニハ無之日本ノ國是天下ノ公議善美ヲ被盡候大忠大義ノ御趣意候處夫レガケ様ニ被爲成ハ菴里ノ危難御同然ニ御座候善ヲ善ト知り候故何トモ思ヒ不申惡ヲ惡ト知ラヌ顔ト

ハ違ヒ申候總テ世評ノ如キハ事情ニ疎ク時勢ヲ不察本末ヲ明ニセス
唯 公邊ノ御處置トサヘ言ヘハ至當ノ事ト存候故ニ其至當ノ被仰蒙
ヲ御罪咎モ無之様ニ知ラヌ顔ト申ニテ 中將様ヲ乍恐罪人ト奉見上
候見當違ヒノ論ニ御座候

中將様ニ御罪無候ハ、御家來ニ罪可有之様モ無之候乍併御罪ノ無之
ヲ御罪ノアル様ニ被仰蒙候ハ則チ御側ニ附添居候御家來ノ罪其罪ヲ
知ヌ顔ト申意味モ可有之候得テ夫レニテハ 中將様ノ是迄被成候事
ハ御家來ノ御勸メ申上ゲ次第被遊候事ニ相當リ候テ其被遊候事御惡
事ナレハ如何ニモ御家來ノ罪ニ候得共此度之御儀ハ御善事ニテ候故
其御善事モ御家來ノ御勸メ申上ケ次第ニ遊バサレ候ニテハ乍恐 中
將様ノ御德業ト申モノハ無之事ニ相成候私共モ是迄御自身様ニテ御
手ノ御届キ被遊兼候處丈ケヲ御意ニ隨ヒ御下タ働キ仕候事ニテ御忠
誠ノ御大業ニ於テハ聊以私共ヨリ奉增添候儀ニハ無之總テノ御美事

ヲ御家來共ノ預リ知ラヌ則君德ノ盛大ナル故ニ候ヘハ假令知ツテモ
知ラヌ顔ヲ致候ガ君ノ德ヲ稱揚スルニ當リ申候此度ノ御儀ハ天地ヲ
貫キ候御善事タル事天下後世ノ議論ニカケ決テ相違無之候ヘハ個様
ニ被仰蒙候御一身ニ被爲取候テハ御困難恐入候得共御美德ノ上ニ於
テハ聊モ御缺損ニハ相成不申天下ノ人望モ益飯服仕候事ニ候間ドコ
迄モ御過ラシク知ツタ顔ヲ致候テハ難相濟事ト心得申候

來書 三四人モ…可相成事歟

中將様ニ御聞ラキ事ハ素ヨリ聊モ不被爲在候得共ケ様ニ被仰蒙候ハ
乍恐公邊ノ御聞ラキニテ候ヘハ此時三四人モ退役ニテモ致候ハ、實
ニ 中將様ニ御聞ラキ事有之候ヲ家來共ニテ引受候カ又ハ銘々ニ後
口聞ラキ事モ有シカト見込可申ハ必然ニテ夫レニテハヤツテ見ゾク
ガ當ツタト申物ニ相成候サスレハ三四人モ致退役候得ハ御明カリハ
扱置却テ御聞ラキ事モ有シカト申嫌疑ト可相成事ニテ候此度ノ御一

舉元ヨリ青天白日ノ被遊方毫髮御聞ラキ事無之候得ハ御家來共ニ於
テモ白晝ニ化ケ物ハ一人モ無之何レモ明白至極ニ御座候退役ヲ不致
處ガ御明リヲ立テ候處ニテ候此見込表裏ノ違ヒニ相成候事ニテ此等
ハ總テ私共ヲ嫉ミ候私心ヨリ出候事故 中將様ヲ御聞ラク致候様ノ
論ニ相成候乍併肴モ喰ハスニ佛ニ憎マレ候私ノ不徳ハ如何トモ難致
恐入候次第ニテ是ハ申譯無之御座候

來書 乍去上ヨリ……御座候

是モ上ヨリ難被仰付ハ何故ニ候哉上ヨリ難被仰付程成ヲ下ヨリ願出
候テハ愈答ヲ上ニ歸スルニ當リ申候已ニ可相願ト申人モ有之候得共
強辨シテ指留候事ニ御座候私ハ被仰蒙候哉否ヤ左ノ通り御直筆御
書下ケ頂戴仕リ誠以冥加至極難有奉存候乍序御吹聽申上候

但御書下ケハ前記有之故略之

來書 水府……及承候ニ付

水府ニハ兼々老公ト當公御父子ノ間ニ嫌疑有之御附之御家來モ同様
故此度ノ機會ニ奸人共時ヲ得テ高松侯へ附込ミ同侯ヨリ大老へ仕込
ミ老公ノ羽翼ヲ剝キ候事ニテ以ノ外ナル内亂水府ノ内幕モ此ニ至ッ
テ見エ透キ天下有志大ニ歎息シテ水府不足頼大亂不日ニ起ラント申
セシカ果シテ追々御聞及ヒノ通りノ次第ト相成候 老公元ヨリ罪無
之御家臣亦罪無之處讒言ヲ信シ忠良ヲ退ケ候ヨリ大亂ト相成候夫故
前條ニモ申述候通乍恐 公邊ニ御明カリ無之故萬事甚氣遣ハ布恐ロ
シキ事共ニ御坐候

來書 御家ノ儀ハ……深ク心配モ可有之儀

御家ノ義ハ難有事ニテ事情ヲ承知不致衆人ノ彼是申立候迄ニテ水府
ノ如キ姦人讒者モ無之故 公邊ヨリ御手ノ入ルヘキ様ハ無之候水府
ハ右之通り尾州ニテモ田宮彌太郎長谷川總藏今一人國許へ遣ラレ申
候誰レカ見テモ此者共尾公ヲ御勸メ申上御不都合ノ事ニモ相成候ト